魔法先生ネギま！ ～御狐様が見てる～

あいあむウィーゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！　～御狐様が見てる～

【Ｎコード】
Ｎ８３６１Ｕ

【作者名】
あいあむウィーゼル

【あらすじ】
緩やかだけど流れていく時間。騒がしい“非日常”の中の“日常”。
だがそれは泡沫の物に過ぎない。赤毛の少年と少女達が巻き起こす珍騒動に、否応無しに巻き込まれていく。
これはある一組の夫婦の物語。彼らがその中で求めるのは、揺るぎなき平和か。それとも……。アンチ要素を含みますが、ネギ君は常識人です（↑ここ重要）。気まぐれ更新なので、かなり不定期になるかもです。

第1話：バカップルのいる日常（前書き）

と言うわけで、気まぐれながらも始めました。
「1つに絞ってやれ」と思ってる人もいるかもですが、あくまで気が向いたときや息抜きにやりますので、かなりの不定期になるかと。
とりあえず、お楽しみください。どぞ。

第1話：バカップルのいる日常

「んっ……」

微かなうめき声を上げて、女が身を起こした。
耳を澄ませば、外からは小鳥のさえずりが聞こえてくる。
カーテンで閉ざされた窓からは光が差し込んでおり、既に朝を迎えているのだと分かる。

「……」

布団の上の枕の数は２つ。
本来、自分の横にあるべき姿が無いのに気づき、女はむっとしたような顔になる。
そしてそのまま飛び起きると、襖を開け放ち、怒声を放った。

「！　何で妾より先に起きておるのじゃ！！」

その声に呼ばれ、台所の方から１人の少年がとてとてと歩いてくる。
１５歳ぐらいだろうか。体格は１５０ｃｍにも満たないほど小柄で、やや赤みがかった茶髪が特徴的だ。
現在はエプロンを身につけ、手にはフライ返しが握られている。

「君が起きないからでしょ？　ほんとは今日、君が当番なのにさ」
「む、それは……まぁ、確かに妾が悪いのかもしれんが……」
しゅん、となる女性。と、少年は女性の様子に眉を顰める。
「……落ち込む前に服着てよ」
少年の指摘通り、女性は現在何も身につけていない。つまり、全裸だ。
ゆったりとした黒髪が背中を隠してはいるものの、前からは全部丸見え……少年の位置からは何もかも見えている。
それに気づいた女性は、にやりと蠱惑的な表情を浮かべ、少年へと縋るように近寄る。
「ほぅ？　どうした、興奮しておるのか？」
そう言い、ぎゅっと腕に抱きつく。
豊かな双丘の柔らかさが直に伝わるよう、わざと。
そしてそのまま、少年の下半身へと手を這わせようとして……手をはたかれた。
「バカ言わないの。何年君と夫婦やってるのさ。……もうすぐ出来るから、服着てきてよ」

「……なんじゃ、つまらん」

そう言い、ぷいっと寝室の方へと戻り、折りたたんであった衣服に袖を通し始める。
数分後、テーブルには向かい合って座る2人の姿があった。その前にはフレンチトーストと牛乳が置かれているが、女性は苦い顔をしていた。

「妾は「ふれんちとぉすと」は好かんのじゃが……」

「好き嫌い言わない。この前のお店で食べたやつより、君の口に合うよう改良したから」

「むぅ」

そう言われ、フォークとナイフで一口大に切り分け、口へと運ぶ女性。

「……悪くない」

その一言が女性の口からこぼれ、少年は満足そうな表情を浮かべ、牛乳を飲む。
そこからは楽しい朝食の時間……と言いたいところだったのだが、少年の口から出てきたのは物騒な話題だった。

「西の方が騒がしくなってきてる」

「西じゃと？　……やはりあの若造では下を抑えきれんかったか」

苦々しい顔でそう言い放つ女性。その様子からは「若造」を嫌っている節が見て取れる。
まぁ、嫌うのは当然だ。２０年前、最愛の夫をバッサリと斬り伏せてくれた恨みがある。

「土御門から『手を貸してくれ』だってさ」

「放っておけばよかろう。元々はあやつらの蒔いた種じゃ」

「そりゃそうだけどさ。下手したら、巻き込まれるのは妖達でしょ？」

「……むぅ」

１７年前の事件も、結局は何の意味も持たなかった。
どちらにせよ、少年も女性も京の都に今更興味は持っていないため、そこまで積極的になる必要は無いのだが。
……まぁ、気になるものと言えば、今も京の都に住まう同胞達の事くらいだろう。

「どちらにせよ4月末には修学旅行があるわけだし、顔出し程度には行ってくるよ」

「妾も行くぞ」

「……本気？」

「妾がいなくてどうするのじゃ。元々、京は妾の縄張りじゃ」

えへん、と胸を張る女性に、少年は微妙な顔をした。
と、そんな事をしている内に、時間は過ぎている。食事を終えた少年が立ち上がると、側にかけてあった上着を羽織る。
女性はそんな少年に抱きつくと、唇を奪う。
数秒間の接触の後、頬を微かに染めたまま、女性が少年から離れる。

「それじゃ、行ってくる」

「うむ。気をつけての」

――――神崎玖楼と神崎瑪瑙。
麻帆良でも1，2を争うバカップル夫婦として有名な彼らだが、これまでの会話から分かるように普通の人間ではない。
否、そもそも人間ですらない。彼らは１０００年以上を生きる人外の存在なのだから。

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

ボク、神崎玖楼の朝は早い。
最低でも朝７時には家を出なければ、あの通勤ラッシュに遭遇してしまう。
ここ、麻帆良学園都市の通勤ラッシュは都心の通勤ラッシュにも匹敵する規模で、しかも勤務地が勤務地なだけに揉み合うのは勘弁願いたい。

「おはようございます、神崎先生」

「ええ、おはようございます。今日も早いですね、新田先生」

職員室へ入ったボクを出迎えてくれたのは、眼鏡をかけた年配の男性職員。

彼は新田先生。麻帆良学園女子中等部の学年主任であり、広域指導員を兼任している男性だ。

「学園長からですが、今日の２－ＡのＨＲをお願いしたいと」

「今日も、でしょう？」

「……違いない」

顔を見合わせ、苦い表情を浮かべる。
ボクは２－Ｆの担任なんだけどねぇ……。
２－Ａの担任教師はタカミチ・Ｔ・高畑。３０代にさしかかる辺りの年齢のはずだが、どう見ても４０代のオッサンにしか見えない男性教師だ。
この高畑教諭。仮にも１クラスの担任だというのに、何故か出張が多く、その度に他のクラスの教師（主にボク）が被害に遭っている。

「おまけにＡ組がくせ者揃いですから」

「ははは……確かに」

正直にぶっちゃけると、２－Ａは魔の巣窟だ。
何かしらの能力・才能に特化した生徒が集まっており、とにかく騒がしくハイテンションなのが特徴である。
……ちなみに、一分野に突出し過ぎているため、クラスの学力が学年最下位を独走しているのは有名な話だ。

（ま、ここへ来てからもう２０年だけどさ）

２０年前、俗に言う“大戦”が終わった直後、ボクら夫婦は魔法世界から旧世界へと移り住んだ。
あまり昔の事を語るのは趣味じゃないんだけど、戦争で色々と暴れすぎて、居心地が悪くなっていたというのが本音だ。
そんなわけで、魔法世界よりは派手に動けないけど、他と比べて過ごしやすいここ、麻帆良へと移り住んだのが２０年前。それからは趣味で学校に通ったりしてる内に、こうして学校で教鞭を執るようになったのだけど。

「それでも、あの過剰なスキンシップはどうにかして欲しいですよ。ボク、一応妻帯者なんですし」

「そう言えば、そうでしたな」

「この前なんて、女子校でデレデレしてないかって睨まれましたし」

ああ見えて、瑪瑙は嫉妬深く、独占欲が強い。
もし、生徒とデートでもしてみたら、その相手を文字通り八つ裂きにしかねない。そしてボクは朝まで一晩もの間、搾り取られる。
……画面の向こうの君、「羨ましい」とか思わない。もう何十年も昔の話だけど、それに近い状況でそうなって、ボクは初めて「服上死」という言葉を知ったよ。

（勘弁して欲しいよ、ホント）

F組（うちのクラス）はずっと大人しいって言うのに……はぁ。

〔Side Out〕

〔Side Menou〕

妾は専業主婦でな、当然ながら家事の大半は妾の仕事じゃ。
昔は全て手作業じゃったというのに、ここ数年は掃除機やら洗濯機やら出てきて、本当に便利じゃのう。
近頃では「ケータイデンワ」というものも出てきておるし……う

ぅむ、これが「じぇねれーしょんぎゃっぷ」という奴かの？

『お兄ちゃんどいて！　そいつ殺せない！！』

むぅ、修羅場じゃのぅ……。
座布団に座り、煎餅をかじりながら「てれび」を眺める。

「……何の用じゃ？」

振り向く事なく、妾は背後へとそう尋ねる。
気配を読むまでもない。空気の流れですぐに分かる。
それにしても久しいのぅ……何年ぶりじゃ？　真白よ。

「……お久しぶりでございます、御館様」

その言葉と共に姿を現したのは、真っ白な髪をしたおなご。
ちょっと変わった容貌じゃが、その髪と同じ白い猫耳が生えており、
極めつけは尻から2本の尾が生えておるところ。
こやつの名は真白。妾の昔の部下で、猫又と呼ばれる妖の一種じゃ。
ちなみに名前の由来は毛の色が真っ白じゃったからという、わかり
やすいところからじゃ。

「御館様はよせ。妾はとうに隠居の身。どこにでもいる若奥様じゃ」

今、「どこが若奥様だ」という声が聞こえた気がしたが……気のせいじゃろう。
それで何の用じゃ。妾も暇では無い。さっさと言え。

「御館様に是非、座へお戻り頂きたいと」

「断る」

言うたはずじゃ。妾は隠居の身じゃと。
お主とてそれを知らんはず無かろう。妾と玖楼が隠居を表明した時、お主もそこにおったのじゃから。

「それは、分かっておりますが……」

「……どうせ、西のバカ共が煩いのじゃろう？」

「う」

西を牛耳っておる「関西呪術教会」の長の名は近衛詠春。戦にばかりかまけた愚か者じゃ。
２０年前の戦争で英雄になって帰って来て、近衛家に婿入りし、西の長に祭り上げられたはいいが、その実態は飾り物。
戦事には秀でておるが、政には疎い。その所為で被害を被るのは西を居城とする妖達。

……まぁ、17年前のあの事件で釘を刺しておいたから、心配いらぬと思うていたが……。

「何があった。些細な事でお主が妾の元へ来るはずが無かろう」

「……過激派の動きがより活発化しており、神鳴流の一部を取り込む動きを見せております。近衛詠春では抑え切れませぬ」

やはりの。

玖楼が言うておった通り、既にそこまで事態が進んでおったか。

ああ、過激派と言うのは、分かりやすく言うと「東の連中を追い出そう」としとる輩の事じゃ。それに対し、「東と仲良くしましょう」と言うとるのが穏健派じゃな。

近衛詠春は穏健派寄りの思想の持ち主じゃが、あやつの義理の父が東の長で、配下からは「東の傀儡」と揶揄される始末。

「……仕方ないのぅ」

妾の言葉に、真白は目を輝かせる。

ああ、勘違いするな。今すぐ戻るわけで無ければ、現役に戻るわけでも無いぞ？

「ちょうど、玖楼が仕事で京へ行く予定があっての。それに合わせて妾もそっちへ行こう」

「構いませぬ！　御館様が戻られれば百人……いえ、千人力でございます故に！」

全面戦争、とはいかぬが、それなりの戦になるじゃろうな。
最悪、近衛詠春を排する事も考えておく必要がありそうじゃ。その場合、新たな長を選ぶ必要があるな……。

（誰がいいかのぅ）

我らにとって最適なのは、毒にも薬にもならん者じゃ。
血筋的にも妥当な人間と言えば、近衛詠春の娘で麻帆良在住の近衛木乃香かの。幸いにも人格面に問題は無いし、適当に幻術をかければ便利な人形に早変わりじゃ。
護衛も役立たずじゃし、その気になれば誑かすのは軽い軽い。

「妾たちがそっちに行く前に、めぼしい人間を選んでおけ。後はどうとでもなる」

「はっ！」

第1話：バカップルのいる日常（後書き）

瑪瑙「と言うわけで、妾達の活躍が始まるぞ！」
玖楼「まぁ、戦闘シーンとかはずっと先になるし、ボク達が表立って活躍するのもずっと先だけど」
瑪瑙「……（縋るような目で玖楼を見る）」
玖楼「そんな目をしても、ダメなものはダメ。そーゆープロットだもの」
瑪瑙「……まぁいい。それより、その「ぷろっと」とやらの説明をすべきじゃろう？」
玖楼「そうだね……まず、読んでくれた人は分かるかもしれないけど、この小説はアンチ成分を含みます。対象も何となく分かるかもだけど、アンチされやすいネギ君は除外される予定です」
瑪瑙「作者曰く「思いっきり常識人に書いてみたかった」と言っておるが、何なんじゃこれ？」
玖楼「ボクも詳しくは知らないけどさ、前に書いてた奴で散々批判浴びて、色々と考える結果になったみたい。で、ただアンチだと在り来たりになっちゃうから、他の人がやらないような方向性でやってみたかったんだって」
瑪瑙「それで思いっきり常識人か。……それもある意味、原作に対する「あんち」じゃと思うがのう」
玖楼「いいんじゃないの？　原作もかなりgdgdになってる所があるし、未だに明らかになってない謎だって多いし」
正直、作者は明らかになってない部分が今度明らかになるか心配です。
瑪瑙「とにかく！　今後の進行は原作沿いになるそうじゃ！」
玖楼「まぁ、時々ボク達の過去編が交差するかもしれないけど、基

本的には原作に沿って進む事になるから。……というわけで、また お会いしましょう」

第2話：変な奴がやってくる（前書き）

と言うわけで、変なのが来ます。
同時に、他の作品のキャラが出ます。原作は関係無いですよ、多分。

第2話：変な奴がやってくる

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

「高天原鏡士郎？　誰じゃ、それ」

「ほら、２０年前のアレでつっかかってきた奴だよ」

布団の中で一戦構えた後、玖楼が思い出したかのように語った名前。
あ～、そう言えばおった気がするのう……あのバカ共と一緒にいた、変な奴じゃな。
確か力ばかり無駄にでかくて、妾の事を見て「俺の物になれ」とか戯けた事を言っておったのう。当然、返答の代わりに蹴り飛ばしたのは言うまでもないが。

「そやつがどうかしたのか？」

「麻帆良に来るみたい。例の問題児クラスの副担任として」

……大丈夫かのう？　妾たち、面識あるぞ？
妾はともかく、そなたは学校で顔を合わせるじゃろうし、大丈夫か？

「大丈夫。２０年前に記憶処理しといたから、何も覚えてないでしょ」

「それはそうじゃが……」

「それでも突っかかってくるんなら、適当にあしらうだけだし」

表向き、妾たちは一般人じゃ。下手に力を使うわけにはいかん。
ま、玖楼なら力を使うまでもなく、無力化する事くらい容易いじゃろうがの。

「そんな事より、もう一戦どうじゃ？」

玖楼の下半身へと手を這わせる。……おお、もう４回目じゃと言うのに元気じゃのう。
可愛らしい外見に反して、ここだけは猛々しい。

「んっ……」

まるでおなごのように頬を赤く染める玖楼。
思い出すのう。初めて喰ろうた時も、このように初々しかった。
あの頃から全く変わらぬ、愛しい愛しい玖楼。獣の妾にも優しく触れてくれた。

（愛しいのう……）

それに舌を這わせ、また妾たちは享楽の宴へと突入した。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

現在、朝礼の場にて、ボクはげんなりとしていた。
他のクラスはともかく、うちのクラスはボク同様にげんなりとしている。その理由は……。

「皆にも紹介しておこう。今日から２－Ａの副担任に就任した高天原鏡士郎先生じゃ」

「高天原鏡士郎だ。よろしく頼む」

そう言い、ファサッ……と髪を掻き上げる銀髪オッドアイの男性。
その瞬間、女生徒達が歓声を上げる。なお女生徒だけでなく、女性職員もキラキラした目で彼を見つめている。
……唯一の例外がうちのクラス。「いくらイケメンだからって、アレはない」とばかりに、他のクラスの生徒達の態度にドン引きしている。

（うーん、魅了系の魔法でも使ってるのかな？）

うちのクラスだけこんな反応なのは、多分ボクの所為だ。
ちょっとばかり特殊な身体を持っているので、その影響が周囲に出ているのかもしれない。
まぁ、影響と言っても幻覚や幻惑のような精神に変調をもたらす物を無効化するとか、割と＋なものばかりだけど。
そのため、うちのクラスの生徒達は変な物を見るような目で、他のクラスの生徒や、その原因を作った高天原を見つめている。

（しかし、アイツも変わってないね～）

高天原鏡士郎。彼の正体は言うまでもなく「魔法使い」だ。
それも２０年前の戦争において、最強の魔法使い達として呼び名高い“紅き翼”の一員として戦地を駆け抜け、英雄ともなった人物で

もある。
英雄と言えば聞こえはいいけども、その実態はチンピラに近い。
確かに強いが、女に目が無く、さらに軽薄。瑪瑙に言い寄ってた時、何も言わずに燃やし尽くしたのはいい思い出だ（完全に炭化した状態から復活したのだから、ゾウムシ並の生命力とも言える）。
そんなこんなで朝の集会は終わり、いつものように授業を進め、職員室で昼食を取っていた頃だった。

「……神崎先生」

その声と共に職員室の戸を叩いたのは、青い顔をしたクラス委員長。
要件の内容が分かってしまうだけに、災難だとしか言えない。

「うん、分かってる。高天原先生の事でしょ？」

「はい……」

がっくりとしたままで、言葉を紡ぎ出す委員長。
何でも、うちのクラスの子が何人かちょっかいをかけられたのだとか（可愛い子いるからねぇ）。
そりゃあ、集会であんな反応されたら気にはなる。でも、それでちょっかいかけちゃダメだと思うけど。

「それで、ちょっかい出されたのって誰？」

「篠ノ之さん達5人です」

ああ、やっぱりね。
うちのクラスの中でも可愛さが突出しているだけに、他の輩からもちょっかいを出されやすい5人がいる。
篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ。
……実はこの5人、ある1人を狙って凌ぎを削るライバル同士でもある。

「分かった。5人からも後で話を聞いておくし、呼び出しお願いしてもいいかな？」

「はい」

そして、授業進めたり、学園長に抗議したり、高天原にも注意したりしてる内に、あっという間に放課後になってしまった。
新田先生に話を通して、生徒指導室を開けてもらい、そこに5人の生徒を招いた上で話を聞いていた。

「というわけなんです」

一同を代表し、何があったか簡潔に説明してくれたのはセシリア・オルコット。
イギリスからの留学生であり、上流貴族の出自であるというだけに、

普段の立ち振る舞いからは気品が溢れている。

「……それ、本当？」

「残念ながら」

篠ノ之箒がボクの疑問にそう答える。
剣道部でも有数の実力者として有名であり、去年の大会では全国制覇を成し遂げた強者でもある。
ちなみに、彼女のファンクラブは「ファース党」と呼ばれているそうだけど……その命名理由は分からない。

「ラウラが絡まれてる子を助けたのが、そもそもの始まりだったんです」

「うむ」

シャルロット・デュノアの言葉を、ラウラ・ボーデヴィッヒがそう肯定する。
フランス出身のシャルロット・デュノアは大企業のご令嬢らしいが、その複雑な出自から幼少期は男性として育てられていたのだとか。
ラウラ・ボーデヴィッヒはドイツ軍の英才教育を受けて育ったため、一般常識に疎いところがある。
そんな彼女は茶道部の所属で、同じ茶道部の女子（Ａ組の子。誰だったっけ？）が絡まれていたのが全ての始まりだった。

「で、そいつ『何でＩＳキャラがネギまにいるんだ！？』とかワケ分かんない事言い出して、いきなり迫ってきたんです。それであたし達も応戦して……」

鳳鈴音がそう話を締めくくった。
中国からの留学生である彼女は、「セカン党」なるファンクラブを持っているそうだが、これまた何故そんな名前なのか不明だ。

「……なるほど」

分かってたけど、これは明らかに向こうに非がある。
さっきもちょっと注意しに行ったけど、あれは明らかに調子に乗ってた。
だって、ボクが普通に言っても「モブキャラが黙りやがれ！」って返されたし（殴られかけたけど、避けたので平気）。

「うん、分かった。とりあえず君たちも帰っていいよ。わざわざ呼び出してすまなかったね」

５人が帰って行ったのを見て、ふぅとため息を吐く。
学園長にも抗議しに行って来たけど、やはり何処吹く風で流されてしまい、有耶無耶になってしまった。
だが、何の収穫も無かったわけでは無い。
この変な時期にわざわざ副担任……それも英雄とまで呼ばれるほ

どの実力者を呼び寄せるには、それ相応の理由があるはず。

「例えば、誰かを呼び寄せようとしているとか」

経験の浅い何者かを麻帆良に招き、副担任をその補佐に当てる……。

……うん、自分で言っててそれは無いな。

いくら学園長がかなりの無茶ぶりをしまくって、その度にボク達一般教師が迷惑を被るからって、さすがにそれは無いか。

てゆーか、ＩＳキャラって何さ。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　ｏｒｉｓｈｕ〕

よう！　俺は高天原鏡士郎、俗に言う「最強オリ主」だ。
カミサマのドジとやらで死んじまったみたいだが、そのお詫びでこの「魔法先生ネギま」の世界に転生したってわけだ。
それにしても、ここに来るまで大変だったぜ。大戦に介入して“紅き翼”入りしたのはいいけど、“完全なる世界”がウザイ事ウザイ事……。
第一目標のテオドラはゲット出来たが、アリカは手に入らなかった。
ちくせう、これが歴史の修正力かよ。

「まぁ、それは今後次第だな」

今日、俺は麻帆良学園女子中等部の教師となった。
教員免許なんて持ってなかったが、その辺はぬらりひょ……学園長があれこれしたらしい。
正義の魔法使い（笑）の手先になるつもりは無いが、俺の目的のためには麻帆良学園にいる必要がある。
そう、薬味坊主を抹殺し、Ａ組の女を俺の物にするために！！
手始めにエヴァの呪いから……と思ってたんだが、思わぬ邪魔が入った。
ていうか、何でネギまの世界にＩＳのキャラがいるんだよ！！　あれ完璧ラウラだったぞ！？

（いや、眼帯の位置が違うチンク姉という可能性も捨てきれないか）

まぁ、その辺りはどうでもいい。
この世界にとってしてみればモブなんだろうが、それでも手に入れるだけの価値はある。
しかし、何だったんだ？　俺にＳＥＫＫＹＯＵなんてしようとしたモブは。神崎とかどうとか言ってたが、俺の行動にケチ付けやがって。

「薬味が来るまで後１ヶ月ちょっとか」

まずはアスナに「失恋の相」の事とか、脱がしたりした事を言ってやろう。
くっくっく……お前にパートナーなどやらん！

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｔｈｅｒ〕

ウェールズの山奥にある隠れ里。
その中にそびえ立つのは、メルディアナ魔法学校。
今、４人の魔法使い見習い達が卒業を迎えようとしていた。

「卒業証書授与―――この7年間、よく頑張ってきた。だが、これからの修行が本番だ。気を抜くで無いぞ」

豊かな髭を生やした老人……メルディアナ校長の言葉に、卒業生４人がビシッと真っ直ぐ立つ。

「ネギ・スプリングフィールド君」

「はい！」

校長の言葉に、ネギと呼ばれた少年が前へと進む。
ネギ・スプリングフィールドはかの英雄、ナギ・スプリングフィールドの実子である。
ナギの幼少期と瓜二つな彼だが、父親とは違い礼儀正しく、ひよっことは言え英国紳士の気質を持った少年でもある。

（立派になったな、ネギ）

校長も内心、孫の成長ぶりには感動していた。
６年前、故郷を失った少年を見守り続けてきたが、周囲の者達の手助けもあり、健やかに成長していった。
そして現在、こうして魔法学校を卒業出来るにまで至った。

「卒業おめでとう」

「ありがとうございます！」

こうしてこの日、運命の歯車が回り始めた。
本来進むはずだった物語は、微妙に異なる方向へと……。

第3話：少年、来訪（前書き）

注意：ここのネギ君は常識人です。

第3話：少年、来訪

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

６年前のあの雪の夜、僕は全てを失った。
世界は僕が思っていたほどキレイじゃなくて、僕が知っていたほど優しくなくて、どこまでも残酷だった。

「ネギ？　ぼーっとしてるけど、どうかしたの？」

「……ううん、何でも無い」

幼なじみのアーニャが、心配そうに僕の顔を覗き込んでくる。
アーニャは僕より１歳年上で、あの時は学校にいたから巻き込まれずに済んだ。

「それより修業先どこになった？　私はロンドンで占い師だけど」

「ちょっと待って。今開くから……」

さっきの式でもらった卒業証書を開く。
魔法学校を卒業したのが、修行の始まり。証書に精霊が修業先を書く事になってるんだけど……えっと「Ｔｅａｃｈｅｒ　ｉｎ　ｊａｐａｎ」。

「日本で、先生をする事……？」

「……え？」

なお、お姉ちゃんとアーニャが絶叫したのは言うまでもない。
日本で先生か。僕、まだ１０歳なんだけど大丈夫かな？
当たり前かもしれないけど、教員免許なんて持ってないし、相手も年上になりそうだし……。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

夕餉の席、疲れ切った玖楼の言葉に妾は凍り付いた。
えー……すまんが、もう1度言ってくれんかの？

「だから、１０歳の子供が教師やりにこっちに来るんだって」

「……いや、あり得んじゃろう」

妾達も体外常識から外れた存在だからと言って、さすがにそれは無いぞ。
そもそも、１０歳じゃろ？　教員免許とか、労働基準法とかそーゆーのはどうなっとるんじゃ。

「ボクに言わないでよ。ボク達だって完全に事後通告だったんだから」

あの様子じゃと、相当会議では紛糾したようじゃな。
元々、あの茄子頭の学園長は一般人を蔑ろにする傾向がある。一般教員には何も知らせず、魔法関係者だけで話を進めておったのじゃろう。
……そうなると、その１０歳の子供は魔法関係者という事になるの。

「いったい何者じゃ？　その子供は」

「君も知ってるでしょ？　ナギ・スプリングフィールドの息子だよ」

「……あの鶏頭か」

妾の顔はきっと苦々しげなものになっておるじゃろう。
ナギ・スプリングフィールド。“紅き翼”を率いて戦争を終わらせた英雄……となっておるが、その実態はほぼチンピラ。
紅き翼なんぞ大迷惑集団に他ならぬ。妾達も濡れ衣で奴らに追い回され、挙げ句の果てに世話になっておった者達にも多大な被害が及んだ（玖楼が必死に頭を下げておったのが今も忘れられん）。

「でも、息子の方は大分マシみたいだよ。向こうの知り合いに話聞いたら、顔はともかく、中身は正反対の真面目優等生タイプだって」

「ほう……」

意外じゃな。鳶は鷹を生むと言うが……。

「ま、少なくともボクには関係無いよ。ボクはＦ組の担任だし、Ａ組とは関わり合いになりたくないし」

「それもそうじゃな」

顔を見合わせて妾達は笑った。

……が、翌日、玖楼も妾も見通しが甘かった事を思い知る事となる。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

失敗した。
日本の朝の通勤ラッシュを甘く見過ぎていた。
ううん、まさか事故で電車が遅れるだなんて……おかげで時間もぎりぎりになっちゃった。

「急がないと……」

周りでも次々と生徒らしき人達が走り出している。
何て言うか……大きい街だとここまで凄いんだね。
それはともかく、僕も急ごう。

「……あれ？」

ふと、隣を走っている人が目に入った。
1人はローラースケートだけど、もう1人のツインテールの人は普通に走っている。
魔力や気で身体を強化してるわけじゃなさそうだし……世の中には変わった人がいるって聞いた事があったけど。

（うわ、この人……）

ツインテールの人、かなりドギツイ失恋の相が出てるよ。
それもダンディな年上の人に、かなりキツイ形で失恋するって言う……。
さすがにそういう内容は言えないので、黙っておこう。

「あんたねぇ～……！！」

「え？」

と、気がつくと目の前にそのツインテールの人が立っていた。
しかも相当怒っているようで、目はツリ上がっているし、その表情は険しい。おまけに手を硬く握りしめている。

「ぼーや、全部声に出てたで」

「え、う、嘘ッ！？」

そう言えばアーニャやお姉ちゃんも「考えた事を口に出す癖は直した方がいい」って言ってたような……。
そう考えている内に、ツインテールの人が僕の頭を片手で掴み、持ち上げて……ってこの人、力強っ！？

「坊や、こんな所に何しに来たん？　ここは麻帆良学園都市でも1番奥の方の女子校エリアで、初等部は1つ前の駅やよ？」

「そう！　つまり子供（ガキ）は入って来ちゃいけないの！！」

「あ、いえ……僕は学園長先生に用があって」

そう言うと、2人とも納得したような顔になった。
そうでなければ、誰だって女の人ばっかりの場所に来たいなんて思わないよ。
……でも、どうして女子校エリアに学園長室があるんだろ。

「おーい、ネギ君。お久しぶりでーす」

その声が聞こえて、校舎の窓の方を見る。
そこには身を乗り出した、眼鏡をかけた中年男性が１人。

「あ、た、高畑センセ……」

「お久しぶりでーす、タカミチさん！」

「「知り合いっ！？」」

タカミチ・Ｔ・高畑さん。お父さんの昔の仲間で、凄腕の魔法使い。
僕も１ヶ月だけ戦い方を教わった事があったけど……正直、この人の戦い方と僕の目指す形とは大分違うかなって思ったっけ。

「麻帆良学園へようこそ。いいところでしょう？　ネギ先生」

「え？　先生……？」

うーん、来たばっかりだから、いいところかどうかはまだ分かんないかな。
あ、自己紹介自己紹介……。

「はい。この度、この学園で教師をやる事になりました。ネギ・スプリングフィールドです」

「教師って……あんた、子供じゃないの！」

「はい。数えで１０歳です」

だから、本当はまだ９歳。
正直言って、僕もどうして学校で先生なのかって疑問なんだけど……。

「いや、彼は頭いいんだ。心配ないよ」

ハッハッハと笑いながらタカミチさんが降りてくる。
いや、頭がいい事＝人に教える事には繋がらないと思うよ。
人に教える上で大事なのは、内容をうまく噛み砕いてそれを言葉にする事で、頭が良くても人とコミュニケーションが取れなかったらうまくいかない。

「あと、僕に代わって君たちＡ組の担任になってくれるそうだよ」

タカミチさんがそう告げると、ツインテールの人が「ガーン」という音が聞こえるくらい落ち込んでいた。その表情はもう、世界の終わりかってくらいに暗い。関西弁の人は気の毒そうにそれを見つめている。

（う、うまくやっていけるのかな？）

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

（ん～……まぁ、及第点かな）

遠見の法を使い、Ａ組の様子を見ていたけど……まぁまぁだね。
１０歳の子供にしてみたら、初回であそこまでやれるんなら問題ないでしょ。

……まぁ、A組委員長の雪広さんが暴走していたのは……何も言わないけど。

「それじゃ、次の問題を……誰にしてもらおうかな」

ボクがそう言い、生徒達を眺める。
口にした瞬間、全員さっと視線をそらしている。……やれやれ、いつもこうだ。

「それじゃ今朝方、本校の生徒会の子からちょっかい出されていた幼なじみに厳しいツッコみを入れていた篠ノ之さん。お願い」

「何故それを！　……って、見ていたんですかッ！？」

「いや、あれだけ派手にやってればね～」

うん、あれは派手だった。思いっきり通行人の目を引いてたし。
とはいえ、全国大会優勝経験もある篠ノ之さんの剣撃を捌く織斑君も凄いと思うけど。

「じゃ、ここ訳してね」

「……はい」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　ｏｒｉｓｈｕ〕

おかしい。話が違うじゃねーか、神様よぉ。
確かに薬味はアスナに失言したみてーだが、それはうっかりって感じだったし、薬味も謝ってアスナも気にしてなかったみたいだった。
それに黒板消しのトラップにだって引っかかってたし……どうなってんだ？

「まさか、俺以外の転生者の仕業か？」

ちっ、こんな事なら薬味を幼少期から監視しておくんだったな。

……ん？　あれはのどか……それに近くには薬味の姿もある。
なるほど、アスナに魔法のバレるあのイベントか。ここで薬味にのどかを助けさせるわけにはいかん。
俺が華麗にのどかを救い出し、本屋フラグを建てさせてもらう！！

「とぅっ！！」

のどかが階段から足を踏み外した瞬間、俺が茂みから飛び出す。
瞬動で一気に距離を詰め、のどかが落下してくる地点に立つ。ふっ、俺、参上！
……あれ？　落ちてこないな。

「宮崎さん、大丈夫ですか？」

「は、はい～……」

あれ？
その声に上を見ると、そこには落ちかけていたのどかの手を掴んだ薬味の姿が……。
って、これどうなってんだよ！　薬味はここで杖出してのどか助けるんじゃねーのか！？　てか、さっきまであっちにいたよな？　どうやって階段の上にまで行ったんだよ！

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

初日の授業は、とりあえず僕への質問という形になった。
朝倉さん……だったかな？　あの人が生徒の皆さんの質問を纏めて、僕がそれに答える～って感じに。
……え？　黒板消しのトラップ？　風楯で浮かさなかったのか？
何言ってるの？
障壁なんてイギリスを出る前に解除してる。そりゃあ、ご期待通りに行こうかなって黒板消しのトラップはわざと受けたけど、まさかあそこまで連鎖式だったとは。

（神楽坂さんも許してくれてよかったな）

そうそう。学園長室を後にしてから、改めてツインテールの人……
…神楽坂さんにも謝った。
すると、神楽坂さんも分かってくれたのか、「もういいわよ」って
表情を崩して分かってくれた。
……一応、部屋が決まるまでは神楽坂さんと関西弁の人……近衛
さんの部屋にお世話になる事になったけど、泊めてくれるといいな
ぁ。

「……あれ？」

本を両手一杯に抱えた女の人が、視界に入った。
確かあの人は……そう、出席番号２７番の宮崎のどかさんだ。あ
んなに抱えて危ないなぁ……。

「あっ」

そう思っていた矢先、宮崎さんが足を踏み外した。
い、いけない！　あの高さだと落ちたら怪我しちゃう！
そう考え、すぐに足に魔力を集中させ、強く蹴り出す。宮崎さんの
腕を掴み、そのまま階段の上へ……。

「宮崎さん、大丈夫ですか？」

「は、はい～……」

本は落ちちゃったけど、また後で拾えばいいよね。
ふぅ〜……それにしても、危なかった。……今の、誰も見てないよね？

第４話：来訪の裏側で

〔Ｓｉｄｅ　Ａｓｕｎａ〕

変なガキ。
私のネギ・スプリングフィールドに対する第一印象はそれだった。
いいんちょの話によると、外国のオックスフォードっていう大学を飛び級で卒業したみたいだけど……なんか変。
……まぁ、朝方「ドギツイ失恋の相」が出てるって言われた時はショックだったわよ。でも子供の言う事だし、きちんと謝ってくれたし、これで根に持ってたら私がバカみたいじゃない。

「いや、アスナは立派にバカレッド」

「ふんっ！！」

「ふべろっ！？」

余計な事を言おうとした朝倉は、右腕のドギツイ一撃をぶつけてやった。
そ、そりゃあ……アルバイトに熱中しすぎて成績は良くないのは事実だけど。

「はぁ～……」

失恋の相が出てる。それも年上のダンディなおじさんに。
……これって、間違いなく高畑先生じゃん。
私は占いなんて信じないけど、あれだけ言われたら……ねぇ？

（……あれ？　私って何で高畑先生の事が好きだったんだっけ？）

これまで考えた事が無かったけど、高畑先生の事を好きになったきっかけが分からない。
確かに、両親のいない私の面倒を見てくれた人だけど……正直、出張ばかりで好きになるような要因すら見あたらない（最初、煙草が嫌いだったのは覚えてる）。
うーんとどうにか昔の事を思い出そうとしていた時、ふと視界に本屋ちゃんとネギの姿が飛び込んで来た、
ネギが凄い速さで、階段から落ちかけていた本屋ちゃんの手を掴み、階段の上へと引っ張り上げている。うわ、今の何？　武術？　魔法？　超能力？

「……あれ？」

今、よく分からなかったけど……高畑先生っぽい人が近くにいたような。
でも、高畑先生なら今の本屋ちゃん達をほっとかないだろうし、気のせいかな。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

何だか様子がおかしいと思って見張ってたけど、まさかこんな行動に出るとはね。
とりあえず、あのバカ共は後で瑪瑙に頼んで呪いかけてもらっておこう。
さてと、教師として……とゆーか、大人として仕事しないとね。

「そこの２人、大丈夫？」

「あ、神崎せんせー」

「あ、あなたは……」

一応、A組の授業もたま～に担当しているので、宮崎さんは顔を覚えていてくれたらしい。
……まぁ、ネギ君は仕方ない。来たばっかりだし、顔もほとんど合わせてないし。

「神崎玖楼。F組の担任だよ。何だか凄い音がしたから駆けつけてみたけど……」

「えっと、私が本を落としちゃって」

そう言って、俯く宮崎さん。
まぁ、それは仕方がない。あんな端っこを歩いていたんだし、あんなに積み上げて抱えていたら落としても仕方ない。
怪我は……してないみたいだね。うん、よかったよかった。

「じゃ、悪いんだけどネギ君。本を拾うの手伝ってくれないかな？」

「は、はい」

そう言い、階段を下りて落ちた本を拾う。

「しかし、珍しい事もあるもんだねぇ～」

「何がですか？」

「宮崎さんってね、大人しくて注意深い子なんだ。あんなに本を抱えて、ましてやたった1人でこんなところを通ったりするかなって」

僕がそう言うと、ネギ君は「言われてみれば」というような顔になった。

普通の人なら、あれだけの量の本を運ばない。台車みたいな道具を使ったり、他の人に手伝ってもらったりするはず。

「それにさ、あんな端っこを歩いたりする？　荷物持った状態で」

「……しません、よね」

うんうん、頭の回転は悪くないみたいだね。柔軟さもそれなりに持ち合わせてる。

こーゆー子を見てると、僕もなかなか面白くなってくる。……まぁ、厄介事には付き合わないけどさ。

「じゃ、僕仕事があるから、後よろしくね」

「あ、はい」

本の半分をネギ君に渡すと、ひらひら手を振りながらその場を立ち

去る。
さて、いつまでボクを睨んでるんですか？　高天原先生。
「てゆーか、うちのクラスの子にちょっかい出すのやめてもらえます？　苦情出てるんで」
「……お前、やっぱり転生者（トリッパー）か！」
は？　トリッパー？　何言ってるのさ。
よく分からないけど、とりあえず話しても無駄だという事はよく分かった。
「うるさい！　オリ主の俺の邪魔をするんじゃねぇ！！」
両手に気を纏わせ、ボクに向けて殴りかかる。
確かに力は強い。でも、殴り方が目茶苦茶に雑魚い。
腰が引けてるし、重心だってバラバラ。ぶっちゃけ、力が強いだけのバカだねこれ。
「くらえ！　衝撃のファーストブリッ」
「うっさい」
ごすっ！！

鬱陶しいので、殴りかかる寸前で顔面に蹴りを入れて停止させる。
そしてそのまま、腕を掴むと明後日の方向へと投げ飛ばす。

「ねめろぺぬげろぉぉっ！？」

……うん、これでしばらくは平和になるでしょ。
しかし、何さ。その「オリ種」って。オリジナルの種族？

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇ１〕

「あんたさ、超能力者でしょ？」

教室での歓迎会。その最中、神楽坂さんに呼び出されて「何だろう」と思いつつ廊下に出ると、真っ先にそう言われた。
え、ちょ、超能力者？　何ですかそれ。

「とぼけても無駄よ！　さっき何だか凄い速さで本屋ちゃん助けてたじゃない！」

……もしかして、瞬動術（クイックムーブ）の事ですか？
普通の人には何が起こったか分からないと思うんですが、あれ見えてたんですか？

「えっとですね、あれは瞬動術と言って、普通に日本の武術にも存在する技術なんですよ」

「へ？　そうなの？」

「はい。呼び方こそ様々ですが、確かに存在します」

日本では縮地法と呼ばれたりするそうですが。
まぁ、気を使える人は少ないみたいですし、あんまり瞬動を使える人はいないみたいなんですけどね。

「ほら、Ａ組にも格闘技やってる人がいるんじゃないですか？　出席簿見た感じでも、いそうですし」

「うん、いるけど」

「その人達がシュバッと消えたり現れたりしたりしません？　多分、この街にも他にいると思いますよ」

「あ～……言われてみれば、そうかも」

つたない説明だけど、どうにか納得してもらえたみたいだ。

……でも、何だか訝しげな視線を向けられるのが気になったけど。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

「居合い拳？」

「そ。居合い拳」

そう言えば、そんな技があったの。
ずぼんのぽけっとを鞘に見立てて、居合抜きの要領で敵を撃ち抜くそんな技が。
……まぁ、実際にそんな馬鹿げた技を使う馬鹿がおったとは思わんかったが。

「何言ってるの。君だって会ってるじゃない、２０年前に」

「２０年前？」

「“紅き翼”のガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。覚えてない？」

ガトウガトウ……おお、そう言えばそんな輩がおったな。
煙草をくわえたヒゲメガネの男。何でも、「めがろめせんぶりあ」の元捜査官とかどうとか。
あの馬鹿共の中では数少ない良識派じゃったか？　よく覚えとらんが。

「タカミチ・T・高畑は、その弟子だよ」

現在、話題に上がっているのは「正義の魔法使い」の筆頭。
麻帆良学園でも有数の魔法先生じゃという男の話。
玖楼によると、階段で本を運んでおった娘を“居合い拳”とやらで転ばせたとか。おまけにその当時の様子からするに、暗示がかけられておった可能性も高いとの事。
しかし……仮にも教師じゃろう？　そのようなマネをするとは信じられんな。

「目的はそこじゃないよ。ネギ少年にその子を助けさせるって言うのが目的なんだ」

「……なるほど、英雄の息子か」

よく分からんが、恐らくその娘が強力な何かを持っておったという事。
魔法の存在でもうまくバラして、その葱なる少年の側に置こうとでも考えたのじゃろう。
高畑個人の考えでは無いな。おそらくは……近衛近衛右門が絡んでおる。

「まったく、この世界に英雄なんていらないのに」

英雄を作るのは人ではなく、時代。

端的に言えば、大多数が悪と認めた者を討てば、その者は英雄となる。
例えば大戦と呼ばれたあの時代は、ナギ・スプリングフィールドという英雄を生み出した。それが正しいのか間違いかは分からぬ。それは少なくとも、圧倒的多数の民衆が認めておるのじゃからの。

「それでどうするつもりじゃ？」

「ボクはこれでも教師だからさ。表立ってバカしでかすようだったら、一般教師率いて殴り込みでもかけに行くよ」

新田先生は話の分かる人だから、ね。と付け加える。
確かに、何度か会った事があるが、麻帆良にしては珍しく人情味に溢れた御仁じゃったの。

「ネギ君は割合、常識ある子みたいだし……」

「うむ。妾も“遠見”で見ておったが、考え方もそこまで偏っておらんかったな」

そう。色に例えるなら……完全な無色透明。
何物にも染まっておらず、何物にも染まる可能性を秘めた希有な色。
今後、それがどんな形に染まってしまうか分からんがな。もしかしたら正義バカになってしまうかもしれんし、妾達と同じ色に染まるかもしれん。
……それならそれで面白い事になるかもしれんのう。

「そう言えば、真白ちゃんが来たんだって？」

「うむ。とりあえずお主の仕事に合わせて戻るとだけ伝えておいた」

そもそも、何で関東におる妾たちが出張らなければならんのじゃ。
それくらいなら、先代様の方がずっと向いておると思うがの。
そう呟くと、玖楼がどこか呆れたような目を向けているのに気づいた。

「……もしかして、知らないの？」

「何が？」

「先代様、若い奥さんもらったんだよ。ボクも詳しく知らないけど「げんそーきょー」とか言う場所で隠居生活してるとか」

なぬ！？　聞いておらんぞ、妾は！
確かにあの御仁は「力が強すぎる」だか何だか知らんが、普段から子供の姿をしておるが……それでも妾以上にサバ読んでおるじゃろ！？

「で、気まぐれでしか顔出さないから、先代様（あのひと）を頼る事が出来ないってわけ」

なんじゃかのぅ……。
まぁ、先代様はあらゆる意味でふりーだむなお人じゃからな。とりあえず放置しても問題ないじゃろ。
それより話は変わるが、あの事件はどうなったんじゃ？

「あの事件？」

「1年前のアレじゃ。忘れたのか？」

ほれ、本校の男子生徒が巻き込まれたとかゆー……あの事件じゃ。

「ああ、アレね。そう言えば君、どうなったか知らないんだっけ」

「途中までは大暴れしたんじゃが、結局どういう形で終わったんじゃ？」

「国が保護する形になったよ。今は更識家が付いてる」

「更識……おお、“楯無”じゃな！」

確かにあそこの人間なら、麻帆良に一切干渉を受けぬし、妥当な人事じゃろう。

「……まぁ、事情を知らない子達は過剰なスキンシップにやきも

きしてるけど」

「……」

強く生きろ。

妾には、それしか言えん。

第5話：波瀾万丈な学園生活

（……くっ、思うたように身体が動かぬ）

女性は息も絶え絶えに、必死に茂みをかき分け進んでいた。
傾国の美女と例えもいい美貌の持ち主だが、その表情には焦りと疲労が見て取れる。
豪奢なその着物はところどころが破れ、さらに血と思わしき赤い染みが飛んでいた。

（妾ともあろう者が、ぬかったか）

あと一歩。そう、あと一歩だった。
上皇を呪い殺し、全てを手に入れる。
あそこで陰陽師共が出てこなければ……彼女の企みは成立していただろう。

「……ここまで、かの」

思わず、その場に膝を突く。
ずっと走り続けてきたために、体力は限界に近い。術を行使するだけの力も残っていない。
ここで息絶えるのも……きっと運命なのだろう。
そう思い、女性はゆっくりと重い瞼を下ろしていく。

「誰？」

幼い声が聞こえた。
女性が最後に見たのは、空のように澄んだ髪のあどけない少年だった。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

「……ここは」

妾はゆっくりと、身体を起こす。
……知らぬ天井じゃ。そもそも、見た事のない小屋の中じゃの。
あまり上等ではない布団に妾は寝かされており、しかも服は脱がされておった。
……現在の妾の感覚からするに、寝てる間に犯された、というのは無いようじゃな。
どちらにせよ、妾に邪な考えの持ち主が触れれば、即座に祟られるようになっておるが。

「あ、目が覚めた？」

幼い声と共に、その人影が小屋の中へと入ってくる。
青い髪。そう、空の色のように青い髪が、何よりも目を引く。
あどけない……十つ前後かの？　ボロボロの服に身を包んだ童が、何やら野草の入った籠を抱えておる。

「動いちゃダメだよ。傷塞がってないんだし」

「ぬ……」

立ち上がろうとしていた妾を、そう言って座らせる。
よく見ると、妾の身体には包帯が巻かれており、ツンと鼻を突く臭いがした。

「そなたが……手当てをしたのか？」

「うん、一応」

……そう言えば、さっきから身体に痛みがほとんど無い。
そこまで上等な薬を使っているようには見えんのじゃが……。

「ちょっと待ってて。新しいの作るから」

そう言うと、童は籠の中の野草を取り出し、丸い石ですりつぶす。
そして手慣れた手つきで混ぜ合わせ、妾の包帯を外すと、傷口に塗っていく。薬を塗っていく事で、痛みがどんどん引いていく。
信じられんな。こんな童が薬を調合し、尚かつここまでの効果を発揮するとは……。

「これ、お母さんから教わったんだ。悪い傷を治してくれるんだって」

「ほぅ……」

そう漏らしつつも、小屋の中を眺める。
少なくとも、大の大人が暮らしているようには見えん。
おそらく、この童が1人で暮らしているのじゃろう。

「童、そなた名を何と言う？」

「九郎だよ。神崎峠の九郎」

そう、童……九郎が微笑んで答える。
それこそが妾にとって、運命の出会いじゃった。

それから妾は、九郎と共に暮らし始めた。
時が経ち、傷が癒えても、妾は何かと理由を付けて九郎の元に留まった。
大いなる力を持つ妖である妾が、ただの人間にここまで執着したのは初めてじゃった。

「お父さんは、ずっと遠い場所から来たんだって」

「遠い場所？」

「うん。遠い遠い場所。山を越えて、海も越えた、ずっと遠い場所」

九郎が言うておるのはきっと、海を越えたその先にある異国。
九郎の持つ青い髪も、その異国の者の血が混じっておるため。
じゃから、人里に住まうことが出来ず、こうして峠で暮らしておる。
たまに薬をもらいに来る村の者達と物々交換し、ぼそぼそと暮らし

ておる。

「ボクの髪も、お父さんの色なんだって」

「そうか……」

空のように澄んだ青。
当人は困った様な顔をしておるが、妾はそっとその髪に触れる。

「妾は好きじゃぞ？　九郎の髪はキレイじゃからの」

「そう？」

「うむ」

そっと九郎を抱き寄せる。
小柄な体格である九郎は、すっぽりと妾の胸の中に収まる。
妾の胸に触れて、顔を赤くしておったが……何を今更。手当てをする時に脱がして、全部見たじゃろうに。

（初い奴じゃのう）

今度、一緒に風呂にでも入ってみるか。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

教職に就いて１０年近くが経つけど、これまでＡ組ほどの問題児を扱った事は少ない。

……まぁ、１人いたけどね。もう天災としか思えないのが１人。

あれに比べたら、Ａ組なんて可愛いものかもしれない。

で、何でこんな話をしているのかって言うと……。

「……これは何の騒ぎ？」

ようやく訪れたお昼休み。今日は学食にでも行こうかな～と思ってたんだけど、そんな矢先にA組の生徒が職員室に飛び込んで来た。で、「校内暴力」とか騒ぐので、ボクが様子を見に来たというわけ。ちなみにネギ君はその子達の手当て中。怪我と言っても軽い打ち身や打撲なので、大騒ぎするほど酷くは無い。

「あ、神崎先生……」

「神崎先生だ」

「子供先生の？」

こら、最後の子供先生って言った奴、後で出てこい。
ボクが到着した時、今にも取っ組み合いが始まろうとしていた。
相手はウルスラの2年生。正式名称は、聖ウルスラ女子高等学校。麻帆良の中の高校の1つで、所謂「お嬢様学校」だが、如何せんプライドの高い女子が多い。前々から他校……それも女子中学のA組とは諍いが絶えず、こんな風に衝突する事も少なくはない。
……まったく、原因は何なのさ。

「えっと、私たちがバレーボールしてたらいきなり絡んできて……」

「……なるほど」

A組の明石さんがそう説明してくれたので、だいたい分かった。

昼休みの場所争いは結構活発に起きている。どうせ、それで追い出されそうになったってところかな。で、追い出されそうになったところに雪広さんと神楽坂さんが乱入。あの2人は沸点が低いし、売り言葉に買い言葉で喧嘩になりかけたんでしょ。
そう指摘すると、「見てたんじゃないの……？」という呟きが聞こえた。……やっぱりそうかい。

「とにかく、今回の事はうちの新田先生と荒川先生に報告させてもらうから」

荒川先生というのは、ウルスラの学年主任教師だ。
４０代半ばの女性教師で、新田先生の女性版といえば大体のイメージは浮かぶと思う。
それを伝えたウルスラの子達は、全員青い顔をしている。……まぁ、あの人の説教は精神的に来るからねぇ。

「軽傷とは言え、Ａ組の子に怪我させてるんだ。下手したら停学処分だよ？」

「う……」

まぁ、学園長が学園長だし、ここは麻帆良なのでそーゆー事にはならないだろうけど。

「分かったらさっさと謝る事！」

「わ、悪かったわね」

そう言って頭を下げ、足早に立ち去っていく女生徒達。
あの様子だと反省してないね。近いうちにまた何かしでかす気がする。……ネギ君にそれとなくアドバイスしとこうかな。

「で、そこの2人も反省しなよ？」

そう、ちょっとばかり厳しい目をしたまま、神楽坂さんと雪広さんに語りかける。
雪広さんは多少分かっているらしく、反省したように目を伏せるが、神楽坂さんは分かっていないらしい。

「ど、どうしてですか！　私たちは被害者で……」

「だとしても、手を出せば相手と同じだ」

確かに今回の事は、向こうに非がある。
でも、だからと言って暴力に訴えていいわけじゃない。
そうしたら、結局は悪意の悪循環で堂々巡りにしかならない。今回だって、向こうは全く納得していない。間違いなく近いうちにまたちょっかい出してくると思う。
……昔っからそうなんだよね、人間って奴は。

「神崎先生？」

「……ん、何でもない」

ちょっと思い出しただけだよ。

昔の事。ず～っとずっと、昔の事を……ね。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

和泉さんと佐々木さんが職員室に飛び込んで来た時は驚いたけど、

2人とも大した怪我が無くてよかった。
神崎先生によると、ウルスラの人達との諍いは珍しく無いらしく、今回の事も向こうは納得していなくて、またちょっかいを出してくるかもしれないとの事。
仲良くして欲しいけど……うん、難しいのかな。

「無理ね！　あのオバサマ達とは絶対無理！！」

「全くもって同感ですわ！！」

すっごく怒ってるアスナさんといいんちょさんがそう言う。
あ、ちなみにA組の皆さんは全員体操服姿（見学の人を除いて）。
今日は屋上でバレーです。
そうして階段を上がって、屋上へ行くと……。

「あら、また会ったわねあんた達」

「偶然ね」

そのウルスラの人が制服のまま、バレーをしていた。
それを見たアスナさんから「カチン」という音が聞こえた。

「な、何であんた達がここにいるのよ！！」

「私たち、自習だからレクリエーションでバレーやるのよ。あんた

達は？」

「わ、私たちもバレーよ！」

「どうやらダブッちゃったみたいねぇ」

くすくす笑いながらそう反論するウルスラの人達。
……うわ、これ明らかに授業妨害だよ。
そんな風に考えてる内、いつの間にか取っ組み合いになりかけてた。
これはマズイ。思い切り息を吸い込んで……。

「やめなさいッ！！」

ちょっと風の魔法で声を増幅して、叫んだ。……ちょっと大きすぎたかな？
今にも取っ組み合いが始まりそうだったけど、全員驚いてこっち見てるし。

「あなた達は『自習だからこっちでバレーをする』そう言いましたね？」

「え、ええ。そうよ」

「『高等部の屋上は使えなかった』。……そうですね？」

「そ、そうよ！」

……うん、よく分かった。
僕はポケットから携帯電話を取り出すと、電話をかける。

「……もしもし、神崎先生ですか？」

「「「「ッ！？」」」」

神崎先生の名前が出た瞬間、ウルスラの人達に緊張が走った。

「ええ、今ちょっとウルスラの人達が中等部の屋上に。それで『自習で高等部の屋上が使えなかったから』って言ってます。……はい、お願いします」

通話を切って、携帯電話を戻す。
佐々木さんがこっちへ近寄ってきて、尋ねる。

「今のって、神崎先生？」

「はい。いつでも頼っていいと言われたので、早速」

頼んだのは、本当にウルスラの屋上が使用中なのか。
あと、あの人達が本当に自習でこっちに来てるのかどうか。

……状況証拠なら充分だけど、ここはやっぱり確実な証拠が欲しいし。

「……あ、来た」

着信が入り、通話ボタンを押す。

『あ～、もしもし。ネギ君？』

「はい」

『悪いんだけど、そこにいる全員に聞こえるようにしてくれるかな？』

えっと、スピーカーですよね。
確か……ここを押せばいいんだったかな？

『あ～あ～、聞こえる？』

「はい、聞こえます」

『んじゃ……君たちさ、とんでもない事してくれたねぇ……？』

電話口から聞こえてきた声に、ウルスラの人達が固まった。

ついでに、僕らもその声の冷たさに思わず身を震わせる。

『今、D組の担任に確認した。確かに自習にはしたけど、「バレーをする許可なんて出してない」ってさ』

「そ、それは……」

『あと、高等部の屋上が空いてないなんて大嘘、よくも吐いてくれたね？』

あ、やっぱり嘘だったんだ。

『……君たちさ、分かってる？　これ授業妨害だよ？』

ウルスラの人達が青くなってるけど、さすがにこれは自業自得。だって、休み時間にちょっかい出してくるならともかく、授業中にちょっかい出してきたんだよ？

『今、そっちに荒川先生と新田先生が行ったから。たっぷりお説教してもらってね？』

「「「「そ、そんな！？」」」」

『何が「そんな！？」なのさ。授業サボって中等部に来るほど暇なんだから、その時間ありがた〜いお説教でも聞いたら？』

えっと、新田先生は知ってますけど、荒川先生って？

「ウルスラの教育指導の先生ですわ。きちんとした立派な女性です」

いいんちょさんに質問すると、そう教えてくれた。
……その後、神崎先生から事を聞いて駆けつけた新田先生と荒川先生（ちょっとぽっちゃりした人だった）が、額に青筋を浮かべつつもウルスラの人達を引っ張って行った。
ちょっと気の毒だったけど……うん、

「ところでネギ。どうして高等部の連中が嘘吐いてるって分かったの？」

授業後、アスナさんがそう質問してきた。
えっとですね……なんとなく分かるんです。嘘を吐いてるか吐いてないかって。

「例えば……アスナさん、宿題本当は片付けて無かったでしょ？」

「な、何で知ってるのよ！？」

「だって提出する時、目が泳いでましたし、汗出てましたし。大方、木乃香さんか誰かのを写したんじゃないんですか？」

「う……」

アスナさんみたいに、嘘を吐いたら顔に出る人もいれば、嘘を吐いた時に癖を出す人もいる。
例えば、幼なじみのアーニャ。嘘を吐く時、必ず髪を弄る。

「でも、何でそんな特技みたいの持ってるの？」

「……嘘だらけ、でしたから」

……まぁ、それは別として、アスナさん宿題倍です。

「うそぉっ！？」

第6話：その日、期末試験【前編】（前書き）

と言うわけで、期末試験編です。
３回に分けて試験のお話になりますが、何だかテンプレっぽくなっちゃいました。
まぁ、ネギ君に常識があるので、微妙に違うかもですけど。

第6話：その日、期末試験【前編】

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

「期末テスト、ですか？」

「そ。期末テスト」

隣を歩くネギ君の言葉を肯定する。
なんだかんだで懐かれてしまい、教師業務を手伝ったりアドバイスする事になってしまった（まぁ、素直な子だからいいんだけど）。
学期末試験までもう2週間を切っている。ボク達教師もそろそろ期末テスト用の試験問題を作り始める頃だ。

「ま、ネギ君は実習生だから問題作成はいいけど、試験に合わせた授業を進める必要があるかな？」

「と言うと？」

「例えば……試験範囲で分からないところがあったら、その部分を重点的に勉強するとかね」

ちなみに、うちのクラスはダントツで学年首位の座をキープしている。
脳筋ぽく見える篠ノ之さんや鳳さんも、ああ見えて中の上の成績を

キープしてるし、他の面々に関してもすこぶる優秀で、特にオルコットさんやデュノアさんなんて上位５０位を常にキープしている。

「Ａ組はヤバイかもよ？　何せ、万年ドベだから」

「あ～……」

そう指摘され、遠い目になるネギ君。

先日、Ａ組の中でもさらに成績が最底辺の５人組（バカレンジャー）の補習授業を行ったらしいけど、年齢に比例しないほど優秀なネギ君にとってしてみれば、極めて信じられない結果に見えたんだろう。

……ボクだって、１００点満点で一桁取る人が本当にいたんだって思ったもん。

「ま、何か分かんない事が相談乗るから、気軽にね」

「はい！」

「とゆーわけで、期末試験が近づいて来てるわけだけども……ちゃんと勉強してる？」

あっという間に試験まで１週間を切った。
授業終了後、そうクラス中に聞こえるように尋ねてみる。
勢いよく頷く子もいれば、視線をそらす子もいれば、顔を上げようとしない子もいる。

「……分かってるとは思うけど、春休みを補修漬けで過ごしたくなければ……きちんと勉強して試験に臨む事。ＯＫ？」

「「「「はい」」」」

なお赤点を取ったら、問答無用で春休みには補習授業が待っている。
春休みに青春したい子達が多いので、それだけは避けようと頑張っている。

「まぁ、根を詰めすぎず、尚かつ手を抜きすぎず、自分らしいペースで勉強すること。以上！」

そう言い終えると、クラス中からもざわめきが漏れ始める。
ま、要は気張りすぎるなって事だね。うんうん。
とりあえず職員室へ戻ろうと、教室を後にしようとしたら、後ろから声をかけられた。振り向くとそこには……鳳さんの姿が。

「ん？　どうかした？」

「あ、いえ。ちょっと確認したい事があって」

あ～、昔日本に住んでたと言っても、最近まで中国にいたからね。で、どこが分からないのかな？　一応、枕草子は出そうと思ってるけど……。

「そうじゃなくて、ちょっと奇妙な噂が流れてて」

「奇妙な噂？」

「何でも、図書館島に「読んだだけで頭が良くなる魔法の本」があるとか無いとか」

……何さ、それ。

「いや、あたしも先輩達からそーゆー噂があるって聞いただけなんで。詳しい事は全く知らないですけど」

「……一応聞くけど、その噂は」

「信じてないです。てか、どこの御伽噺なんだって話ですし」

だよねぇ。ま、もし噂を信じて取りに行ってたら、問答無用で零点にしてたけど。
そんな道具に頼る事自体、カンニングと変わりない。取りに行く時間があるならその分勉強しろって話だからね。

「実は、もう1つ噂があるんです。今度の試験で最下位だったクラスは解散で、小学校からやり直しだって」

「それこそあり得ないでしょ」

わかりやすく言うとだけど、そんな事したら学園長でも問答無用で懲戒免職になる。
いくらおふざけが好きな茄子頭でも、そこまでやったら犯罪だし、どんな職権乱用だという話だ。……やりかねないと言い切れないのが怖いところだけど。

「……でも案外、それを真に受けた人達が『魔法の本』を探しに図書館島に行ったりして」

「いやいや、さすがにそれは無いって。信じるわけ無いし、そもそも勉強しなきゃならない時間無駄にしてあるかどうかすら分からない代物を探すなんて、どこの馬鹿なんだって話だよ」

「それもそうですよね」

「「あはははははははははは」」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

これはひどい。
Ａ組が予想以上に酷い事が分かり、僕はすぐさま学年主任の新田先生（厳しいけどいい人）に相談したところ、どうもＡ組は運動能力やその他の分野に突出している分、勉強がどうにもうまく行っていないらしい。
……でも、タカミチさんが担任だったんですよね？　その辺、どうだったんですか？

「高畑先生は出張が多くてですね、そのため自習の時間が多かった

んですよ」

「あ～……」

自習は「自分で学習する時間」だけど、Ａ組の皆さんが自分で勉強する姿が思い浮かばない。
確かに、中には学年トップクラスの人達もいるけど、それ以上にふざけてる人が多い。
さっきなんて、「英単語野球拳」なんて言い出す始末だし……。

「まずは……基礎から固めるべきでしょうか？　やっぱり自習が多かったという事は、授業その物があまり進行してない事になりますし」

「そうですな。……しかし、学園長にも困ったものですね。『最下位から脱出出来たら正式採用』などとは」

「はあ」

苦笑しつつも、僕はしずな先生から渡された封筒を開く。
学園長先生からの最終課題で、何でも「期末試験で２－Ａが再開から脱出出来たら、教師として正式採用される」らしい。……こんなので正式採用を決めていいのかな？　それに、もしも最下位から脱出したら、それはそれで今まで最下位から脱出出来なかったタカミチさんの面目丸つぶれなんじゃ……。

「神崎先生にも「気軽に相談していい」って言われましたし、頑張ってみます」

「ほう、神崎君から……」

新田先生が感慨深そうに頷いている。

……そう言えば、神崎先生ってどんな人なんです？

「彼はここに務めて１０年になりますかね。古文の担当ですが、なかなか生徒達からの受けもいいですよ」

「１０年って……あの、神崎先生何歳なんです？」

１０年って事は、少なくとも２０代後半は行ってますよね？見た感じ、凄く若く見えたんですけど。

「確か３０代半ばだったと思いますよ？　それにああ見えて既婚者ですし」

「ええっ！？」

「どう見ても１０代にしか見えませんよね。ネギ先生が来るまでは、『子供先生』と言えば神崎先生だったんですよ」

そ、そうだったんだ……。

確かに外見はすごく若いから、そう呼ばれても不思議じゃない。
何て言うか、苦労してそうだなぁ。

うーん、すっかり遅くなっちゃった。
アスナさん達、怒ってないかな？　一応、残業だって言ってあるから大丈夫だと思うけど。

「あ、あれ？」

ドアノブを回すけど、鍵がかかっている。
閉め出されちゃったのかな。チャイムを押してみる。……反応が無い。

「おかしいなぁ。もう寝ちゃったのかな？」

アスナさんはアルバイトの関係で早く寝るみたいだけど、木乃香さんは起きてるはず。
もしかして出かけてるとか？　でも、もうすぐテストだって言うのに出歩いたりはしないと思うんだけど……。

「あらネギ先生。いかがされましたか？」

と、僕が困ってるところに、いいんちょさんがやってきた。
髪が何だかしっとりしているように見えるところから、お風呂上がりらしい。

「あ、いいんちょさん。それが、アスナさん達に閉め出されちゃったみたいで」

「アスナさん達に？　……おかしいですわね。アスナさんならともかく、近衛さんはそんな事しないと思うのですが」

そうですよね……もしかして、どこかに出かけてるんでしょうか？
例えば、他の人の部屋で勉強会してるとか。

「そうかもしれませんわね。私からアスナさんに連絡しましょうか？」

「お願いします」

僕、携帯は持ってるんですけど、まだアスナさん達の番号登録してなくて……。。

いいんちょさんが携帯電話を取り出すと、アスナさんの携帯にかけ始める。

……でも、出ないみたいで、いいんちょさんも困ったような顔で携帯を仕舞う。

「……出ませんわね」

「うーん、どうしたんでしょうか？」

「携帯の電源を落としてるのかもしれませんわ。とりあえず、２人がいそうな人の部屋に行ってみましょう」

「はい」

いいんちょさんの後に続き、僕は歩き出した。

アスナさん達がいそうな場所って言うと、宮崎さんや綾瀬さんのところかな？　木乃香さんと仲がいいみたいだし……。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

「んっ……」

舌を絡ませ、濃厚な接吻を交わす。
玖楼はこう見えて、なかなかの「てくにしゃん」じゃ。
最初は妾が仕込んだというのに、あっという間に妾を蕩けさせる「てくにっく」を身につけおった。

「ふふ、今日も絶好調のようじゃな」

「まぁ、あんなもの食べさせられたら元気にもなるよ」

今夜は妾が存分に腕を振るったからのぅ。
スッポン鍋にマムシドリンク……滋養強壮の効果ばつぐんじゃ。
それに、今日はこんなものも用意してみた。いんたーねっとで知り合った相手（詳しくは知らんが、ドイツの軍人だそうじゃ）から勧められたんじゃが……どうじゃ？　似合うか？

「う、うん。似合うは似合うんだけど……なんて言うか、目のやり場に困るって言うか」

真っ赤になって、顔をそらそうとする玖楼。
しかし、妾はそれを許さん。がっちりと顔を固定して、妾の方を向かせる。
ふふふ……今日も熱くなりそうじゃのう……。

ぴぴるぴるぴるぴぴるぴ～

……なんじゃ、今の気の抜けた音は。

「ゴメン。ボクの携帯」

そう言うと、布団から離れて携帯電話へと手を伸ばす玖楼。
待ちぼうけじゃのう。早く終わらんか？

「……なんだって！？　分かった、すぐに行く」

そう言って玖楼が通話を終えた。その表情は真剣その物じゃった。
ど、どうしたんじゃ。今の声にその顔……何かあったのか？

「生徒が数名行方不明になった。教師もすぐに集まれって」

「なぬ！？」

つまり、お預けという事か！？
なんたる事じゃ！　ここまで準備万端じゃというのに……。

「ゴメン、終わったらすぐ戻るから」

「くぅ～……誰じゃ！　行方不明になった生徒というのは！」

下らん理由で行方不明になったのなら、絶対に許さんぞ！？
なお、その理由とやらが判明し、怒り狂った妾を相手に玖楼が大立ち回りを演じる事になるのは先の話。

第7話：その日、期末試験【中編】

〔Ｓｉｄｅ　Ｓｅｒｕｈｉｋｏ〕

緊急招集がかかった僕ら麻帆良学園の教師だったけど、こんな夜遅くにいきなり招集がかかっただけあり、中には機嫌の悪い人だっている。
同じ中等部の神崎先生がその一例だ。
なんていうか……無表情なのが逆に怖い。あの人、基本的に温厚だけど、たまに凄まじく怒る時があるから。

「皆、集まってもらってすまんかったの」

「……学園長、生徒が行方不明だというのは本当ですか？」

不安を押し殺した声で、新田先生がそう尋ねる。
確かに、本当に行方不明だというのなら、すぐに対策を打ち立てなければならない。
まずすべき事は捜索隊の編成で、魔法絡みでないなら地元警察への通報。後は保護者への説明と……うわ、頭が痛くなってくる。

「それじゃが心配はいらん。情報伝達の齟齬での、行方不明になった生徒は現在、期末試験に向けての合宿中じゃ」

（すまんが、魔法先生はこの後残ってくれるか？）

表の声と同時進行で念話が聞こえ、魔法関係者は渋い顔になった。
ああ、また独断専行なんだ……。
学園長の独断は今に始まった事じゃないけど、何をするか出来れば説明して欲しい。こういう時みたいに、心の準備とか必要なんだし。ハッキリ言って心臓に悪いし、胃も痛くなってくる。

「学園長！　どういう事なのか説明してください！！」

「お、落ち着くのじゃ、新田先生」

「これが落ち着いていられますか！　そもそも何ですか強化合宿って！！」

うん、これが普通の反応だよね。
実際僕らだって、学園長からの念話が無かったらくってかかってたし（明石教授やガンドルフィーニ先生も渋い顔のままだし）。

「……２－Ａの担任、ネギ・スプリングフィールド先生から聞いています。同居人である神楽坂明日菜と近衛木乃香が、何も告げずにいなくなった、と」

新田先生の言葉に、会議室がざわつき始めた。
近衛さんは学園長の孫だし、神楽坂さんは……その、学年でもかなり残念な成績で、合宿に参加させるのも分かる気はする。

でも、これは明らかに依怙贔屓だ。成績の悪い生徒なら他にもいるし、これだとA組を贔屓しているとしか思えない。

「少し、よろしいでしょうか？」

静かに、けれども威圧感のある声で神崎先生がそう尋ねる。
その威圧感に、思わず僕らは息を呑む。

「葛葉先生、行方不明になった生徒は誰なのか分かりますか？」

「２－Ａの神楽坂明日菜、近衛木乃香、古菲、長瀬楓、佐々木まき絵、綾瀬夕映、宮崎のどか、早乙女ハルナ……の８名ですが」

今上がった名前に、僕らは揃って顔を顰めた。
だって、その中の５人はある意味有名人だったから。
学年最下位である２－Ａでも、更に最底辺に位置する５人組……
何でも、生徒達の間では「バカレンジャー」と呼ばれてるらしい。

「あ、その数字は修正した方がいいと思います」

「え？」

「多分、そろそろですから」

意味深な言葉を神崎先生が呟いた直後、誰かが会議室へと近づいてくる足音がした。
大人にしては軽い足音だけど……もしかして、これって。

「失礼します！！」

会議室に飛び込んで来たのは、話の中心に上がっていたA組の担任、ネギ君。
真っ赤な顔で息を切らして、しかも何だか怒ってるようにも見える。
思いっきり学園長を睨み付けてるし。

「……学園長先生！！　これはどういう事なんですか！？」

「ふぉ！？　な、なんの事じゃ？」

「……図書館島の外で、宮崎さんと早乙女さんを見つけて話を聞きました」

行方不明になってた生徒の内、２人を！？

「学年最下位のクラスが解散で幼稚園からやり直しって何ですか！
魔法の本なんて変な噂話……どうなってるんですか！？」

……なお、学園長が僕らの冷たい視線を浴びる事になったのは言

うまでもない。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

会議から遡る事、小一時間前。
行方不明になったという生徒がＡ組の生徒だと聞き、ボクはすぐさまネギ君に連絡を入れた。
自分の生徒が行方不明だという事に気づき、涙目になりかけていたネギ君。
だけど、行方不明の生徒が成績不良者（バカレンジャー）５人組と図書館探検部の３人である事を聞いて、あの噂を思い出した。

「ま、魔法の本？」

「眉唾物の噂話だけどね。その５人、相当成績悪いんでしょ？」

「え、ええ」

躊躇いがちにだけど、頷くネギ君。
読めば頭の良くなるという魔法の本は図書館島の地下深くにあり、尚かつ「期末試験で成績最下位のクラスは解散」という頭の痛くなる噂話。そして行方不明になった生徒の中に、図書館探検部のそこまで成績が悪くない（むしろ優秀な）生徒がいる事を含めて考えれば、思いつく結論は１つ。

「……まさか、魔法の本を探しに行った！？」

「十中八九そうだろうね」

うわ、呆れてるよ。怒りを通り越して呆れ返ってるよ。
そりゃあ、そんなバカみたいな噂を真に受けて、勉強ほっぽり出して魔法の本探しに行ったって聴いて、怒る以上に呆れるよ。
ネギ君と同じ立場だったら、きっとボクも同じ反応だっただろうから。

「……神崎先生」

「何？」

「……日本の学校で、成績不良クラスって解散できるんですね」

「日本の学校にもそんな制度無いよ。ついでに学園長にそんな権限無いから」

さてと、呼び出しかかってるから、そろそろ会議室に行こうかな。そうそう……行方不明者だけど、数人は図書館島の外にいるんじゃないかな？

「どうしてそう思うんです？」

「だって、図書館島の地下って割合危険な場所みたいだし、それだったら外で連絡を取り合う係がいてもおかしくないからね」

「……ちょっと行って来ます」

うわ～、相当キてるね。あれ。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｒｉｓｈｕ〕

どうなってんだ？　原作にこんな展開あったか？
少なくとも、図書館島に潜り込んで問題になるって話は無かったと思うんだが……。
……いや、もしかしたらそーゆー描写が無いってだけで、案外裏でこーゆー感じに会議があったのかも。

（チッ、アイツら……後でＳＥＫＫＹＯＵだな）

しかし、神崎のヤロー……モブキャラのくせに存在感つえーな。
おまけに思いっきり投げ飛ばしてくれやがって……俺は最強オリ主なんだぞ！

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｉｔｔａ〕

「学園長、納得のいく説明をしていただけますかな？」

ネギ先生の話を聞き、私も表情が厳しくなるのを抑えられない。
それは他の先生達も同じらしく、全員揃って厳しい目で学園長を睨んでいる。

「せ、説明と言われてものう」

「ならはっきり言わせてもらいますが、私たちはそんな噂、聞いた事もありませんがね！！」

なお、私が言っている噂というのはクラス解散の方だ。
確かに「魔法の本」という噂については、耳にした事はあった。
こういう時期になると生徒達の間で囁かれるという、一種の都市伝説のようなもの。……どちらにせよ、勉強に忙しくて実際に探しに行く者はいないが。
だが、もう1つの噂は違う。ハッキリ言って笑えない。そんな噂が流れる事自体があり得ない。

「ちなみにこの噂、私はうちの生徒から聞いたんですが、噂の発信源はA組だそうです」

「ほう……」

神崎先生の言葉に、全員の視線がいっそう強まる。
この2つの噂、1つになれば相当強い力を持つ。成績がよろしくない生徒に、魔法の本とやらを探しに行かせるほどの力くらいはある。
発信源はA組らしいが、そのA組の生徒はどこから噂を聞きつけたのか。

「……とにかく、こちらで図書館島へは迎えを出します」

「ふぉ！？」

「当然です！　まさか生徒に試験までの授業をサボらせるつもりでは無かったんでしょうね！？」

学園長の額に一筋の汗が伝う。
……どうやら、サボらせるつもりだったようだ。

「学園長も、それ相応の処分を覚悟しておいてください！！」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｓｅｒｕｈｉｋｏ〕

一般の先生達が退出し、防音の結界を張った上で裏の話し合いが始まった。
なお、さすがに裏の事情を子供に聞かせるわけにも行かないので、

ネギ君も退出している。
……いや、これは自業自得としか言い様が無いですよ。

「とにかく、今回のこれは学園長の自業自得です。後、さすがにあり得ませんから」

大学部の明石教授も厳しい顔でそう言う。
教授の娘さんもA組だし、もしかしたら今回の事件に巻き込まれていたかもしれない。

「それにしても、どうして今回に限ってこんな馬鹿げた事を思いついたんですか？　どうせやるなら、他のクラスの生徒も巻き込んでの合同合宿にすれば良かったじゃないですか」

確かに……そうだよね。特別授業みたいなものだし、それならまだ示しが付く。
なのにどうして２－Ａだけ……。

「……もしかして、ネギ君ですか？」

思いついた事をそのまま口にすると、学園長がぎくりと背を振るわせた。
……あ、もしかして図星？

「そう言えば、ネギ先生の正式採用課題が「２－Ａの最下位脱出」だそうで」

弐集院さんが衝撃の事実を呟くと、学園長の顔からは汗が止めどなく流れ出す。
まさか、ネギ君を正式採用するために、今回の事件を仕組んだ……？
その結論にたどり着き、やっぱり全員の視線が厳しいものになる。
普段は温厚な弐集院さんや寡黙な神多羅木さんですら、表情が険しい。

「とにかく学園長。今回ばかりは見過ごせません。大人しく教育委員会からの処分を待つ事ですね」

「う、うむ」

黙り込む学園長を残し、僕らは会議室を後にした。
しかし、ネギ君もそうでしたけど、神崎先生も相当怒ってましたよね？

「ああ。彼があそこまでキレたのは……5年ぶりか」

「え、前にもあったんですか？」

ガンドルフィーニさんの言葉に、思わずそう聞き返してしまう。
僕が麻帆良学園に来たのは2年前なので、それ以前の事は知らない。

「そうか、あれからもう5年も経つんだねぇ……」

「あれって、何ですか？」

「「「『篠ノ之束の乱』」」」

古参の魔法先生が声を揃えてそう言う。
篠ノ之さんって……F組の？

「いやいや、私たちが言ってるのはF組の篠ノ之箒さんのお姉さん」

「5年前当時、高等部に在学していた篠ノ之束さんの事だよ」

はぁ……どんな人、なんです？
F組の篠ノ之さんは確か、剣道の全国大会で優勝したって聞いてますけど。

「天才だよ。“麻帆良の最強頭脳”超鈴音をも上回る頭脳と狂気を持った、天災そのものだ」

当時の事を思い出したのか、明石教授がすごく複雑な顔をしてそう

呟く。
て、天災って……いったい何をしたんです、その人。

「すまんが、この件に関しては箝口令が敷かれていて、私たちからも詳しい説明は出来ない。ただ、神崎先生が主な被害者だと言わせて欲しい」

「あれは……災難だったとしか言い様が無いな」

顔を見合わせ、うんうんと頷く関係者一同。
い、いったい何があったんですか、神崎先生！！

第7話：その日、期末試験【中編】（後書き）

玖楼「～～～～～♪」
瑪瑙「何をやっておるのじゃ、玖楼」
玖楼「いや、作者代理で修学旅行編をどうするかプロット立ててた」
瑪瑙「早すぎじゃろう！？　まだ吸血鬼事件も終わっておらんぞ！？」
玖楼「うーん、一応吸血鬼事件はどんな風にするか決めてるんだよ。ネギ君がエヴァを説得しようとするけど、×××が××して、××が麻帆良にやってきてさらに××××」

（最強の嫁、飲んでた緑茶噴き出す）

瑪瑙「それはさすがにメタ過ぎるぞ！？　そもそも×××が出てくるのか！？」
玖楼「ボクもそう思ったんだけどね。やっぱり、意外性を持って来たいっていうのが作者の考えだから」
瑪瑙「……意外すぎるじゃろう」

玖楼「話は変わるけど、作者の父親は学校の先生なんだって。それで実際に修学旅行に関する話を聞いたら『気が休まらない』って答えが返ってきたんだってさ」
瑪瑙「どうしてじゃ？」
玖楼「生徒がはぐれたり、何かしないよう気を張ってる必要があるからだよ。何か問題を起こしたら学校全体の評判にも関わるし、そ

んな風に気を張った状態だからマトモに楽しむ事なんて出来ないってさ」
瑪瑙「なるほどのう……」
玖楼「ちなみに、もう東京ディズニーランドには何度も行っていて、スタジオパークやそのほかの名所も何度も回っているとか。……作者は1度もディズニーランドには行った事ないけど」

第8話：その日、期末試験【後編】（前書き）

ついにあの人が登場します。

第8話：その日、期末試験【後編】

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

誰にだって、忘れたい出来事の１つや２つはある。
まぁ、何百年も生きてるボクにだって、黒歴史って呼ばれるような事はいくつもある。
中でもダントツで葬り去りたい黒歴史が、５年前の「篠ノ之束の乱」。……出来れば、深い記憶の底に永久封印したい出来事だ。

『やっほ～、みんなのアイドル束さんだよ！　ぶいぶい！』

「……」

『くぅくんお元気？　束さんは』

プツッ、ツーツーツー……。
だから、こうして元凶から電話がかかってきても、叩き切る事にしている。
てゆーか、どこで知った。ボクの番号。

「あ、あの……神崎先生？」

「ん？　何かな、篠ノ之さん」

「今の電話ですけど」

「出来れば、触れないで欲しいかな？　かな？」

おっと、いけない。思わず2回言っちゃったよ。
とりあえずさ、自分でどんな顔してるか分かってるから、その怯えた顔やめてくれないかな？　かな？

「つ、つかぬ事をお聞きしますが……姉とはどんな関係で？」

「元担任」

もう7年近くも前だっけ。
あの天災と知り合ってしまったのは。

「……そう、ですか」

単語だけで通じたらしく、篠ノ之さんはすごく悲痛な顔になった。
どうやら妹というだけあって、肩身の狭い思いをしているらしい。
今度、缶ジュースの1本くらいは奢ってあげる事にしよう。……
もちろん、試験終了後にだけど。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｒｉｎ〕

いつものように登校したあたしだけど、ある話を聞いた。
曰く「Ａ組のバカレンジャーが魔法の本を探しに図書館島へ行ったらしい」と。
なお、そんな話を聞いたあたしがどんな反応をしたか……想像は付くと思う。

「……バカだバカだとは思ってたが、筋金入りのバカだったとはな」

休み時間、完全に呆れ果てたラウラがそう呟いた。
なお、あたしも否定しない。てゆーか、全面的にそうだと思ってた

から。

「今、先生達が捜索隊組んで探してるって」

「……雷、落ちるよね」

シャルロットの言葉の意味は、容易に想像出来た。
あんな噂真に受けて「魔法の本」なんてもの探しに行って、新田先生の雷が落ちないわけがない。

（てゆーか、何やってんのよあのアホは……）

あたしの脳裏によぎったのは、バカレンジャーのバカイエロー。
日本語の勉強で手が回らないとか言ってたけど、だったら部活で汗流すよりも勉強しろっつーの。
試験近かったっていうのに、放課後目一杯使って武術訓練って何？

「そう言えば箒、アンタさっきから黙ってるけど……どうかした？」

見ると、すっごく顔色が悪い。
朝来た時はそんなに体調が悪いようには見えなかったけど、風邪でも引いたの？

「いや……あまり知りたくなかった事実を知ってしまったというか……」

「何それ」

「……神崎先生が、うちの姉の被害者だという事が判明した」

その言葉に、あたし達は凍り付いた。

「ちょっと待った。神崎先生って勤続１０年ちょいでしょ？　じゃあまさか」

「ああ。あの事件にも巻き込まれたらしい。むしろ主な被害者だったそうだ。千冬さんに確認を取ったところ、そんな口ぶりだった」

箒の姉、束さんの事を知っているだけに、思わず天を仰ぐ。

……気の毒に。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

行方不明の生徒達が見つかった。
しかも発見時、特に勉強せず、遊び呆けてたとか。
……なお、一緒に報告を聞いたネギ君の反応は、押して図るべし。

「お前ら何したのか分かってんのか、ああ！？」

「とりあえず、あなたがキレる筋合いは無いです」

場違いにも、高天原先生がキレたので、ボクがそれを押し留める。
不満そうに睨まれたけど、逆に殺気を乗せて睨み返す。

「あなたも監督不行届として処分が下されるので」

「はぁ！？　だったら、そっちの薬味も……」

「確かに彼は担任ですが、教育実習生です。本来なら、正教員のあなたがフォローに入らなければならなかった」

その辺りの事情は、着任当日に学園長から説明があったはずだ。
でも、これまでの行動を確認する限り、高天原先生がネギ君のフォローに入った事は無い（ネギ君自身、ほとんど問題を起こさなかったというのもあるけど）。ほぼ全て、クラス委員長である雪広さんがフォローしていた。
もちろん、今回の事はネギ君自身も自分の至らなさは痛感してるし、今回の正式採用についても、もしA組が最下位脱出しても辞退すると、自分から進言してきた。

「……ネギ君、泣いてたよ」

そう呟くと、俯いたままの神楽坂さん達はビクッと身を震わせた。
なお、噂がデマである事はしっかり説明してある。その上で、自分達が何をしでかしたのかも分かっていなかったらしく、しっかりと説明した。
図書館島に無断侵入。さらに手続きを踏まずに勝手に本を持ち出そうとした事。普通に考えても窃盗罪だ。もちろん、「図書館探検部だから」という言い訳は通用しない。

「突然いなくなったのを心配して、自分の生徒がこんな馬鹿げた事をしたのが情けなくて、泣いてた」

なお、遊び呆けてると聞いた時、泣き顔が一変したのは言うまでもない。
他の先生達は顔が引き攣ってたし、ボクも思わず一歩下がった。……うん、彼の内面は母親似だね。

「……君らの処分は試験後だ。試験、頑張れば？」

「あのっ、私たちどうすれば……」

「知らないよ、そんなの」

縋るような視線をする綾瀬さんを、そう一蹴する。
冷たいかもしれないけど、ここでどうすればいいか教えても意味はない。
全ての元凶は学園長だけども、こうなったのは、情報に踊らされて馬鹿げた行為を行ったこの子達の責任だ。

「どんな理由であれ、君たちの行為はネギ君を……いや、ボク達教師をバカにしたんだ」

授業をサボって魔法の本を探しに行って……挙げ句、勉強もしていなかった。
喧嘩売ってる。もう、教師じゃなかったら殴りつけたい気分だよ。
項垂れたままの彼女達は無視して、ボクは指導室を後にした。……後は多分、新田先生が締めてくれるでしょ。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｔｈｅｒ〕

その日、２－Ａでは歓声に沸いた。
行方不明になったクラスメイトが見つかったと分かり、思わず安堵の涙を漏らす者もいた。……が、しかし。

「……と言うわけです」

温厚な彼が「怒り心頭」という顔で教室に入ってきた時は何事かと思ったが、生徒達は彼の説明を聞き、何故そこまで怒っていたのか

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

分かった。
同時に、彼女達の大半も怒りを覚えていた。何故ならば……。
「こんな時に何を……何をやってるんですの、アスナさん達はッ！！」
だんっ、と机を叩いて立ち上がったのは、雪広あやかだった。
彼女にとって神楽坂明日菜は、対等な位置にいるライバルであり、親友だった。
だからこそ、今回のような反則を行う事は理解出来ず、さらに許せなかった。
期末試験が近いにも関わらず、勉強しないで魔法の本を探しに行き、さらに遊び呆けてた？　はっきり言ってキレるのは当たり前だ。……まぁ、怒りの中には「ネギ先生がクビになるかもしれないのに、何やってるんですのあのおサルさん達はッ！！」という考えもあったりなかったり。
「ネギ先生！　アスナさん達は今どこにいるんですの！？」
とにかく、委員長として、クラスメイトとして、何より友人として、一言言ってやらなければ気が済まない。
他の生徒も同じ事を考えている面子がいるらしく、うんうんと頷いている。
「指導室で新田先生達からお説教を受けてます。それと、何か言っ

たりするのは試験後にしてください」

「何故ですか！」

「皆さんの気持ちは分かりますが、今は試験前です。アスナさん達に会わせたら勉強が手に付かなくなるでしょうから」

正論だ。
アスナ達を前にしたら、実際彼女達も自分を抑えられるか分からない。
最悪、暴力沙汰になって問題を起こしてしまう可能性すらある。

「アスナさん達の処分は試験後に決定します。ですから、皆さんもそれぞれの勉強に集中してください」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

さて、結果だけ言おう。
うちのクラスはまたもや学年トップ。Ａ組は最下位……それもダントツにＡ組史上最悪な成績で、という結果に終わった。
まぁ、これは当たり前とも言える。特にバカレンジャーズは全く勉強していなかった事と、温厚なネギ君にまで失望された事が響き、試験では実力をほとんど出し切れなかった（実力自体がそこまで大した事無かった事もあるけども）。

「……まぁ、当然じゃの」

一通り呪いをかけ終わった瑪瑙が、スッキリしたという表情で頷く。
試験終了後、完全に怒りメーターが振り切れたＡ組の生徒達からもフルボッコにされ、バカレンジャーズは抜け殻に近い状態にもなった（見ててちょっと可哀想にもなったけど、自業自得だし）。
なお、しばらくは村八分が続くと見ていい。それくらいＡ組生徒の怒りは凄まじかった。

「おまけに、私生活にも制限付いちゃったしね」

「そうなのか？」

「うん。まず当然だけど、全員無期限で部活動停止」

あんな事しでかしたんだもの。当然そうなる。
さらに今回の事で図書館探検部……というより、図書館島を予てより疑問視する声が大きくなり、当分図書館島が閉鎖される事になった。当然ながら、図書館島を調査する図書館探検部も、それに見合わせて無期限の活動停止処分を受けた。
何せ中学生に侵入され、尚かつ地図の管理も杜撰である事が判明した。……おまけにあそこ、本の盗難を防ぐとかの理由で罠とか仕掛けられてるし。

「場違いにも関わらず、綾瀬さんとか噛みついてきたもん。『そこまでする事無いです！』って」

「それでどうした？」

「ネギ君が黙らせたよ。『誰の所為でこうなったと思ってるんですか？』って」

そう伝えると、意外そうな顔で関心する瑪瑙。
まぁ、あの子は鳥頭（ちちおや）よりも女王（ははおや）似だね。責任感の強さがそれを物語ってる。
なお、綾瀬さんはネギ君が相当怒ってる事にようやく気づいたらしく、それ以来黙り込んだ。

「春休みも補習授業とかでほとんど潰れるだろうし……ネギ君も色々やる事多いし、大変だね」

「確か、正式採用を辞退したとか言っておらんかったか？」

「うん。だから、正式採用をかけた再試験みたいのが春休み中にあるんだよ」

なお、そっちは全国の学校でも行われている正規の採用試験らしい。余所から教育委員会の人やら来るらしいから、学園長達が暗躍するのは防げる。今回の騒動、大半の魔法先生も知らされていなかったから、みんな怒り心頭だったし。

「学園長も１ヶ月の謹慎で、さらに給料５０％カット。さらに当分は監視が付くってさ」

後、高天原鏡士郎も減給と要注意処分を受けた。元々、彼の就任も学園長のゴリ押しだったらしく、職務態度にも問題ありと判断されたためである。
これでしばらくは悪巧みも出来ないし、平和になるでしょ。

……しかし、ボクはすっかり忘れていた。
今朝方かかってきた電話をスルーしていた事を。
そして、彼女が再び麻帆良にやってくる事に、ボクはまだ気づいて

いなかった……。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　？？？〕

まったく、くぅくんってば相変わらず照れ屋さんだね～。

ちゃらら～ら～らら～、ちゃらららら～ら～ららっら～

「この着信音は……とぅっ！」

えっと携帯携帯……あった！

「も、もすもす終日？」

『……』

「あぁ、待って！　切らないで！」

それにしてもひっさしぶりだね～。元気だった？

「うんうん、分かってるって。今回はそこまで派手にしないから」

『……』

「え？　そういう問題じゃない？　じゃあどういう問題なのかな？」

『……』

「大丈夫だよ。束さんの辞書に、不可能という文字はない！」

もうあれから5年も経つんだし、束さんとしても色々見極めないといけないわけだよ。
くぅくんはともかく、いっくんとか箒ちゃんの事とかね。

第9話：おウサ様がやってくる

〔Side　Other〕

――――篠ノ之束の乱

5年前、麻帆良学園女子高等部に在学していた女生徒、篠ノ之束が引き起こした、麻帆良学園都市史上例を見ない大事件である。
学園のセキュリティが全てカットされ、実に半日もの間、学園は外的からの脅威にさらされたのだ。
そしてその犯人は、麻帆良中のテレビをジャックし、堂々と名乗りを上げている。

『麻帆良はこの天才、篠ノ之束さんが乗っ取った！！』

その天才の関係者はと言うと、その放送を見て唖然としていた。
麻帆良を震撼させた大事件であるにも関わらず、一切の死者を出していない。
侵入者や襲撃者は何故か現れなかったが、学園都市のセキュリティが万全でない事が露呈するなど、恥を晒す結果となってしまった。
……まったくの被害者を出さなかった事にこそ、彼女の恐ろしさを垣間見る事が出来る。

なお、事件の鎮圧に協力した一般教師にして、この事件の最大の被

害者でもある神崎玖楼に対し、彼女は「予行練習」と語っている（「何のための予行練習なんだ」と、強化合宿で麻帆良から出ていたため、幸運にも事件に巻き込まれずに済んだ彼女の妹（しのののほうき）は、後日頭を抱えていた）。

ちなみに事件後、神崎教諭の妻である瑪瑙夫人はこう語っている。

――――あの兎はいずれ殺す、と。

〔Side Out〕

〔Side Houki〕

『愛しの束さんからお電話だよ！　愛しの束さんからお電話だよ！』

授業中、その巫山戯ているとしか思えない声が教室に響き、全てが凍り付いた。

……恐らく、今の私の顔は凍り付いているに違いない。なぜなら、その着信音の当人である神崎先生も凍り付いているから。

「……」

「あ、あの神崎先生？」

「……これだけは言わせて欲しい。ボクは授業中、携帯の電源は切ってある。さらに他人に触らせた事は一切無いし、こんな着信音に設定した覚えは全く無い」

その声が響いた瞬間、クラス中は一体となった。

今の神崎先生に余計なツッコミはするな。命に関わるぞ……！

『愛しの束さんからお電話だよ！　ウサギは寂しいと死んじゃうんだよ！』

いっそくたばってほしい。と言うか、私が死にたい。

頼むから、私に対して哀れみの籠もった視線を向けるのはやめてくれ……。

神崎先生もしばらく固まっていたが、意を決して通話ボタンを押す。
そうしないと終わらないと思ったんだろう。

「……もしもし」

『やぁやぁ、みんなのアイドル、篠ノ之束さんだよ！　もすもす終日〜！』

あの人が名字まで名乗ったため、これまではごく一部だった視線がクラスメイト全員分になり、私へと向けられた。
……泣きたい。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

帰りに新しい携帯を買おう。
もしかしたら無駄かもしれない決心をして、通話ボタンを押した。

「……もしもし」

『やぁやぁ、みんなのアイドル、篠ノ之束さんだよ！　もすもす終日〜！』

あのバカが名字まで名乗ったため、全員の視線が篠ノ之さんへと集中する。
事情を知ってる人達はともかく、これまで知らなかった人も、彼女が何で「この世の終わり」のような顔をしていたか分かったはず。
篠ノ之なんて珍しい名字、他にほとんどいないし、関連性を疑うのは当たり前。

（……気の毒に）

机に突っ伏したまま顔を上げようとしない篠ノ之さんに対し、そう心の中で呟いた。
とりあえず通話には出たから、さっさと切ろう。
そう思い、電源ボタンに指を……。

『おーっと！　電話切る前に東さんの天気予報！　今日は晴れのち人参が降るでしょう！』

「「「「は？」」」」

ぶつっ……つーつーつー。
こっちから切る前に、向こうから切られた。
なんだったんだ？　特に最後の天気予報。

「……先生」

「どしたの？」

「何か飛んできます」

「っ！　全員窓から離れろ！！」

ボクの声に我を取り戻し、窓際の生徒が全員、席を立って離れる。
そして数コンマ後……。

どごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん！！！

……顔を上げると、そこにあったのは。

「……人参？」

誰かがそう呟く。
あれが何だか分かってる子（被害に遭った子）は引き攣った顔になってる。
そして篠ノ之さんは「見たくない物を見てしまった」とばかりに、露骨に嫌そうな顔をして顔を背ける。
ボク達が唖然としている中、その人参がぱかっと割れた。

「久しぶりだねくぅくん！　ぶいぶい！」

中から現れたのは、1人の女性。
何よりもそのウサミミが特徴的で、どこか「不思議の国のアリス」を思われる洋服を身に纏っている。
黙っていればそれなりに美人だろうけど、とにかく残念としか言い様が無い。

「うん、久しぶりだね。さっさと帰れ。二度と戻ってくるな」

そう言って、下に誰もいない事を確認し、人参を蹴飛ばす。
派手な音を立てて人参は落下した。……ふぅ、これで世界は平和になった。

「もう、ひっどいなぁ〜。いきなり蹴飛ばすなんて！」

……チッ。

と、天災こと篠ノ之束はくるりと身を翻し、何も見ていないとばかりに必死に顔をそらしている篠ノ之さんへと近寄る。

「やぁ！」

「……どうも」

心底嫌そうな顔でそう答える篠ノ之さん。

気持ちは分かるよ。でも、ボクにもどうにか出来る時と出来ない時があるんだ。

「しばらく見ない内に大きくなったね〜、箒ちゃん。特に、そのおっぱいが」

「ふんっ！！」

「そげぶっ！？」

どこからともなく取り出した木刀が煌めき、束が大きく吹っ飛ぶ。

思わず心の中で「グッジョブ」と叫んでしまった。

「……殴りますよ？」

「殴ってから言った～！　箒ちゃんひっど～い！」

正確には、木刀でぶっ叩いたわけなんだけど。
なお、間違いなく篠ノ之さんの渾身の一撃を受けて、傷らしいものが１つも見あたらない束にはツッコまない。

「……で？」

「で？」

「何しに来たんだよ。授業中だったんだけど？」

思いっきりこんな事になってるし……ほんと何しに来たわけ？

「別に何の用事も無いよ？　久しぶりにくぅくんや箒ちゃんの顔が見たいな～って」

「神崎先生、この人ぶった斬っちゃってもいいでしょうか？」

いつの間にか木刀ではなく、真剣を握っている篠ノ之さん。
そうだね、さっさと片付けちゃおう。その方が世界のためだ。

ボク達がにじり寄ると、束はさっと後ろ……というか、さっき人参が落ちてきて空いた穴へと飛び込む。
……どどどど、というホバー音が聞こえ、そこには再起動した人参に捕まった束の姿があった。

「ふはははは！　さらばだ明智君、また会おう！」

「誰が明智君か！」

高笑いしながら、そんな残念美人は去って行った。
が、空の向こうへ飛び立っていく中、篠ノ之さんが木刀を投擲する。
……「あだっ」という声が聞こえたので、クリーンヒットしたと見ていい。
あれで撃墜していてくれたら、よりいいんだけど。

「あの……篠ノ之さん？」

「……頼む、触れないでくれ。出来ればこのまま忘れさせてくれ」

……しかし、ボク達はここで気づくべきだった。
あの天才ならぬ天災がここへやって来た時点で、何かが起きる予兆だったのと。
そして、ボクがそれに気づいた時、既に事態は動き出していたのであった。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ａｓｕｎａ〕

部活が無期限休止になりました。
アルバイトがクビになりました。
春休みが潰れる事になりました。
クラスメイトから村八分にされました。
いいんちょからは思いっきり殴られました。
ネギからはこれ以上無い冷たい目で見られました。
……うん、自業自得だから文句を言うつもりは無いんだけど。

「はぁ……」

それでもやっぱりため息が出てしまう。
今思えば、何であんなバカらしい噂に流されたのかが分からない。
魔法なんてあるわけないし、そもそもあるか無いか分からないものを探しに行った自分が恥ずかしくなってきた。
……本当に今更なんだけどさ。

「……あれ？」

ふと、誰かが言い争う声が聞こえてきた。
視線を横に向けると、誰かが言い争ってる。1人は本校の制服を着た男子生徒で、もう1人は女子（うち）中学の生徒。確かあの子……F組のしののさん、だっけ？　剣道で有名だって聞いた事があるような無いような……。

「一夏！　今日こそ手合わせしてもらうぞ！」

「いや、だから俺、剣道はもうやめたって。それに今日は約束があるし」

「も、問答無用だ！　とにかく来い！」

……痴話喧嘩、かな？
周りも何だか生暖かい視線で見守ってるように見えるし。
そこへ、とたとたと駆け寄ってくる女の子が1人。男子生徒と同じく本校の子で、タレ目がちで制服の袖がだぼついてるのが特徴的。

「おりむー、お待たせー」

「あ、来た来た……悪いな、箒。じゃ」

「ちょ、ちょっと待て！」

しののさんが呼びかけるけども、その一夏と呼ばれた男子生徒は駆け寄って来た女の子と一緒に行ってしまった。
完璧にやり過ごされ、しののさんががっくりと膝を突く。
あ、あの……大丈夫？

「あ、ああ……いつもの事だからな」

と、しののさんが顔を上げて、私の顔を見て固まる。
え、あ、あれ？　私なんかしたっけ？

「……確かA組の……バカレッドだったか？」

「神楽坂明日菜よ！　誰かバカレッドなのよ！？」

「いや、噂は聞いている。魔法の本を探しに行った挙げ句、相当絞られたと」

「うっ……」

事実なだけに、反論できない。
てか、他のクラスの人にまで知れ渡ってるほど有名って何なのよ。

「まあ、それはどうでもいい。……そう言えば、A組だったら桜咲刹那を知っているな？」

「え？　そりゃあ一応、同じクラスだし……」

「だったら桜咲に伝えてくれないか？　たまには剣道部に顔を出せ、と」

……しののさんによると、桜咲さんは滅多に剣道部に出て来ないのだとか。
なんと、選手として登録されていた試合の時にも出てこなかったため、他の生徒はもちろん、相手にも迷惑がかかったらしい。

「事情があるなら、それを説明してもらえれば聞き入れると顧問も言っているんだが……」

「うーん……少なくとも、アルバイトとかしてるって聞かないけど」

実際、桜咲さんとあんまり話した事ないから分かんないんだよね。
木乃香の幼なじみらしいけど、木乃香と話してるとこ見た事無いし。

「とにかく、それだけ伝えておいてくれ。頼む」

「あ、うん。分かった」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　？？？〕

「……おりむー、良かったの？」

いや、約束があったのは事実だし、仕方ないって。

のほほんさんこそ悪かったな。わざわざ来てもらって。

「わたしはいいよ～。たっちゃんやかんちゃんからも頼まれてるし～」

「そっか」

「……でも、やっぱり事情話した方が良くない？　いつまでも長引かせてると、変な誤解されちゃうかもよ～？」

そうなんだよなぁ……。

実際、楯無さんが過剰なコミュニケーションをしてくるので、箒からは剣撃を撃ち込まれ、鈴とセシリアからはつや消しの目で睨まれ、シャルとラウラなんて……よく生きてるよな、俺。

ここで事情を話すのは簡単だけど、それだと千冬姉や神崎先生達にも話を通さないといけなくなる。俺個人の問題じゃないって事もあるし、何より下手に話せば箒たちも巻き込みかねない。

「とりあえず、たっちゃんに相談してみたら～？」

「そう、だな」

普段はお気楽極楽トンボなあの人だけど、ここぞという時には頼りになる人でもある。

……代わりに何を要求されるかが怖いけど。

（……あれからもう5年も経つのか）

束さんが引き起こした騒動で、箒たちが麻帆良から引っ越して5年。
思えば、あの頃から神崎先生にはお世話になりっぱなしな気がする。
加えて去年のアレの事もある。本当に……頭が上がらない。

「どうにか、しないとな」

第１０話：逃れられぬ過去（前書き）

最強の姉、登場。
そして何だか物語は私でも予想不可能な方向に……。

第１０話：逃れられぬ過去

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

妾はまぁ、基本的に専業主婦じゃから、玖楼の仕事を手伝ったりする事は少ない。
麻帆良では一般人じゃからな。下手に人前で力を使うわけにはいかんじゃろ？
これまで力を使ったのは覚えている限り２度。
１度はあのウサギがバカしでかした５年前の事件。何でも関係者の間では「篠ノ之束の乱」と呼ばれているらしい。
そして２度目は……去年の今頃じゃったか？　巷では「銀の福音事件」と呼ばれている事件。妾も詳しい事情は知らんが、何でも大学の方で極秘裏に行われていた実験機が暴走したとか。
裏の事も絡んでいたらしく、学園の魔法先生達も鎮圧に駆り出され……妾もちょっと暴れたぞ？　まぁ、気づかれないようにしたが。
その事件に巻き込まれたのが、現在本校２年（来年度は３年）の織斑一夏、というわけじゃ。
で、何で妾がそんな話をしているかというと……。

「……というわけで、最近追求が厳しくなってきまして」

今、妾の前では玖楼に相談する当の本人がおるからじゃ。
幼なじみから「剣道を辞めた理由」を追求され、困っているのだとか。

「やっぱり、理由を話すにしても1年前の事も話さないといけなくなりますし……」

「あ～……」

玖楼も困った様に、妾と顔を見合わせる。

「とりあえず、経済的な問題で剣道を辞めざるを得なかったって説明すれば？」

事実、5年前に剣道を辞めたのもそれがあったからじゃろ？
織斑家は姉と弟2人だけじゃし、経済的にも問題を抱えているのは明白。
剣道というのは、防具の維持費や合宿費用などでもなかなか金銭的に響くようじゃし、その辺りの事情から剣道を辞めたと聞いておる。
嘘は言っておらんのじゃし、それを言えばよかろう。

「……それ、もうしました」

「「え？」」

「そう説明したら、『それなら奨学金がある。お前の腕ならそれくらい容易いだろう！』と自信満々に言われました」

妾達は思わず、天を仰ぐ。……麻帆良は部活動が盛んな学園じゃから、その辺りが裏目に出たか。
ちなみに奨学金とは、優秀な成績を収めながらも家庭内などから「金銭的・経済的」な問題（貧乏だったり片親だったり）を抱えている生徒のために進学などの費用を給付する制度の事じゃ。
麻帆良学園でもそれは例外では無く、成績以外にも部活動に力を入れているため、部活で優秀な成績（大会などで入賞）を収めている生徒にも、この制度は適用される。
妾はこれでも、麻帆良学園教師の妻じゃからな。この程度の事くらいは知っておる。

「まぁ、そりゃそうなんだけど……君自身、有名になるわけにはいかないもんね」

剣道を辞めたのも、その辺りの事情があったからの。
しかし……そのほーきなる女子にも困ったものじゃな。完璧に昔のお主しか見ておらんではないか。

「ですよねぇ……俺、剣道辞めて5年経つんですけど」

「そりゃあ、1年前のあれこれがあって今も修行中って言っても、それが剣道強いに繋がるとは言えないしねえ」

「それで下手したら、『その根性をたたき直してやる！』って剣道場に連れ込まれそうですし」

「確かに」

しかし、本当にどうするのじゃ？
相手が篠ノ之ほーき1人ならともかく、あ奴の周囲には他にも女子がいるじゃろう？　中には「せかんど幼なじみ」とやらもいるそうだし、下手な言い訳は通用せんぞ？
これまでの様子から、どんな言い訳しても止まりそうに無いのが本音じゃが。

「そうなんですよね……マジどうしよう」

頭を抱えてテーブルに突っ伏す織斑一夏。
頭の痛い問題じゃのう。下手に嘘を吐けば、それを追求されてボロを出しかねんし……本当に困った。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｒｉｎ〕

「まったく！　一夏の奴は……」

その日、学食にて箒がやけ食いする姿が見られた。
この子がストレスを発散する時は、やけ食いするか竹刀を振るうかのどちらかだ。
それについて別に言う事は無い。だって、他の人に特に迷惑はかかっていないし。……でもさ、食べた分全部胸に行くってどうよ。
あたし達（スレンダー派）に対して喧嘩売ってんの！？

「しかし、一夏さんは何故剣道を辞めてしまったのでしょうか？」

苦笑いしながらこれまでの流れを見守っていたセシリアが、紅茶を飲みながら尋ねてくる。
元を正せばそこなのよね。まぁ、この中では2番目に付き合いが長いあたしも、そこまで詳しく知ってるわけじゃないんだけど……。

「やっぱり、経済的な問題があったからじゃない？　一夏って両親いないし、千冬さんもアルバイトしながら学費稼いでるらしいし」

「……ああ、前にそう言っていた」

「なら何で納得しないのよ」

「しかし、それなら奨学金があるだろう？」

……そう言えば、そうよね。
あたしは剣道してる一夏は見た事ないけど、剣道部の友達が言うに「すごい腕だった」っていう噂だし、箒自身も「私を凌駕する」って言ってるから、奨学金を取る事自体は難しくないはず。
そもそも、成績だってそこまで悪くないから、奨学金の申請だって問題無いわよね。

「その辺りを追求したが、茶を濁された。今日も問い詰めたらのらりくらりと……」

「……では、他に原因があるのかもしれませんね」

「他の原因？」

ええ、とセシリアが頷く。
……確かにそれしか無いわよね。でも、どんな原因だって言うのよ。

「例えば、剣道をしないのではなく『出来ない』。経済的問題の他にも問題があって、それで剣道が出来なくなった、と」

「経済的なもの以外、か……」

「ええ。……あくまで可能性の話ですが、『試合で怪我をして剣道が出来なくなった』という肉体的な問題や『剣道絡みでトラウマになるような事があった』という精神的な問題」

うーん……確かにあり得る。
アイツ、なんだかんだで自分の問題とかあんまり他人に話さないタイプだし。
ま、とりあえず熱くなってるこっちのに一言言っておくとしよう。

「箒、あんたも少しは落ち着いたら？　一夏にだって事情はあるだろうし、無理矢理問い質すのは良くないわよ」

「……何故だ」

「信じて見守るってのも、また愛なのよ。それに、しつこくしてると嫌われるわよ？」

「……」

憮然とした顔で立ち上がり、すたすたと食器を持って行ってしまった。
……あれが無ければ、いい奴なんだけど。

「しかし、箒さんにも困ったものですわ。一夏さんの意志を無視しているではありませんか」

「……そこも問題よね」

顔を見合わせ、思わずため息を吐く。
5年前に箒のお姉さん、篠ノ之束さんが起こした事件で篠ノ之一家（束さん除く）は麻帆良から引っ越さざるを得なくなった。で、当然一夏とも別れざるを得なくなったんだけど……やっぱり箒としては、その頃から一夏に恋してただけあって、その頃の一夏を重要視する傾向がある。
人間、誰だって大きく変化する。あたしは5年前からずっと一夏と一緒だったから、一夏の変化にも違和感を感じる事は無かった。セシリア達は割合最近からの付き合いだし、昔の事になんて引っ張られるはずがない。
だけど、箒は違う。箒が重要視しているのは、昔の『自分と別れる前』の一夏。今の一夏を無視して、昔の一夏ばかりを求めてる。

「一夏さんがその辺りの事情を説明してくれれば、話は早いのですが……」

「それをしないって事は、やっぱり何かあるって事よね」

そもそも、それを話しても箒が止まるかが謎だけど。
一夏、いい加減あんたもあたし達を頼るって事を考えなさいよ。いつまでも、あんたが守ってばっかじゃないんだからさ。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈｉｆｕｙｕ〕

久しぶりに我が家へ戻ると、何故か一夏が沈んでいた。
相当深刻そうな顔をしていたので、何があったと尋ねると……箒から「剣道を辞めた件」でしつこく追求されたと答えた。

「……それは、マズイな」

「神崎先生にも相談したけど、やっぱり答えは出なくってさ……」

……思えば、神崎先生には5年前からずっと迷惑をかけてばかりだな。
5年前、あの馬鹿がしでかした騒動の被害を受け、さらに逃げたアイツの後始末までしてもらい、その挙げ句に1年前の事件だ。
先生は「気にしなくていいから」と言っていたが、もしかしたら今後ずっと、あの人に頭が上がらんかもしれん。

「いっその事、全部話したらどうだ？」

「千冬姉！　それは」

「分かっている。だが、それくらいしないと向こうも納得しないだろう？」

「そりゃ、そうだけどさ」と俯く一夏。
一夏の懸念も分かる。何せ、全て話すとなると、1年前の事件の発端……私たち家族の事も話さなくてはならなくなる。
もちろん、それを明かしても態度を翻すような奴らでは無い事はよく知っている。むしろ一夏のために“こちら側”へ踏み入ろうとする可能性の方が高い。だからこそ、一夏も簡単に判断できずにいるわけだが……。

「アイツらを信じてやれ。何事もまず信じる事から始まる」

「千冬姉……」

「……あの時も言っただろう？　私たちは家族だ。ちょっと他と

は家族としての形が違うだけで、他は何も変わらん」

そう言って、一夏の手を取る。

……もうあれから１０年以上経つ。あの頃は小さかった手が、私とそう変わらない大きさにまでなった。

「まぁ、神崎先生にもう１度相談した方がいいだろう。「全部話す」という選択肢を加えた上でな」

「……ああ」

そんな感じに話が纏まりかけた、そんな時だった。

「やっほい！　天井からぽぽぽぽぽ～ん！　プリティチャーミーな東さんだよ！」

空気を読むことなく天井から馬鹿が、勢いよく回転しながら飛び降りてきたのは。

なお、私たちの視線が氷点下のごとく、冷たいそれだったのは言うまでもない。

「あ、あれ？　どうしたのちーちゃん、いっくんも。そんな目して」

「……東、何の用だ」

殴り飛ばしたいのを抑え、出来る限り冷静な声でそう尋ねる。

「酷いなぁ。愛しのちーちゃんといっくんに会いたいと思っちゃいけないのかな？」

「……一夏、塩持ってこい塩。袋に入ったままで構わん」

「分かった」

「じょ、冗談だよ！」

さすがに本気だと受け取ったのか、これまでのの飄々とした態度から一変し、真面目な雰囲気を纏う束。

……現在、日本中の魔法使い達から指名手配中のコイツが、日本の魔法使いの本拠地である麻帆良に現れる。それがどういう事なのか、分からないほどコイツも馬鹿じゃない。

「いやさ、最初はくぅくんと箒ちゃんの顔が見たくて、こっちに来たんだけどね？　教室でそれやって、さっさと帰ろうとしたわけだよ」

「お前……」

「ここからが重要な話！　でね、箒ちゃんが放課後、いっくんを誘ってたでしょ？　その後でなーんか変な子と話してたんだよ！」

「変な子？」

お前以上に変な奴がいるとは思えんが。

「変な子だよ！　オレンジ色のツインテールで左右の目が違う、なーんかこう……変な感じがした子！」

「……あ、それもしかして２－Ａの神楽坂さんかも」

一夏が思いついたように、そう呟く。
２－Ａ……確か、私が“アルバイト”で麻帆良から離れている時、何かしでかしたと聞いていたが。

「それでそれで！　束さん気になったから、その子の事調べてみたんだよ。そしたら凄い事が分かっちゃった！」

「凄い事？　何だそれは」

「なんと！　いっくんと同じ、あの能力持ちだったんだよ！」

「何だとッ！？」

思わずテーブルを叩き、立ち上がる。
一夏と同じ能力だと、あり得ん。何故ならあれは……。

「うーん、同じっていうより……そうだね、ちーちゃん的には“黄昏の姫御子”って言った方がわかりやすいかも？」

「……黄昏の、姫御子」

呆然と、呟く。
ちょっと待て。大戦が終わったのは２０年前。確か姫御子は……５歳前後の姿をしていた。
戦後どうなったか知らなかったが、まさかそう言う事なのか？

「ちーちゃんの想像通りだと思うよ」

にやにや笑いながら、束がそう私の考えを肯定する。
……お前の事だ。どうせ、全部分かった上で私たちに話しに来たんだろう。

「どうかな～？」

「……まぁいい。一夏、神崎先生のところへ行くぞ。この事は……さすがに私たちだけの手には負えん」

「あ、ああ」

しかし、何故よりによって麻帆良なんだ。
黄昏の姫御子。アスナ姫……あなたはまた、私たちから平穏を奪うと言うのか。

第１１話：闇夜の襲撃

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

「すっかり遅くなっちゃった……」

書類を抱えながら、僕は学生寮への帰路に就いていた。
期末テストは残念な結果に終わったけど、みんながこれまで以上に勉強に打ち込むようになってくれてよかった。
……まぁ、原因が原因なだけに、その流れは当たり前なのかもしれないけど。
特にアスナさんが凄い。バカレンジャーの中でも熱心に授業を受けていて、めきめき成績を上げてきてる。このまま行けば、バカレッドなんて呼ばれなくなるかも。

「……」

ふと、足を止める。
後ろを振り向かぬまま、背後に向かって言葉を投げかける。

「何のご用でしょうか？　色々と忙しいんですが」

「……ネギ・スプリングフィールド、だな」

男のような、女のような、子供のような、老人のような……そんな奇怪な声が響く。
いつの間にか、周囲には誰もいない。……しまった、変な空間に閉じ込められた。
振り返ると、そこには黒いマントに身を包み、仮面で顔を隠した変な人がいた。

「どちら様ですか？　少なくとも知り合いじゃありませんよね」

「……お前に恨みは無い。しかし平和の為、消させてもらう」

その手に、大振りの鎌が握られる。
……また、だ。
イギリスを離れて、日本に来てもこれは変わらない。英雄の息子という事実は決して消えない。
ポケットから携帯用の杖を取り出し、展開する。

「ラ・ステル・マ・スキル・マギステル！」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ａｓｕｎａ〕

「アイツはいつもいつも女とデレデレして……気に入らん！！」

「そ、それ大変ね」

忘れ物に気づいて学校へ戻る途中、何故か篠ノ之さんと遭遇してしまい、こうして愚痴られている。
内容は主に、「幼なじみがモテ過ぎて困る」というもの。最初は愚痴だったんだけど……正直、惚気にしか聞こえない。

「しかしだな、それだけ人気があるというのはある意味喜ばしいような気もして……」

「あ～、それは大変ね～」

適当に返しながら、どこで別れようか考えてる途中、変な音が聞こえた。
殴り合うような……時々、甲高い金属音も聞こえる。え、何この音……誰かが喧嘩でもしてるの？

「この音……」

同じく、音を聞いた篠ノ之さんの表情が一変する。
そして突然、その方向へと走り出した。
ちょ、ちょっとどうしたって言うのよ！？

「そこで何をしているッ！！」

曲がり角を曲がったそこには、全身黒づくめの仮面の人に、立ち尽くす篠ノ之さん。そして……ボロボロになったネギがいた。

「ネギ！？」

スーツもボロボロ。顔もいくつか切り傷のようなものが出来ていて、頭からは血を流している。
すぐにネギに近寄ろうとするけど、篠ノ之さんに手で制される。

「もう1度聞く。そこで何をしている」

「……」

白仮面は何も答えず、持ってるデカイ鎌をこちらへと向けてくる。
え、何これ……まさか本物？

「アスナさん、逃げて……」

え？　と尋ね返そうとした瞬間、何かがぶつかり合う音が響いた。
見れば、白仮面の鎌を篠ノ之さんが木刀で受け止めていた。もちろん鎌の部分を受け止めるんじゃなく、柄の部分を。

「何の、つもりだっ……！」

「目撃者は排除する」

「くっ！」

鎌を振り払い、距離を取る篠ノ之さん。
そしてまた打ち込み合い、相手の鎌を下からの攻撃で振り払い、突きで白仮面を吹き飛ばす。
す、凄い。さすが剣道の全国大会優勝者……ってそうじゃなくて！　ネギ、あんた大丈夫なの！？

「な、なんとか……」

「なんとかじゃないわよ！　血出てるじゃない……」

えっと……なんか持ってたっけ？　絆創膏じゃあ……無理、よね？

「それより、あの剣道の人も連れて、早く逃げてください！」

「はぁ？　あんた、何言って」

「あの仮面の人の狙いは僕です！　それに、あの人はまだ本気を出してない！」

「え？」

でも、今篠ノ之さんに吹っ飛ばされて……。

そう言おうとした時、妙な悪寒が背筋を伝った。

「ガイエル・ガイラル・ガイエンディ」

白仮面が立ち上がり、何かを呟いている。

「闇夜を切り裂く一条の光。我が手に宿りて敵を喰らえ」

「！　いけない避け――――」

「“白い雷”！！」

その瞬間、白仮面の手から白い電気みたいのが出て、篠ノ之さんを包み込んだ。

「あ、あああああああああああああああああああああ！！！！」

叫び声を上げ、その場に倒れる篠ノ之さん。

い、今の何！？　まるで魔法……。

そして白仮面が倒れたまま篠ノ之さんへ近づき、その大鎌を……。

「目撃者は、排除」

「だ、ダメっ！！」

篠ノ之さんに駆け寄ろうとするけど、足が動かない。

怖い。何なのこれ。怖い。

身体が震える。歯がかちかちして止まらない。寒気がずっと身体を包んでいる。

私が動けない中、白仮面は大鎌を篠ノ之さんに向かって振り下ろし

――――――

ギィンッ！！

突然割り込んだ影によって、鎌が両断され、刃の部分だけが明後日の方向へと飛んでいった。

「大丈夫か、箒」

「……いち、か？」

〔Side Out〕

〔Side Ichika〕

間に合って良かった。やっぱり、あの時千冬姉と別行動を取って正解だった。

「……何だ、お前は。何故ここに入って来られた」

「通りすがりの正義の味方、ってトコかな」

真っ直ぐと白仮面を見据え、手にしていた刀剣『雪片弐型』を向ける。

まぁ、入って来られた理由については、ちょっと特殊な能力持ちだからとしか言い様が無い。

俺自身、その能力については詳しく知らないし、まだうまく使えるわけじゃないしな。

で、何でここで起きてる事に気づけたかって言うと……ぶっちゃけ勘だ。

（だが、勘を信じて正解だった）

今、割り込まなかったら箒が殺されてた。

白仮面の雰囲気といい、さっきの攻撃といい、箒のやられ方といい……間違いない、あっち側の人間だ。

「……悪いが、箒の事頼んでいいか？」

「あ、う、うん！」

近くにいた女子生徒が、倒れていた箒を掴んで下がっていく。
白仮面は動けない。何せ武器を壊された挙げ句、俺に刃を向けられているのだから。
……ここでそのままやったら、箒の事も巻き込みかねない。向こうが人質にする危険性もある。

「ぬぅんっ！！」

白仮面が柄だけになった鎌を突き出してくる。
刃の部分が無いとはいえ、何かしらの力で強化されていて、まともに受ければ大怪我は免れない。
雪片弐型でそれをはね飛ばし、逆に相手の腹目がけて蹴りを入れるが……何か見えない物で弾かれた。

（結界……障壁って奴か？）

これがあるのだとすれば、普通に殴ったり蹴ったりしても届かない。
障壁の防御力を超える力でやれば貫けるかもしれないが、修行中だからぶち抜けるとは限らない。
……よし、ならアレだな。

「……一意、専心」

周りの景色が、モノクロになる。
いや、俺の目が周囲をそう認識しているだけ。実際にそうなったわけじゃない。
今の俺に見えているのは、目の前の敵だけ。
『敵を斬る』
今の俺にあるのは、それだけだ。

「え」

誰の声かは分からない。もしかしたら、風の声かもしれない。
一瞬。否、一瞬にも満たない時間。
数コンマとも言える時間の中で、俺は白仮面を斬り捨てていた。

「な……！？」

斬られた事にすら気づかず、そのまま倒れ込む白仮面。
安心しろ、峰打ちだ。無闇矢鱈に命を奪うつもりは無いし、それにコイツには色々と聞かなきゃならない事がある。
適当に拘束しようと近づくと、白仮面が突然起き上がり、俺に背を向けて走り出す。くそ、浅かったか？
もう1度、雪片弐型を白仮面に向けて……。

「――――詰めが甘いぞ、一夏」

その声が響くとほぼ同時に、白仮面が倒れた。
女子生徒やボロボロな男の子には何が起きたか分からなかったみたいだが、俺には微かだが見えた。
恐ろしく速い斬撃。目を凝らしていなければ、見逃してしまうほど薄く鋭いそれを、千冬姉は飛ばした。
……俺の最大の目標。あそこまで到達するまで、あとどれくらいかかるのか……。

「さっさと逃げるぞ」

「え？」

「お前のさっきの攻撃で、結界も纏めて破壊された。……数分もしない内に集まってくる」

ああ、だから千冬姉も厳しい視線なのか。
なかなか加減が難しいな。それでも最初の方に比べたら上達してると思うが……まだまだだな。

「だが、悪くない一撃だった」

「……千冬姉」

「その事については後だ。……そっちも大丈夫か？」

「は、はい！」

千冬姉の問いかけに、いつの間にか気絶していた子供先生を抱きかかえた女子生徒が頷く。
オレンジ色のツインテール……あ、この子もしかしてさっきの話に出てきた「神楽坂さん」？

「でも千冬姉、あの白仮面は」

「心配するな。ここへ来る前に更識に連絡しておいた」

ああ、なら大丈夫か。
俺も箒を抱きかかえると、千冬姉を中心にした位置に固まる。
神楽坂さんや箒は何が起こるのか分からず、不安そうだが、きっとすぐ分かる。

「……神崎先生、お願いします」

『おっけー』

「「え？」」

2人がそんな声を出すと共に景色が揺らぎ、次に景色が元に戻った時、そこはどこか部屋の中だった。

「……え？　ここ、どこ？」

きょろきょろと辺りを見渡す神楽坂さん。
ああ、俺も最初はそうだったっけ。だっていきなりだもんなぁ。

「うっわー、結構手酷くやられたね」

「……神崎、先生」

突然現れた相手に、呆然とそう呟く箒。
学校の時のようにスーツ姿では無く、Tシャツにロングパンツと比較的ラフな格好をした、神崎先生がそこにいた。
箒や神楽坂さんにしてみれば、何でここに神崎先生がいるのかって話だろうし……。

「とりあえず、説明は手当ての後かな」

第１２話：君の名を呼ぶ

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

「これでどうかな？」

手当てを終え、篠ノ之さんに具合を尋ねる。
攻撃魔法を受けたみたいだけど、幸い向こうが手加減していた事もあり、そこまで深い傷じゃ無かった。
後はちょい痺れが残ってるかもだけど、その辺りは時間が経てば消えるはずだから。

「……信じられません。あんなに身体中痛んでいたのに……」

「神崎先生は治療霊術のスペシャリストだからな」

呆然としている篠ノ之さんに、千冬がそう説明する。
正確には、治癒だけじゃない。結界術に封印術も得意だよ。後は薬の調合かな。
ちなみに気絶してたネギ君は向こうの布団に寝かさせてある。起きないなら起きないで好都合だし。

「霊術？」

「そ。俗に言う魔法ってやつだよ」

とはいえ、外国から入ってきたやつじゃないよ？
日本という国が「いにしえの時代」から代々受け継いでいる、由緒正しい術の事だ。僕のとはちょっと系統が違うけど、陰陽道とかが有名どころかな？

「じゃ、じゃあまさかさっきの仮面の人が使ったのって……！」

「そっちも魔法。まぁ、あれは西洋魔術に分類されるけど」

「……」

神楽坂さんも篠ノ之さんも相当驚いていたみたいだけど、その事実を受け入れている。
何せ、ついさっき魔法使いと殺り合ったばっかだもん。おまけに篠ノ之さんは殺されかけてるし。信じざるを得ないよね。

「で、ぶっちゃけちゃうと……この麻帆良って街は、魔法使いの街なんだよ」

「「……え？」」

なお、この時の2人の顔は見物だったとだけ言っておく。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｈｏｕｋｉ〕

麻帆良学園都市が、魔法使いの街……？

「さすがに信じがたいかな？」

「……確かに信じがたい部分があるのは事実です。しかし、頷けるものがあるのもまた事実です」

そう答えると、神崎先生は意外そうな顔になった。

既に知っているかもしれないが、私は5年前から全国各地を転々とする生活を送っていた。
そして1年ほど前に麻帆良に戻って来たのだが……麻帆良で通用した常識は、外では全く通用しなかった。
……今思えば、姉さんはそれに気づいてあんな事件を起こしたのかもしれない。

「ところで、神崎先生は魔法使いなのですか？」

「うーん……大まかに分類しちゃえばそうなんだろうけど、微妙に違うような」

ちら、と先生が千冬さんや一夏に視線を向けている。
視線を向けられた2人は苦笑いしており……どうやらあの2人は神崎先生の事情を知っているようだ。

「では、一夏とはどういう関係で？」

正直に言って、これが1番聞きたかった事でもあった。
あの時の一夏は5年前に剣道を捨てたという男の動きでは無かった。
しかし、それでも剣道をしようとしない。
恐らく、これこそがその理由……！

「一夏、教えてくれないか？　何故お前が剣道を辞めたのか」

「……」

私の問いに、困った様な表情を浮かべた一夏が先生達の方を見る。神崎先生と千冬さんは何も言わず、静かに頷いた。

「……元々、剣道を辞めたのは経済的な理由からだ。俺と千冬姉に両親がいないの知ってるだろ？」

そう、一夏と千冬さんには両親がいない。
詳しく覚えていないが、十何年か前、麻帆良に引っ越してきて、ちょうど家が隣だったため私たちと親交があった。

「だから5年前、お前が引っ越してから少しして、剣道を辞めた」

それは、知っている。お前から聞いていたからな。
しかし麻帆良では部活動が盛んだ。当然、奨学金制度もしっかりしていて、小学校ならともかく中学でなら奨学金も出るはずだが……。

「俺も中学に上がってからそう考えた。千冬姉からも勧められて、奨学金の申請をしようと思っていた」

「思っていた？」

何故、過去形なんだ。

「……1年前だ。お前が麻帆良に戻ってくるよりも前に、俺はある事件に巻き込まれた」

「ある事件、だと？　いったい何があった。その事件がお前を変えたのか？」

とても悲しげな顔で、一夏が首を横に振る。

「……悪い。それは話せない」

「何故だ！」

「俺だけの問題じゃない。他の……もっと大きい問題とも関わってくる。だから、まだ話せない」

「……」

……分かった。なら、今はいい。

「まだ話せない」という事は、いつかは話してくれるのだろう？

「ああ、約束する」

……じゃあ、聞かせてくれるか？
お前が剣道を辞め、今もずっとその道を進もうとしない理由。
あの戦いぶりからするに、間違いなく全国は容易いはずだ。それなのに何故……。

「だから、だ」

「？」

「有名になるわけには行かない。俺は……命を狙われているから」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈｉｆｕｙｕ〕

……２年ほど前になるか。私が修行の一環でドイツへ行ったのは。単純に雪山でサバイバル生活だったのだが、少しドジを踏んでしまい、ドイツ軍の世話になっていた（なおボーデヴィッヒとはその時に色々と縁があり、今も「教官」と呼ばれている）。
ドイツに滞在すること３ヶ月。本来の予定では１ヶ月で帰るはずだったが、帰って来ない事を心配した一夏が私を探しに来て……誘拐されかけた。
下手人は、何かと柄の悪い女。
その時はたまたま束が近くにいた事（何故いたのか未だに不明だ。まさかとは思うがアイツ、私をストーキングしてたんじゃないか？）と、私が世話になっていた特務部隊の連中の助力により、誘拐は未遂で終わった。

「命を、狙われているだと……？」

呆然と、一夏の放った言葉を反芻する箒。
……私はあの時、気づいた。私と一夏を取り巻く問題は、１０年近く経っても何一つ解決などしていなかった事に。
そして１年前。私は……致命的な失敗を犯した。

「そう。一夏君は今、国の方から保護を受けてる。周囲には分からないよう護衛も何人か就いてる」

「何故ですか。ここは魔法使いの街でしょう？　なら麻帆良の魔法

使い達を頼れば」

そう言いかけて、箒が止まった。
どうやら、そこが分からないほど馬鹿ではないようだな。

「麻帆良学園も一枚岩じゃないって事だね」

私たちが何よりも危険視している相手が、魔法世界の大都市「メガロメセンブリア」の司法機関、メガロメセンブリア元老院。
奴らにとってしてみれば、私たちは死んだ身だ。
そして麻帆良学園は独立しているとはいえ、メガロメセンブリアの直轄機関。
保護を願ってそれが通ったとしても、いつどこから情報が漏れるか分からない。

「1年前の事件はボクも関係者だからね。色々引き受けたんだよ」

神崎先生は国の偉い人達とツテがあるらしく、その関係で保護を願う事が出来た。
一夏の護衛として派遣されてきたのが、更識楯無と妹の簪。そしてその2人の従者である布仏虚と妹の本音だ。なお、更識姉は護衛であると共に一夏の武道の師でもある。

「では、いつも更識先輩が一夏に過剰なスキンシップを取るのは…

……」

「いや、あれはあの人がそーゆー人なだけだから」

更識は何と言うか、驚異的なカリスマを持つ「人たらし」だからな。
それに、どちらかと言うとあれは一夏よりも神崎先生の方を。

「こらそこ、変な事考えない」

……おっと、いけない。

〔Side Out〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

これであらかたの説明は終わったかな。

「神崎先生」

「ダメ」

篠ノ之さんの言葉を、一言で封じる。
このタイミングでこの子が何を言いたいかは分かる。大方、「自分に奴らと戦う術を教えてください」とか、その辺でしょ。

「何故ですか！」

「さっきの戦い、忘れたの？」

そう言ってあげると、さすがの篠ノ之さんも分からない訳じゃなく、黙り込んだ。
あのタイミングで一夏君が割り込まなかったら、間違いなく彼女は殺されていた。
こちら側に関わるという事は、必然的にああいう厄介事と関わっていく事になる。

「一夏君が命狙われてるってのは話したでしょ？　だから、一夏君の関係者である君もまた、こちら側に踏み込めば狙われる危険性はぐんと高くなる」

「ッ！？」

「これでも教師だし、危ない事しようとしてる生徒を止めるのも仕事なわけ。だからハッキリ言ってオススメは出来ない」

一夏君も、篠ノ之さんがこう言い出すと分かっていたから、事情を説明するのを控えていたんだろうね。
現に今、いつもの彼では考えられないほど厳しい顔をしているから。

「……まぁ、今日は色々あって疲れただろうから、休んでまた明日にでも考えなよ」

そう話が一段落した。
また話し合って決める事になり、篠ノ之さんは千冬と一夏君が送っていく事に。
で、問題は神楽坂さんなんだけど……。

「それでどうしたの？　さっきからずっと黙ってたけど」

何か思い詰めたような顔で、ずっと黙って話を聞いていた神楽坂さん。

最初はスケールの大きさに圧倒されてるのかとでも思ってたけど、どうも違うらしい。
何だかボク達が思ってるのとはまた、別の意味で深刻そうな顔で何かを考えているようだった。

「クラスの担任とは言え、A組とも知らぬ仲じゃないしね。よかったら悩んでる事話してみたら？」

もし、男のボクに話しにくい内容だったら、瑪瑙に代わるから。

「先生、あの……少し聞きたいというか、相談したい、というか……」

「……ふむ」

ボクから見て、神楽坂明日菜という女生徒はちょっと不思議な子だ。成績はよろしくないけれど、運動能力はピカイチ。クラスの中心でムードメーカー、と言ったところかな。
ただ、1つ気になってるのが中等部から近衛木乃香と同室になった事。普通、彼女と同室の人間と言えば、護衛とかそーゆーのを置くはず。……まぁ、ボクにはあんまり関係無いから気にしなかったけど。

「少し、長くなりそうかな。……瑪瑙、悪いんだけど」

「分かっておる」

そう答えると、瑪瑙が台所へ入っていく。
長引くんであれば、それなりに喉を潤す必要もある。後、ネギ君もあんな様子だし、今日は泊まっていった方がいいかな。
とりあえず、近衛さんにはボクから連絡しておく事にしよう。

第１２話：君の名を呼ぶ（後書き）

千冬って身内に対して過保護すぎるところがあるように思えます。原作でも、一夏に一切ＩＳの事を触れさせませんでしたし、自分がＩＳ学園で働いている事も教えていませんでした。そして「織斑マドカ」について、家族の事を尋ねようとする一夏を一蹴しています。原作で起きた誘拐事件でも、ドイツ軍の情報支援こそ受けていますが、彼女が１人だけで一夏救出に向かったため、第２回モンド・グロッソ決勝戦を棄権するという形になっており、その真相も明らかにされていません。もちろん、一夏の身の安全を考えて、自分だけで解決しようとしたのかもしれませんが……。

おまけに「亡国機業」。これを日本語の意味に訳すと、どうにも意味深な言葉になるんですよね……。

こっちにおいても、彼女が過保護だったのは同じです。

そしてそれ故に、文中でも語られた「致命的な失敗」を１年前に犯してしまったのです。

それがどんな失敗なのか。それが語られるのはおそらく、修学旅行が終わってからになるかと思います。

第13話：心の所在

〔Side　Menou〕

それは、必然だったのかもしれぬ。
宮廷を追われ、追い詰められた妾は九郎に助けられた。

「……」

……そして今、妾の本来の姿を九郎に見せておる。
妾がかつて名乗った名は「玉藻」。そして本当の姿は9本の尾を携えた狐。既に百年近く生きておる狐の妖怪じゃ。
さすがに小屋の中で獣の姿になるのはマズイので、人間の姿から限定的に顕現させておる。

「……隠していて、すまなかった」

本音を言えば、怖かった。
いくら優しい九郎と言えども、拒絶されるのでは……と。

「触ってもいい？」

「う、うむ」

そう了承を得てから、妾の尾の１つのそっと触れる。
九郎の柔らかい手が尾を撫でる度に、不思議な感覚が全身に走る。
心地良い様な……自然と、それは悪い物では無かった。

「……ふかふか」

妾の尾をなで続ける九郎に、恐る恐る尋ねてみる。

「こ、怖くないのか？」

「ん？　あんまり」

そんな九郎の答えに、思わずガクッとなってしまう。
ひょ、拍子抜けじゃ。話すか話さんかで悩んでおった妾が阿呆みたいではないか……。

「だってさ、瑪瑙は瑪瑙でしょ？　あんまり関係ないよ」

瑪瑙。それは九郎が妾にくれた名前。
かつての玉藻という名は、どうにも好きになれん。
ここへ来たばかりの頃、「名は持たぬ」と言うと、妾の目を見てそう呼んだ。

「……お母さんがいなくなって1人だったから、瑪瑙がここに来た時嬉しかった」

そう言って、ぎゅっと妾に抱きつく九郎。
本当ならば親に甘えているのが当然なはずであるのに、この子はずっと1人だった。

「だから、側にいて」

「……」

何も言わずに、そっと九郎の頭を撫でた。
そうして妾は、完全に心奪われた。
この子の命尽きるまで、妾は側にいよう。妾が側にいる限り、この子を守り続けよう。そう深く心に誓った。

〔Side Out〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

「先生……神崎先生！」

「んあ？」

……っと、いけないいけない。ついうたた寝しちゃってたか。
隣を見ると、そこには同じく中等部の瀬流彦先生の姿が。

「もうすぐ朝礼ですよ。しかし、どうしたんです？　随分お疲れのようですけど……」

「ああ、ちょっと色々あって」

すっかり寝不足だよ……ふぁあ。
あ、画面の向こうの君たちは分かってると思うけど、別に夫婦のコミュニケーションで疲れてるとかじゃないから。
神楽坂さんとの話し合いが思ったよりも長引いてさ。千冬や束から

も事情を聞いてみたけど……うん、まさかあそこまで深刻だとは思わなかった。

「それじゃ、また後で」

そう言うと、職員室を後にする。
しばらくの間、誰もいない廊下を1人で歩いていたけれど、足を止めずに口だけを開く。

「……それで、君はいつから知っていたのかな？」

「あら、何の事でしょう？」

そこにいるのが誰かは聞かない。
だって、それが誰かなんて聞かなくても分かる。

「とぼけても無駄だよ。お姫様の事、知ってて黙ってたでしょ？」

「……そう思う理由は？」

「2－Aの分の報告書。何かと理由付けて出すの渋ってたから」

彼女達が一夏君の護衛に就く前、周囲や同学年（当然、女子中学のも含む）に関する調査結果を報告書として提出している。

そのクラスに所属している魔法関係者の詳細について事細かく記載されたそれだが、何故か２－Ａの報告書のみが未だに提出されていない。
どちらにせよ、Ａ組とは関わり合いになりたくなかったから、これまで気にしなかったけど……。

「どうせ君の事だから、今持ち歩いてるんでしょ？　出して」

「……読んだら後悔するかもよ？」

「いいから」

右手を上に出すと、ぽんと１冊の分厚いファイルが降りてきた。
見た目は普通に文具屋で売られているようなファイルだけども、表には『麻帆良学園女子中学２－Ａに関する報告書』と書かれており、『関係者以外閲覧禁止』という印まで押されている。
そして裏面には『大丈夫。楯無おねーさんの報告書だよ』と、どこかで見たようなフレーズが書かれていた。
その辺りにはツッコまず、パラパラと中をめくる……。

「……」

……簡単に目を通し、深くため息を吐いた。

「ね？　後悔したでしょ」

「……気遣い、ありがと」

こうなると分かっていて、この子も報告書を出さなかったんだろう。
誰だってこう思いたくなる。ハッキリ言ってこれはひどい。

「とりあえず、また後で見ておく。色々ありがと」

「いえいえ」

その声が聞こえると、気配が消えた。
恐らく自分の教室へ戻ったんだろう。……ここから本校まで結構距離があるけど、あの分なら充分に間に合いそうだ。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ａｓｕｎａ〕

授業中、私はずっと上の空だった。
それは休み時間になっても変わらず、寧ろ不安はずっと大きくなっていくばかりだった。

「アスナさん、どうしましたの？」

「……ちょっとね」

いいんちょが心配そうにこちらを見てくる。
……そう言えば、この中で１番長い付き合いなのって、いいんちょよね。

「……ねぇ、いいんちょ。いいんちょから見て昔の私って、どんな感じだった？」

「無愛想で可愛げのないガキんちょでしたわ。そうですわね……今のアスナさんとは１８０度正反対ですわ」

「率直かつ的確な説明、どうもアリガトウ」

うん、それはまぁ……自分でも分かってる。
昔の私は同学年の子にはあんまり馴染めなくって、特にいいんちょとは喧嘩してばかりだった。

「いったいどうしたんですの？　いつものアスナさんらしくありませんわ」

いつもの私、か。

「ちょっと、分かんなくなっちゃったな、って」

「は？」

「ううん、何でもない」

いいんちょがおかしな物を見る目になったけど……まぁ、それはいい。
私がちょっとおかしくなってるのは事実だし、色々と思うところがあるのも事実だから。
……私には、5歳以前の記憶が無い。ある日、ふっと高畑先生と一緒にいて、麻帆良に来ていた。
これまで記憶が無い事を何とも思った事は無かったけど、ネギが来てから考えるようになった。……そして、気づいた。

（両親の顔も、何も思い出せない……）

皆無。そう言っていいほど、１０年前以前の記憶が無い。
どういう形で高畑先生に関わって麻帆良に来たのか。それすらも思い出せない。
それに気づいて、怖くなった。
私はどこで生まれて、どこで育ったの？
高畑先生当人に聞く事も考えたけど……どんな答えが返ってくるのか怖くて、聞けなかった。
だから昨日、魔法に関する事件に巻き込まれて、神崎先生の家にお邪魔した時、全部吐き出した。

「……なるほど、記憶が無いのか」

「はい……」

全部話し終えて、私は胸のつかえが取れた気分になった。
これまでずっと溜め込むしか出来なかったものが、やっと出て行ったからかな。

「確かに、記憶を消したり、都合のいい記憶を作ったりする方法はいくらでもあるの」

「ッ！？」

神崎先生の奥さん……瑪瑙さんの言葉に、過剰に反応してしまう。神崎先生が「男のボクじゃ話せない事もあるでしょ」と、気を遣って瑪瑙さんと2人だけにしてくれた。

「タカミチ・T・高畑も魔法使いじゃ。そなたが思っているとおり、暗示なり薬なりの方法で、そなたの記憶を消したのかもしれん」

「じゃあ……」

「しかし、記憶を消した事が事実だとしても、それがイコール真実とはならん。そこにどの様な意図があったかが分からんからのう」

高畑先生が、私の記憶を消した理由。
昔の私が何かを知っていたり、何かをしたから……とかですか？

「うむ。例えばじゃ、そなたにとっては辛い記憶だったものを消した、というのも考えられる。下手をすれば心に傷を作ってしまう……もしくは既に傷となっている事に対しては、有効的な治療法じゃからな」

「……」

「まぁ、妾には何とも言えん。昔のそなたに何があったかは、昔のそなたを知る者にしか分からん事じゃしの」

昔の、私。

麻帆良に来たばかりの頃は、周りに中々溶け込めなくて……特にいいんちょとは気が合わなくて喧嘩してて……。

「……その、記憶を取り戻したりとかは」

「出来るぞ」

「出来るんですか！？」

「うむ。妾もそうじゃし、玖楼にも容易い。じゃが……」

真剣な顔で、瑪瑙さんは私を見つめる。

「さっきも言うたが、そなたの辛い記憶を封じるために記憶消去を施されたのかもしれん。その場合じゃと、取り戻した記憶にそなた自身が押し潰されてしまう危険性が無いとは言えん」

「えっと、つまり？」

「下手をすれば精神崩壊する」

あまりのスケールの大きさに、呆然としてしまう。
えっと……そんなに、酷いんですか？

「あくまで可能性の話じゃ。どういう意図で記憶が封印されたのか、そもそも本当に封印されてるのかすら、現時点では分からんからの」

「……」

「……まぁ、今すぐに決断する事はない。その気になったらまた来るといい」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

……何じゃ、これは。何なのじゃ、これは。
なお、大事な事じゃから２度言うたぞ。

「何って、書いてあるでしょ？　報告書」

「それは分かる。しかしのう……」

問題なのは中身じゃ。あと、裏表紙の『大丈夫。楯無おねーさんの報告書だよ』とはなんじゃ。
何と言うか……酷いのう。

「まぁ、監視のために一箇所に集めたとすれば納得は出来るが……」

報告書の最初のページ。２－Ａの生徒の顔写真を指差しながら呟く。

「何故こんな場所に吸血鬼がおるんじゃ？」

「さぁ？」

妾の指差した写真に写っているのは、とてもではないが中学生には見えぬ金髪の少女。
名前はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。傍から見ればごく普通の留学生にしか見えんじゃろうが、裏の関係者にとってしてみれば重要人物に他ならぬ。
かつて“闇の福音”とも呼ばれた吸血鬼の真祖。その実力は間違いなく「最強」の一端に属するであろう魔法使いの１人じゃ。
……なーんでこんな場所で学生やっておるんじゃろう。

「しかもこれ、幽霊じゃし」

出席番号１番、相坂さよを指差す。
制服も昔の型じゃし、それに何じゃこの「１９４０~」とは。
まさかとは思うが、６０年近くここにおるのか？　それ完全に地縛霊じゃし。

「うーん……ボクも『なんか変だな～』とは思ってたけど、まさかここまでとは」

……お主、朝礼とやらで何度かＡ組に行った事はあったじゃろ？

「あんまりあそことは関わりたく無かったから、さっさと済ませて戻ってたし。それにＡ組の子苦手なんだよ」

まぁ、分からなくはないが……。

第１４話：桜通りの吸血鬼（笑）（前書き）

ちょっぴり、エヴァの扱いが悪いかもしれませんのでご注意を。

第１４話：桜通りの吸血鬼（笑）

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｒｉｓｈｕ〕

「ほう……つまり、お前なら私にかけられた呪いを解く事が出来るという事か」

「ああ。だが準備に時間がいるぞ。必要なものもあるしな」

俺は今、エヴァと会談を行っている。
よくエヴァの呪い云々で失敗してる転生者がいるが、俺はそいつらとは違う。
「ナギの戦友」や「英雄」というネームバリューがうまく効いたみたいだぜ。

『あの馬鹿が迷惑かけてすまなかった！』

っていう風に土下座したら一発だった。
くくく……まず必要なのは誠意なんだよ。

「必要なもの？」

「呪いをかけた馬鹿の血だ。まぁ、これは血縁者でもＯＫなんだが」

「……なるほど。ネギ・スプリングフィールドか」

そう、原作でもエヴァが薬味の血を吸って解呪しようとしていたように、呪いを解く儀式のためには呪いをかけた張本人……ナギ、もしくはその近親者の血が必要となる。
俺の“答えを出す者（アンサー・トーカー）”でもそう結論が出ている。どちらにせよ薬味襲撃イベントは起こす必要があるって事だ。
ついでに、茶々丸イベントでも救出すれば、あんまり懐かれてないような茶々丸にもフラグを……ぐふふふふ。

「とりあえず、狙い目はもう少し経ってからだな。それまで力を蓄えておけよ」

「分かっている」

ぐふふ……さあ、これで薬味は完全退場にしてやろう。
思えば、なーんか原作とは微妙に違う気がしていたが、退場にさえしてしまえば問題無い。
ここからは、俺の時代だぁ！！

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｅｖａ〕

「マスター、本当に高天原先生の言う通りにするつもりですか？」

「途中まではな。どうやら、奴の思惑はネギ・スプリングフィールドを排除する事のようだ」

どちらにせよ、私が呪いを解くためにはあのぼーやの血が必要だ。それも死体の血では無く、ぼーや自身から流れ出る生きた血がな。だから、今ぼーやを始末されるわけにはいかん。あくまで私が血を吸ってからなら問題無い。

「だが、ナギの無礼を土下座で詫びた事は評価しようじゃないか」

「……」

「どうした、茶々丸」

「いえ……あまり高天原先生を信用しすぎるのは危険かと」

ふん、それくらい分かっている。
直接会うのはこれが初めてだが、奴の悪評はこれまで何度も耳にしていた。
大戦後、帝国の皇女を娶っておきながら、あちこちで浮き名を流しているという。……吸血鬼である私を狙っているとは考えにくいが、とにかく気をつけておく事にしよう。

「ああそうそう。超にこの事を報告するかはお前に任せる。どうせ、お前のメモリーを覗けば一発でバレるだろうがな」

いつだったか覚えていないが、奴の事を知った超が「どういう事ネ」と狼狽えていたな。
大方、高天原が麻帆良に来るとは思っていなかったんだろう。私にとってしてみればどうでもいいが。

（さて、ぼーやはどうでるかな）

じじいによると、魔法使いとしては相当優れた才覚を秘めているようだが、実戦経験はほとんど無いだろう。
温室育ちの魔法使いに、先輩として現実の厳しさというものを教えてやろう。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

「……これで大丈夫です。じゃあ、私はこれで」

「はい。どうもありがとうございました！」

僕がそう言うと、長谷川さんもぎこちなく微笑んで戻っていった。
麻帆良学園の教職員はパソコンが１台与えられ、それを使ってプリントを作ったりしている。
ついこの間、学園長先生から渡されたんだけど……パソコンを使うのが初めてで、設定とかそーゆーのが分からない。そこで、出席

簿にあった「パソコンが得意」というタカミチさんの書き込みのあった長谷川千雨さんを尋ねてみた。
最初は結構辛辣な対応を取られたけど、話をする内に打ち解けて、初期設定からインターネットへの接続もやってくれて、麻帆良に関する情報サイトも教えてくれた。

「……やっぱり、子供が先生っておかしいよね」

どうも長谷川さんはそう思ってる1人らしく、僕と話してる時もそんな感じが見て取れた。
でも、他の人はそんな事考えてもいない（アスナさんは何だか違和感を感じてるみたいで、「何で子供が先生なの？」って聞かれたけど）。
……あ、アスナさんで思い出した。魔法バレちゃってたんだっけ……。

（でも、黙っててくれるって約束してくれてよかった）

あの襲撃の後、僕が目を覚ましたのは神崎先生の家でだった。
アスナさん達の話によると、たまたま外に出てた神崎先生が僕たちを見つけて、家まで運んで手当てしてくれたらしい。
その日は神崎先生の家に泊まって、そこから直接学校に行って……
…帰り道にアスナさんからいろいろ聞かれた。

『ねえ、魔法がバレた時とかに記憶を消したりってする？』

『そうですね……普通は説得するんですが、それでもダメだった時の最終手段です』

……そう言えばアスナさん、記憶に関する魔法の事について詳しく聞いてきたけど……どうしたんだろう。
僕も答えられる限りの事は答えた。記憶を封印する魔法の事とか、その効力を強める薬があるらしいって事とか、封印を解除する魔法があるって事とか。
その上で納得してもらって、魔法の事は口外しないっていう約束をしてもらえたからよかったけど。

「……記憶力を向上させたかったのかな？」

口にしたら殴られそうだったから、その時は何も言わなかったけど。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

「……なんか疲れてるみたいだけど、大丈夫？」

「な、何とか」

今にも倒れそうな一夏君を前に、ボクもちょっと心配になる。
だって、顔色凄く悪いし。今にも倒れそうだし。

「……箒がもうしつこくてしつこくて」

それはご愁傷様。
まぁ、向こうが納得してくれるまで根気よく説得を続けるか、諦めて力になってもらうか無いんじゃないの？

「まぁ、あの子もそこまでスパルタじゃないから（多分）大丈夫だよ」

「た、助かります……」

一夏君の修行については、楯無に主導権があり、ボクは修行場を提供したり訓練メニューに口出ししたりする程度。
今回のメニューだって、ほとんどあの子が仕上げたものだからね。

「ま、とりあえず入ろうか」

自宅に戻り、物置代わりに使っている部屋に入る。
基本的に瑪瑙が蒐集した骨董品が並んでいる。いつどうやって集めたのかまでは知らないけど、何だか国宝級の品がありそうで怖い。
そしてその中央に位置しているのが、ダイオラマ魔法球。まだ魔法世界にいた頃、退職金代わりにもらって来たものの1つだ。
ダイオラマ魔法球に触れると、景色が一変し、燦々と太陽が照りつける空の下にボク達はいた。

「……なんですか、これ」

いや、ボクに言われても。
さっきも言った通り、訓練メニューは基本的に楯無1人で仕上げている。
最近はあまり口出したりしてないから、どんな感じにしてるか知らないし。
今現在、ボク達の目の前に広がっているのは丸っきり夏の海。しかも「海の家」まで用意されてる辺り、細部まで作り込んでるなぁ……。

「あ、来た来た」

「おりむー、いらっしゃ～い」

そう言って近寄って来る影が２つ。
髪の色と同じ青いビキニに身を包み、抜群のプロポーションを際立たせている楯無に、どこかで見たような黄色い電気ネズミっぽい着ぐるみの本音。何でこんな場所でも着ぐるみなんだろう、という話は置いといて……。

「で、これは何？」

「うん。そろそろ応用編に入ろうかな～と思って、用意しちゃいました！」

ばばーん！
……いや、用意しちゃいましたって、この魔法球一応ボクのなんだけど。

「水辺や海のような場所だと、普通のそれと筋肉の使い方が違うわけなの。力任せに泳いでもあまり先に進めたりしないでしょ？」

「あ～……」

思い当たるところがあるのか、一夏君も納得の声を上げる。
下手をすると、水で足を取られたりして命取りになりかねない。

「だから、今日から水中での訓練を展開していきます。とりあえず、最初は水泳ね」

「……一応聞いておきますけど、どれくらい？」

「最初だから１ｋｍぐらいにしておきましょうか？」

容赦なく放たれた言葉に、がっくりとなる一夏君。
ちなみに１ｋｍというのは１０００ｍで、２５ｍプールを１往復で５０ｍであるため、２０往復相当に匹敵する距離でもある。

「そう言えば、簪は？」

「簪ちゃん？　あの子なら、部活の先輩の送別会とかで忙しいから今日は来ないって」

「へ～……」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｉｃｈｉｋａ〕

「おりむー、生きてる～？」

「……何とか」

ぜーはーぜーはー……。
砂浜に仰向けで転がったままの俺を、のほほんさんが覗き込んでくる。
水泳なんて久しぶりだし、おまけにいきなり１０００だから……
本気で死ぬかと思った。２５ｍのプールを２０回往復したのと同じ距離だぞ？

「……なぁ、のほほんさん」

「な～に？」

「その格好、暑くないか？」

「……実はちょっと暑いかも」

……うん、汗だくだからすぐ分かった。

「しっかし……」

ちら、と俺が視線を別方向へと向ける。
そこには指導そっちのけで神崎先生に迫る楯無さんの姿があった。
……あ、吹っ飛ばされた。きっと、神崎先生が無神経な事言ったんだろうな。楯無さん涙目だし。
……あ、すごい。海面を水切りしてる……。

「……神崎先生って、鈍いよな」

あの人、普通に男子生徒にもいつも通りに絡んでるけど、神崎先生に接する時だけは何て言うか……そう、初心っぽい。
ただ、神崎先生はそれに全く気がついていない。それこそ、どこの恋愛物の主人公だってくらいに。

「……おりむーがそれを言う資格無いと思うな～」

「え？」

「ううん、何でも～」

「？？？？？？？？」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｔｈｅｒ〕

「……遅くなっちゃった」

夜道を歩く青い髪の女生徒が1人。
彼女の名は更識簪。麻帆良学園本校2年（もうすぐ3年だが）の生徒だ。
本当なら織斑一夏の修行にも彼女が付いているのだが、今回は所属する部活……『現代視覚文化研究会』の高等部3年生の送別会が行われたため、送別会の方に出ていたのだ。
あまり人付き合いがいい方では無いが、「折角だから行って来たら」と姉に言われたため参加。
既に時刻は8時を過ぎており、2次会には参加せずに帰路に就いたのだが……。

「……」

ふと、彼女は足を止めた。
周囲を見渡すと、そこには早咲きの桜。
『桜通りの吸血鬼』
麻帆良学園都市の七不思議の一つであり、その名の通り桜並木の通りに吸血鬼が現れるというもの。

（……何か、いる？）

簪もまた、更識家の人間である。
実力は天才と謳われる姉には及ばないが、それでも高い技量を持っている。中でも感知能力には玖楼でさえ一目置いている。
そして、彼女の鋭敏な感覚は自分の近くにいる何かの気配を感じ取っていた。

「……」

そっと、視線を上へと向ける。
そこには黒いマントに身を包んだ、金髪の少女の姿があった。
気の弱い者が見ればパニックに陥っていたかもしれないが、そこは色々と姉の起こす騒動で心の鍛えられたために、その程度では驚きもしない。

「お前の血、分けてもらうぞ」

マントを広げ、簪に向かって飛来する少女。
しかし、簪はそれを避ける事なく、逆に少女の腕を掴んで後ろに向かって投げ飛ばす。

「へ？」

まさか、自分が獲物と目星を付けた相手に投げられるとは思ってもいなかったらしく、少女は間抜けな声を出す。
そしてワンテンポ遅れて、桜の木の幹に背中から叩き付けられた。

「へぶぅっ！？」

少女の体格が小柄であったため、そこまでダメージは大きくない……はずだ。
ぴくぴくと悶える少女に、簪の心がちくりと痛んだが、いきなり襲いかかってきたのでそれは自業自得だと自分に言い聞かせる。

（……とりあえず、ほっといても大丈夫……かな）

向こうも魔法使いっぽいので、放置されても死にはしないだろう。
そう結論づけ、簪は未だ悶えている少女を無視し、帰路へと付いた。

第１５話：剣道少女と吸血鬼（前書き）

というわけで、ようやく原作３巻突入です。

第１５話：剣道少女と吸血鬼

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｒｉｓｈｕ〕

ついに新学期を迎えた。
エヴァも俺のアドバイスに従い、他の魔法関係者にはバレないよう吸血を行っている。
『桜並木の吸血鬼』の噂も再び広まり始めている。……ぐふふ、順調だ。

「さて、と」

今、俺の「白眼」によって見通されている先には、３－Ｆの教室がある。
ＩＳキャラの５人娘が揃って在籍しているクラスでもあり、俺を投げ飛ばした神崎のヤローが担任をしているクラスでもある。
あれから調べて見たが、基本的に５人とも原作と同じ設定のようだ。

（まず、篠ノ之箒）

剣道の全国大会の常連者であり、１年前に麻帆良に来たばかりだが、何でも元々麻帆良に住んでいたらしい。
で、本校３年の織斑一夏のファースト幼なじみ。さらにあの“天災”篠ノ之束を姉に持つ……と。木刀片手に織斑一夏を追い回してい

るところからするに、原作と同じく短絡的かつ直情傾向と見て間違いない。

（次にセシリア・オルコット）

神崎に指名され、迷いつつも古文の日本語訳を黒板に記述している。イギリスからの留学生で、名門貴族の出自。ただ原作とは違い、両親はまだ生きている。
麻帆良に来たのは2年前。で、織斑一夏に積極的な行動を起こしている……と。

（さらに酢豚だな）

ちゅうご……じゃなくて、鳳鈴音。
4年前には麻帆良にいたらしく、おそらくは「セカンド幼なじみ」。両親は中華料理店を経営していて、やはり織斑一夏とも懇意にしているらしい。

（シャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィッヒもか）

シャルロット・デュノアはフランス出身の女生徒。
デュノア社についても調べてみたが、かなりの大企業だ。原作と同じく愛人の子供である可能性は高いし、そこを突くのが1番かもしれない。

そして、ラウラ・ボーデヴィッヒはドイツ軍人。
経緯は不明だが織斑千冬を「教官」と慕っており、名前までは分からなかったが、やはり特務部隊の隊長職を務めているという。

「やっぱり、織斑一夏もいるって事か」

1番のネックはやっぱそこだな。
本校に在学している織斑一夏。成績こそ普通だが、顔だけはいいのでそこそこモテる。
……出来るだけ早めに消しておくべきか？　いや、今は薬味に集中すべきか。

「ぐふふふふ……さぁ、手始めにエヴァのフラグを建てるぞ」

ぐふふふふふ……がふっ。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

「……よし」

「先生？　いったい何を」

「いや、ちょっと覗き魔を狙撃しただけだから」

ま、狙撃と言っても撃ったのはチョークだし、殺してないから。せいぜい気絶して、意識が戻ってもくらくらするくらいじゃないかな。

「さて、今日の授業はここまでだけど、学校の方から連絡事項があります」

クラスがざわめくけど、ボクはそれを無視して続ける。

「最近、桜通りで「吸血鬼」が出るとか言う噂があるけど、吸血鬼

を装った変質者である可能性があります。だから夜1人で桜通りには近づかないように」

「本当に吸血鬼じゃないんですか？」

「うーん……噂自体は昔からあったんだけどね。でも吸血鬼が現実にいるって言うより、変質者の方があり得そうでしょ？」

そう答えると「確かにね」「嫌だなあ」という声が上がる。
しかし、篠ノ之さんの視線だけは厳しい。
うーん……やっぱり例の件を納得していないし、この噂についても真偽を疑ってるみたいだね。

（……変な真似しなければいいけど）

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

春休み中、教育委員会立ち会いの下、僕の正教員採用試験が行われた。
試験内容は主に筆記試験。それから模擬授業を行ったり、後は普段の授業の様子を映像で見てもらったぐらい。
……どうも学園長先生、僕の事を全く教育委員会に報告していなかったらしく、最初に来た時は相当驚いていたのが印象的だった。
そして今日、僕は３－Ａの正式な教員として教壇に立っている。

「３年！」

「Ａ組！」

「「「「ネギ先生――――――――――――――――――――っ！！！」」」」

あはは……まぁ、元気なのはいいですけどね。

「では改めて……１年間、皆さんの担任をする事になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから来年の３月までの１年間、よろしくお願いします」

そう言い、教室全体を見渡す。
……よくよく考えてみると、あまり話した事の無い人達がいるな。
これから仲良くしていけたらいいけど。

（……え？）

今一瞬、鋭い視線を感じた。
そっとその方向へと目だけを向けると、そこには頬杖を突いた金髪の女の子が。
確かあの子は……出席番号２６番、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルさん……だったっけ？
タカミチさんからもらった出席簿には「困った時に相談しなさい」ってあったけど……どう見ても好意的な表情を浮かべていない。

（あれ、そう言えばエヴァンジェリンって……）

どこかで聞いた事のあるような……無いような……。

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。３－Ａのみんなも早く準備してくださいね」

「あ、そうでしたね」

しずな先生にそう言われ、すぐに教室から出る。

「じゃあ、皆さん身体測定の準備をしてください。僕は外に出てますので」

「え～、いてもいいけど？」

「いえ、お断りします」

いや、さすがにここに残ってたらダメでしょ。
年齢的に大丈夫かもしれないけど、僕これでも英国紳士だから。
……そう言えば、さっきエヴァンジェリンさんの側を通った時、何だか湿布臭かったけど……気のせいかな？

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｒｉｎ〕

箒の機嫌がいつに増して悪い。
それも一夏の話題が出ると、さらに悪くなる。……うん、何かあったわね。

「で、何があったわけ？」

「いきなり人を襲撃しといてそれかよ」

あたし達の前には今、簀巻きにされた一夏が転がっている。
まぁ、事情話して付いてきてもらうのもめんどかったから、セシリアと2人で襲撃して無理矢理連れてきたわけだけど。

「そうは言ってもね、箒今すっごく機嫌悪いのよ。下手したら他の誰かに八つ当たりしかねない」

「それは……マズイな」

もう分かってるかもしれないけど、箒はかなり直情型。口よりも手が出ちゃうってタイプね。

だから、ああいう時に何をしでかすかが分からない。下手をしたら憂さ晴らしでナンパしてきた相手を叩きのめす可能性も無いとは言えない。実際に昔、剣道の試合でそれに近い事があったらしいから。

「一夏さんにも事情があるのは分かりますが、箒さんへの対応が少し雑だったのでは？」

「確かにそれは否定出来ない。でもアイツ、俺の話聞いてくれねぇし」

「「あ～……」」

思わずセシリアと顔を見合わせ、唸る。

そう。言い忘れてたけど、箒はかなりの頑固者。一途と言うか一直線と言うか……とにかく1度決めた事を曲げる事なく、やり遂げようとする。

多分今回も「一夏の力になりたい」って考えてて、それでがむしゃらに突っ走ってる……ってとこ？

「す、鋭いなお前」

汗を浮かべつつ、あたしにそう答える一夏。

いや、それくらいアンタ達を知ってる奴だったら簡単に想像出来るから。

「ですが、気をつけた方がいいですわよ？　ただでさえあんな噂が立っていますし」

「あんな噂……ああ、吸血鬼騒ぎの事？」

さっき神崎先生も言ってたけど、単なる変質者じゃないの？

「だとしても、箒さんが動かないとは限りませんわ」

「……つまり、箒が自分の力を証明するために吸血鬼事件を解決しようとすると？」

「可能性の話ですわ」

いやいや、さすがに箒でもさすがにそんな事は……。

「「……」」

……どうしよう、あり得る。

つまり、一夏の事情に力を貸せなかったのは「自分の力」を一夏が分かってないから。だからそれを証明するために吸血鬼を捕まえようとする。

凄くリアルな想像に、あたしと一夏は苦い顔になり、その仮説を組み立てたセシリア自身も「どうしましょう」という困惑した顔になっている。

「……とりあえず一夏、箒ときちんと話しなさい。このままだとあのバカ、自滅しかねないから」

「お、おう」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｈｏｕｋｉ〕

「……ここだな」

夜。私は木刀片手に桜通りへ来ていた。
噂によると、ここに吸血鬼が出没するという。
……神崎先生は噂がデマである事を説明した上でここへ近づかないように言っていたが、恐らく吸血鬼の噂は真実だ。
魔法やそれに準ずるものが存在している以上、吸血鬼がいてもおかしくない。

（吸血鬼を仕留めれば、一夏も私を見直してくれるはず）

緊張で心臓が高鳴るのを、必死に抑え込もうとする。
吸血鬼に襲われた生徒がいるのも事実。ならば、吸血鬼を退治する事に何も問題は無い。

「……来たか！」

木陰に隠れ、隙を見計らう。
こつこつと近づいてくる足音に、思わず息を呑み、木刀を握る力が強まる。
……しかし、

「か、風強いですねー。ちょっと急ごうかなー」

……違う、吸血鬼じゃない。
そっと覗くと、そこにいたのはうちの生徒。確か……A組の宮崎だ

ったか？
大方帰りが遅くなって、近道であるこの通りを使っているだけだろう。

「え……？」

と、宮崎の声が小さく途切れる。
私も視線を上げると、街灯の上に黒い影が見受けられた。
魔女の被るような三角帽子に黒いマント。体格こそ小柄だが、その風貌は間違いなくこの前の輩と同類だと分かった。

「27番、宮崎のどかか……悪いけど、少しだけ血を分けてもらうよ」

そう言い、吸血鬼は宮崎に向かって襲いかかる。
だが、そうはさせない。
宮崎と吸血鬼の間に割り込み、木刀を振るい、吸血鬼を吹き飛ばす。

「う、うーん……」

突然の事に動転したのか、宮崎は意識を失い、その場に崩れ落ちる。
だが、無関係の人間に見られるよりは都合がいい。

「ほう……確か貴様、Ｆ組の篠ノ之だったか？」

「！！」

帽子の影から覗くその顔には見覚えがあった。
ボーデヴィッヒと同じ茶道部の生徒。Ａ組のエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。
……まさか、マクダウェルが吸血鬼の正体だというのか？

「ふん、姉妹揃って私をおちょくるのが好きらしいな」

「！　あの人は関係無い！！」

激昂しつつも、心の中ではこう納得していた。
……ああ、マクダウェルもあの人の被害者なんだな、と。

「まぁいい。宮崎のどかよりも貴様の血の方が好みだ」

「くっ……来い！」

木刀を構え、マクダウェル目がけて振りかざす。
しかしそれは躱され、逆に私に向かって何かを投擲する。あれは……
……試験管？

「“氷結・武装解除”！」

試験管の中の薬が混ざり合ったその瞬間、試験管が爆ぜ、私の握っていた木刀が一瞬にして凍結し、砕け散った。
木刀だけじゃない。衣服も凍り付き、パラパラと崩れていく。思わず、露わになった胸を腕で隠し、その場に崩れ落ちる。

「これで武器は無くなったな」

じりじりと近づいてくるマクダウェル。
怖い。あの時感じたのと同じ、恐怖が身体中を駆け巡る。
下がろうとするけど、腰が抜けたのかうまく立ち上がれない。

（一夏――――――）

マクダウェルの手が私に向けられ、私は思わず目を閉じる。

「そこで何やってるんですか！！」

その声が響き渡ると、マクダウェルが小さく舌打ちし、その場から飛び退く。
今、私の横を通り抜けていったのは……A組のネギ先生？

「……で、何やってるのかな？　君は」

その声に、視線を向けると……冷ややかな目をした神崎先生がそこにいた。

第１５話：剣道少女と吸血鬼（後書き）

１７日から帰省するので、もしかしたら２日ほど更新出来ないかもしれません。
まぁ、パソコン持っていくかどうかは考え中ですけども。

第１６話：変わりゆく日々

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

「この私を追い詰めるか……中々やるじゃないか、ネギ・スプリングフィールド」

学生寮の屋上、僕たちはそこにいた。
僕の目の前には黒装束のエヴァンジェリンさん。あの後、どうにも気になって調べて見たら、とんでもない事が分かった。

「“闇の福音”に褒めていただけて、光栄です」

「……ほう、知っていたのか？」

「さっき調べました」

“闇の福音”エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。
１５年前に賞金首から抹消されているけど、それまでは６００万ドルもの賞金がかけられていた悪の魔法使い。
数百年を生きる、間違いなく“本物”の大魔法使い。

「しかし、何でその大魔法使いがこんな場所で学校に通ってるんですか？」

何気なくそう尋ねてみると、エヴァンジェリンさんの顔がすごい事になっていた。
何て言うか……触れてはいけないところに触れてしまったような、そんな顔だった。

「……たんだよ」

「え？」

「貴様の父、サウザンドマスターに呪いをかけられて！　１５年間ずっと！　この学園のノーテンキな小娘共と学校に通わされているんだよ！！」

「ご、ごめんなさいっ！！」

すごい剣幕でそう怒鳴られ、思わず謝ってしまう。

「おまけにあのバカは、３年で解きに来るとか言っていたくせに！！　１５年間ほったらかしで、おまけに１０年前にくたばっただと！？　ふざけるな！！」

……その、本当にごめんなさい。
空に向かって吠えるエヴァンジェリンさんに、そう謝るしか出来なかった。

「はぁはぁ……まぁいい。奴の血縁である貴様の血……それを手に入れる事で、私はこの呪縛から解き放たれる」

「ッ！！」

エヴァンジェリンさんの言葉に、思わず身構える。
じゃあ、これまでの吸血鬼騒ぎの本当の目的は僕……？
まき絵さんを襲ったのも、僕をおびき出すための罠？

「そうだ。さすがに封印状態でお前と戦うのは難しいと判断してな。お前がここへ来ると聞いた日から、こつこつとな」

だから、さっきの武装解除魔法も、これまでの魔法も全部、魔法薬を触媒に使った威力の弱いものだったんだ。
あの人に呪いをかけられて、力を弱められているから、魔法がほとんど使えない。なら……。

「今のあなたになら、まだ勝ち目はありますよね」

構えを取り、いつでも呪文詠唱が出来るようにする。
今の言葉が全て本当なら、今のエヴァンジェリンさんになら勝てる。
魔法薬も品切れだろうし、攻撃方法もそこまで……いや、まだ分からない。

相手は数百年を生きる吸血鬼。僕の知らない何かを持っている可能性も充分にある。例えば……誰か仲間がいたり、とか。

「随分と、周囲を警戒しているな」

「……」

「その判断は正解だ。……やれ、茶々丸」

その瞬間、僕の背後に誰かが降り立った。
すぐに応戦しようと振り向くが、組み伏せられそのまま首を絞められる。
何とか息は出来るけど……まったく動けないし、声も出ないから詠唱が出来ない……！

「そうだ、紹介しておこう。……出席番号１０番、絡繰茶々丸。私のパートナーだ」

その言葉に視線で後ろを見ると、僕を羽交い締めにしている人物の顔が見えた。
緑色の髪に、機械的な身体をしている生徒……確かに絡繰茶々丸さんだ。

「さて、悪いが血を吸わせてもらうぞ」

「ぐっ……」

必死に藻掻くけど、茶々丸さんの力が強くて全くふりほどけない。
そうする内に、エヴァンジェリンさんの牙が僕の首筋に……。

「コラ――――――――――――――――――――！！！」

「ん？」

噛みつく寸前、そんな声が聞こえた。

「うちの居候に何やってんのよッ！！！」

「はぶぅっ！？」

すごい衝撃と同時に、僕たちは吹っ飛ばされた。
意識が飛ぶ寸前に見えたのは、デフォルメされたクマのパンツ。……
……あ、これアスナさんだ。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈｉｆｕｙｕ〕

パンッ！！

乾いた音が室内に響く。
頬を叩かれたのは箒。そして叩いたのは……神崎先生。

「なんで叩かれたか、分かるね？」

「……」

「言ったはずだよ。桜通りには近づくなって」

呼び出された時は驚いたが、詳細を聞いて呆れた。
箒が吸血鬼退治に乗り出し、返り討ちにあったと。

……まぁ、返り討ちと言っても武装解除呪文を受けて脱がされた程度なので、怪我など無いに等しいが。

「この前の事忘れたの？　一夏君がいなかったら君は殺されてた。あんな思いをして、その上で今回みたいな事をしたの？　それとも、また一夏君がヒーローみたいに助けに来てくれる事を期待してたの？」

「ち、違います！」

「なら、どうしてあんな無謀な事をしたのかな？」

神崎先生の厳しい指摘に、箒は俯く。
確かに今回の行動は褒められたものじゃない。相手が相手なだけに、ネギ少年が駆けつけなければ血を吸われていたかもしれん。
だが、そもそもの原因は一夏にある。このバカのアフターケアが杜撰だったため、箒が今回のような無謀な行動に出る事になった（なお、一夏には既に制裁を加えてある）。

「もしも次にバカな事したら、記憶を消す事も吝かじゃないよ」

もちろん、これは脅しだ。
神崎先生もそのつもりは無いが、このくらい言わなければ箒も大人しくならないだろう。

「神崎先生、後は」

「……分かった」

私がそう言うとため息を吐き、一夏にそっと目配せする。
後は当人達の問題だ。きっちり双方が納得するまで話し合えばいい。
神崎先生に次いで部屋を後にし、神崎先生が深くため息を吐いた。

「ごめん、完全にボクのミスだ。もっときっちり注意を回しておけばよかった」

「いえ、神崎先生だけの責任ではありません」

一夏にも箒にも、当然私にも平等に責任はある。
しかし……吸血鬼の噂が本当だったとは。

「うん。ボクも調べてはいたんだけどね、如何せん学園側に気取られるわけにはいかないから」

「……“闇の福音”ですか」

裏の世界において、その名は有名だ。
吸血鬼の真祖、極悪非道の大魔法使い、様々な呼び名を持つ最強の魔法使いであり、６００万ドルの賞金首だった存在。
そんな奴が何故、こんな極東の国で女学生なんてしているのか分か

らんが……。

「碌でもない理由がありそうで、あまり探りたくないけど」

「……ええ」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｈｏｕｋｉ〕

しばらくの間、部屋には沈黙が続いた。

一夏を前に、何を言えばいいか分からなかった。

私は……ただ、一夏に知って欲しかった。力があると、お前を守

るだけの力はあるのだと。だから、頼って欲しかった。

「……すまなかった」

私が切り出そうとした瞬間、一夏が私に向けて頭を下げ、そう謝罪してきた。

「い、一夏？」

「もっと真剣に、お前と話し合ってれば……お前がこんな危険な目に遭わなくて済んだかもしれない。すまなかった」

そう言って、また頭を下げてくる一夏。
やめてくれ……私は、私は……。

「謝るのは……私の方だ」

どうにか、その言葉を喉の奥から搾り出す。
一夏の思いを理解せず……しようともせず、ただ自分の事だけを考えて無謀な事をしてしまった。
それが、一夏や千冬さん達をどれだけ心配させるのか知らずに。

「すまない、一夏……！」

ただ、泣いた。
自分の情けなさとバカさ加減に自己嫌悪しながら、ただ泣いた。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

……どうやら、話は纏まったみたいだね。
中の様子を少し窺って、ふっと表情を崩す。

「あの子がどんな選択を選ぶにしろ、これで大丈夫でしょ」

「……はい」

千冬も思わず表情を崩す。
思えば、この子も相当な苦労性だからね。1年前まで、一夏君を1人だけで守り続けて来たんだから。

「玖楼、今終わったようじゃ」

と、エプロン姿の瑪瑙がこちらへと寄ってきた。
この子達が来るまで台所にいたけど、色々と忙しくなりそうだったので“あっち”の監視の方をお願いしていた。
彼女の言う「終わった」というのは、エヴァンジェリンとネギ君の一件の事だろう。

「それで、どうなった？」

弱体化している彼女に、ネギ君が後れを取るとは思えないけど……
…万が一、という事もある。
実際、ボクが近くに来てた近衛さんに宮崎さん任せて、篠ノ之さん連れて帰る前、神楽坂さんがネギ君追いかけて行ったし。

「凄いぞ。小娘の障壁無視して蹴り飛ばしおった」

愉快そうにくつくつと笑う瑪瑙とは裏腹に、千冬は唖然となった。真祖の障壁を無視して蹴り飛ばした。それが意味しているのは、唯1つの真実。すなわち……

「間違いない。あの娘、完全魔法無効化能力者じゃ」

瑪瑙の口から、千冬にとって死刑宣告にも等しい言葉が放たれた。その言葉を聞き、その場に崩れ落ちた。

「大丈夫か？」

「……束から聞いていましたから、大丈夫です」

千冬……いや、織斑家にとって“黄昏の姫御子”は大きな意味を持っている。

千冬と一夏君が持つ固有技能「零落白夜」。あらゆる魔力を討ち払う白い力は、本来持つはずだった『ある特殊能力』が変質したものだ。

「しかし、どうする？　あの娘も自分の能力に気づいたようじゃぞ？」

「……厄介だね」

ネギ君も不思議に思うだろうから、間違いなく気づくはず。
魔法障壁を無効化する能力なのだから、いずれは「魔法無効化能力（マジックキャンセル）」にたどり着いてもおかしくない。
そうすれば、自分の記憶が改竄されている事に気づくだろうし、立ち位置にも不安を覚える事になる。
……下手に放置すれば、疑心暗鬼に囚われ、あの子の心が壊れる。

（最悪、全部話す事も考えておくべきかもね）

第17話：明日菜とアスナ

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

「なんじゃ、それは」

一緒に暮らし始めてから1年。九郎が床下から取り出したのは小さなツボ。
中に入っていたのは何かの薬のようじゃが……。

「蓬莱の薬だよ」

「ほう、なるほど……なっ！？」

ほ、蓬莱の薬じゃと！？
蓬莱とは仙人が住むとされている伝説の地。そして蓬莱の薬とは、飲んだ者を不老不死にする妙薬と言われておる。
何故そんなものをそなたが持っておるんじゃ。

「昔、お母さんがお母さんのお師匠様から預かったものなんだって」

し、信じられんのう……。
いったい何者なんじゃ、そなたの母君の師というのは。

「知らない。ボクが生まれる前の話だし、お母さんもそのお師匠様から『絶対誰にも使わせるな』って言いつけられてたみたいだから」

「なら、何故そんなもの預かったんじゃ」

そうは言ってみたが、その理由はだいたい想像が付く。
人間誰しも「死なない」身体には憧れる。妾達のような存在とは違い、人間は数十年ちょっとしか生きられぬ。中でも権力者という輩は特にその傾向が強い。
恐らく、その師匠とやらはただ捨てるのは危険だと判断し（自然に還したとしても、環境その物が影響を受ける危険がある）、薬を管理する信頼出来る人間を求めた。それが九郎の母君だったのじゃろう。

「ボクはさ、これ使ってもいいな〜って思ってる」

「え？」

「だって、不老不死になったら瑪瑙とずっと一緒にいられるじゃない」

無垢な笑顔を向けてくる九郎。
妾と九郎にもいずれ別れは来る。妾は妖で九郎は人間。寿命の違いによって九郎はこの世を去る事となる。

「……九郎」

そう言い、強く抱きしめた。
妾とて、九郎と別れたくなどない
しかし、「死なない」のではなく「死ねない」事がどれだけの苦痛なのか。
妾もそれに近い存在であるために、その思いは分かる。

（願わくば、この子がそんな苦痛を背負う事が無いように……）

しかし、妾の想いは脆くも崩れ落ちる事となる。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ａｓｕｎａ〕

「アスナさん、さっきどうやってエヴァンジェリンさんの障壁を突破したんですか？」

寮に戻る途中、意識を取り戻したネギからそんな質問をされた。
えっと……そもそも障壁って何？　魔法の事については教えてもらったけど、どーゆーものかって説明とかされてないから分かんないんだけど。

「あ、すみません。障壁って言うのは、魔法使いが常に展開している楯のようなもので、敵の攻撃から身を守るためのものです」

「えっと、それをどうやって突破したか？」

「はい。いくらエヴァンジェリンさんが弱体化していると言っても、普通の人に蹴破れるものではありませんし、気になったんです」

うーん……そんな事言われても、全く思い当たる部分が無い。
確かにそりゃあ、脚力には自信がある。クラスでも１，２だし。
でも、魔法関係の事なんてそんな……。

「……」

「どうかしましたか？」

「……ねぇ、ネギ。魔法を無効化したり、無視したりする能力ってある？」

すごく、嫌な予感がした。
パズルのピースがパチッと、音を立ててはまったような……そんな風に嫌な予感がした。

「ありますよ。魔法無効化（マジックキャンセル）と言って、その名の通り魔法を無効化する能力です。……ただ、凄く珍しい能力で、確認されている能力保有者は世界的にも数人しかいないって言われてます」

「……」

「アスナさん？」

記憶のない私。魔法使いの高畑先生。魔法を無効化した私。そしてレアな魔法無効化能力。
バラバラだったパズルのピースがどんどん空白に埋め込まれていく。
その度に、嫌な予感が強まっていく。

「アスナさん、しっかりしてください！！」

ネギの声が聞こえる。けど、何も分からない。
ただ苦しくて、息が出来なくて、分からなくて……。

『……ごめんね、アスナちゃん』

私の脳裏に、まだ髭を生やす前のタカミチの顔が浮かんだ。
タカミチ？　そうだ私、高畑先生の事昔はタカミチって呼んで……
…。

「――――落ち着いて、呼吸するのじゃ」

ゆったりとした優しい声が聞こえた。
口元にはいつの間にか紙袋が当てられていて、ほんの少しだけど息
苦しさが消えた気がする。

「ゆっくりじゃ。ゆっくり息を吐いて、吸い込め」

言われた通り、紙袋の中で呼吸する度に息苦しさが消えていく。
少しの間、それを繰り返し、どうにか落ち着きを取り戻す。

「様子を見に来て正解じゃった。……玖楼の懸念が的中したの」

「瑪瑙、さん？」

「うむ」

ゆったりと伸ばした黒髪に、切れ長の目。
同性の私でも見とれてしまうほどの美人。この前相談にも乗ってくれた、神崎先生の奥さん……瑪瑙さん。

「瑪瑙さん、あの」

「……ここであの子に聞かせるワケにはいかんじゃろう？」

小声で、そう語りかける瑪瑙さん。
……確かに、エヴァちゃんの事で色々考えてるみたいだし、あまり余計な心配とか不安はかけたくない。

「ネギ、ごめん。ちょっと先に戻ってもらってもいい？」

「別にいいですけど……どうしたんですか、いったい」

「えっと、その」

「さっきの様な発作を起こす危険があるからの。念のために医者のところへ連れて行く。先に戻って同居人のその旨を伝えてくれんか？」

うわ、すごい嘘八百。
でもネギはそれを信じたらしく、「わかりました」と頷き、戻っていった。

「ある意味、嘘では無いぞ。玖楼は元々薬師じゃ。さっきの様な発作にも効く薬を処方してくれる」

「え、そうなんですか？」

「玖楼も、伊達に１０００年は生きておらん」

せ、１０００年！？　神崎先生、そんなに生きて……そうじゃなく、そもそも人間なんですか！？

「人間じゃ。まぁ、上に『元』が付くがの」

にやりと笑って、瑪瑙さんがそう答えた。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

部屋に戻り、木乃香さんには「アスナさんはちょっと遅くなります」と伝えた。
瑪瑙さんが言った通りに話すと、さすがに心配するだろうから。
そして、お風呂に行くと言って部屋を出ると、携帯電話である相手に電話をかけ始めた。

『もしもし……』

えっと向こうの時差は……うん、大丈夫。

「もしもし、ネギです」

『……ネ、ネギか！　ひ、久しいな。息災であるか？』

あ、あはは……まぁ、この人はいつもこうだから。

『日本へ行ったと聞くが、風邪など引いておらんか？　そっちはイギリスと比べて気候の変化が激しいそうじゃし……そうじゃ、食べ慣れぬ物を口にして体調を崩したりなどは』

「だ、大丈夫です。それよりちょっと聞きたい事があって」

『む、何じゃ？』

えっとですね、“闇の福音”エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさんについて、何か知りませんか？
何でも、父さんが昔呪いをかけて、麻帆良学園に括ったそうなんですけど。

『闇の福音……おお、そう言えばそんなのがいたと言っておったな』

「詳しく聞かせてもらってもいいですか？」

『とは言っても、私もナギから酒の席での話で聞いたぐらいじゃ。何でもしつこく追い回されて、改心する様子が無かったから呪いをかけた、と』

要するに、エヴァンジェリンさんがストーカーだった……と。

……うわぁ。

「でも本人は『3年経ったら解きに来る』って言ってたんですけど」

『忘れておったんじゃろ。あれはそーゆー男じゃ』

「……ですよねー」

『それにしてもどうしたんじゃ？　急にそんな事で電話をかけたりして』

あ、えっとですね……実は、かくかくしかじか。
経緯を話し終えると、電話の向こうから凄い威圧感が放たれているような気がした。

『……小娘が』

「お、落ち着いてください！　僕は大丈夫ですから！」

『す、すまぬ。取り乱した。……そうじゃ、今思い出したんじゃが』

それからその人が語ったのは、父さんがエヴァンジェリンさんに勝った時の情報。
……いや、そんなアホらしい方法をする人もする人だけど、引っかかる人も引っかかる人だよね。

「色々とありがとうございます。参考になりました」
『うむ。では身体に気をつけるのじゃぞ？』
「はい。ではまた夏に……母さん」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

現在、妾と向かい合う形で神楽坂明日菜が座っておる。
さすがに個人的な話じゃし、玖楼はともかく、他の者も席を外して

おる。

「……ネギがエヴァちゃんに襲われて、その時障壁ってのを無視したみたいで、それで分かったんです。そーゆーのを無視したりする力があるって」

「……」

「ネギにも聞いたら、凄く珍しい能力だって……それで怖くなって」

震えるアスナの手を、妾はそっと包み込む。

「私が誰で、どこで生まれて、何でこんな力を持ってるのか……まったく分からなくて、思い出せなくて……！」

今にも泣き出しそうな顔で、そう吐き出すアスナ。
記憶の欠落。それから始まった恐怖は、完全にこの子を呑み込もうとしている。……玖楼の懸念が的中してしまったか。

「それで、そなたはどうしたい？」

「……記憶を、取り戻したいです」

……そうか、それを選ぶか。

「単刀直入に言う。妾はそなたの過去を知った」

「え……」

「妾から見てもかなり重い記憶じゃ。下手をすれば、今あるそなたは記憶に押し潰されてしまうかもしれん」

“黄昏の姫御子”については、織斑千冬からあらかたの事を聞いておる。
それだけの扱いをされておったのなら、記憶を消したというのも幾分かは納得出来る。
じゃが、本当にそれが正しかったのかどうかは……分からんがな。

「それでも、記憶を取り戻したいか？」

この判断はアスナ自身に委ねなければならん。
記憶を取り戻すか否か。
……辛い二択じゃが、この子が決めねばならん答えなのじゃ……。

「……消えたりなんか、しません」

俯いていた顔が、ゆっくりと上がってくる。
赤く泣きはらしたその目には、決意という名の炎が見えた。

「ここにいる私も、昔の私も、全部私です！　消えたりなんかしません！」

「……よく言った」

妾は立ち上がると、部屋の外で待機している玖楼を呼び出す。
記憶の解放は妾にも出来ん事は無いが、やはり確実性と安定性を追求した上でなら、玖楼の方が数段優れておる。
どうやら、玖楼もアスナがこの決断を下すと分かっていたらしく、既に準備は整えておった。
……そして今、部屋には玖楼の前にアスナ。玖楼の隣には妾。そして織斑姉弟に篠ノ之箒が位置している。

「あの、この人達は……」

「あなたが記憶を取り戻せば、分かります」

冷たく、そう言い放つ織斑千冬。
……無理も無い。彼女としては複雑なのじゃろう。

「じゃあ、始めるよ？」

アスナの額を指で触れ、そっと呟く。

「解印」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

何も無い真っ暗な場所。
気がつくと私は、そこにいた。
ううん、私だけじゃない。オレンジ色の髪をした小さい女の子が、
私の前に立っていた。

「……あなた、誰？」

「私は神楽坂明日菜。あなたは？」

「わたしもアスナ。アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

……ああ、そっか。
そう思うと、私はぎゅっとその子（わたし）を抱きしめた。

「ただいま、わたし（アスナ）」

「……おかえり、私（明日菜）」

◆◇◆◇◆◇

第１８話：変わる日常

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｔｈｅｒ〕

ざわざわざわ……。
いつもとは違い、教室内は何故かざわめきが響いていた。

（ねえ、どうなってんの？）

（どうなってるって言われても……）

（とりあえず、誰か話しかけてみたら？）

そんな風な会話が交わされていても、そのざわめきの原因人物は何処吹く風だった。
とりあえず……と言ったように、一同を代表し、朝倉和美が彼女に話しかける。

「えっと……あ、アスナ？」

「……何？」

和美の呼びかけに応じたアスナは、昨日までの『神楽坂明日菜』とは別人だった。

いや、姿形が急激に変化したわけでは無い。大きく変わったのはその雰囲気だ。
これまでは『お気楽ノーテンキのバカレッド』だった彼女が、『ミステリアスなクールビューティ』の雰囲気を纏って教室に入ってきた時、教室内に激震が走った。
いったい何があった！？

「あの、えっと、何かあった？」

「何かって？」

「それはその……」

具体的に何を言えばいいのか分からず、口籠もる和美。
と、そんなｇｄｇｄになりかけた状況に助け船がやってきた。

「何やってるんですの！　もうすぐＨＲが始まりますわ。すぐ席に着きなさい！」

あやかの声が響き、全員が一目さんに自分の席へと戻る。
が、あやかはすぐには戻らず、アスナを見つめる。

「どうしたの、いいんちょ」

「いったい、何があったんですの。まるで昔の……麻帆良に来た

ばかりのアスナさんに戻ったようですわ」

「……そうかもね」

ふっと、アスナが表情を崩す。
いつもの彼女では考えられないほど、その微笑みにはやすらぎが満ちていた。

「色々、あったのよ」

「色々？」

「うん。色々……ね」

意味深な表情に言葉。
あやかは「何かある」とは分かったが、それ以上聞くべきではないと判断するのだった。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｈｏｕｋｉ〕

さて、結論だけ言おう。
最終的に一夏が折れる形で、私も“あっち側”に関われる事になった。
神崎先生も「まぁ、そこまで決めてるんなら、ボクも何も言わないけどさ」と、認めてくれた。
しかし、その後の言葉が非常に気になった。

『でも、今のままじゃダメだね。普通の人間や下の中くらいならともかく、魔法使い相手には通用しない』

『なら、どうすれば？』

『一夏君共々、シゴいてあげるよ』

それで放課後、神崎先生の家で一夏と同じ訓練のようなものを受けられるようになった。
当初、千冬さんが～という話もあったが……丁重にお断りした。

正直言って身の危険を感じたし……。

（あの時の千冬さんは、目が笑っていなかった）

思えばあの人は、昔から一夏に必要以上に近づく異性に目を光らせていた気がする。
一夏が朴念仁に育ってしまった原因の１つに、千冬さんがあるんじゃないだろうか？　あの人もなんだかんだでブラコ

「……ッ！？」

瞬間、感じ取った殺気に思わず立ち上がってしまう。
授業中にも関わらず立ち上がってしまったので、嫌でもクラス中の注目を集める結果となってしまった。

「……篠ノ之さん？　どうかしましたか？」

「い、いえ……何でもありません」

そう言い、席に座るが……間違いない、今のは千冬さんだ。
あの人、どれだけ地獄耳なんだ……！

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈｉｆｕｙｕ〕

「先輩、いきなりどうかしたんですか？」

「……いや、何でも無い」

今、箒辺りが私の陰口を言った気がしたのだが……まぁいい。
それよりも確認だ。その情報に間違いは無いんだな？

「はい。神楽坂明日菜さんは１０年前、突然麻帆良に現れています。
保護後見人も含め、その他の事は先輩の想像通りとなっていますが」

「……そうか」

分かっていた事だが、改めて頭が痛くなってくる。

「どう考えても、あからさま過ぎるだろう……！」

記憶を消して隠すと言って、それが何で麻帆良なんだ。
いくら独立しているとはいえ、麻帆良はＭＭの下部組織だぞ？　いくら自分の目の届く場所とは言え……。

「せめて関西に隠せばいいものの……」

「それも難しいと思いますよ？　西の様子、相当酷いですし」

後輩の言葉に、思わず耳を疑ってしまう。
私は仕事柄、あまり西の方に足を伸ばさないんだが……そんなに酷いのか？

「ええ、かなり。西の長が「下の人間を抑えこめていない」というのもあるんですが、やっぱり１番の問題は近衛木乃香さんがこっちにいる事にあるようです」

「……麻帆良に来る時も相当揉めたと聞いたが」

「『魔法から遠ざけるため』って理由があるみたいですけど、体のいい人質にしか見えませんからね」

そう言って、はぁとため息を吐く。
魔法に触れさせないという親心は分からなくも無い。私もそれに近い事をしていたからな。だが、それで何故“黄昏の姫御子”と同室にするんだ。
おまけに、彼女の話では見合い話が相当舞い込んでいるし。

「……遠ざける気、ありませんよね」

「ああ」

顔を見合わせ、互いにため息を吐く。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ａｓｕｎａ〕

昔に戻ったみたい。
いいんちょはそう言ったけど、確かにそう。

「……なんだかな」

そう言って、ため息を吐く。
昨日の夜、私は神崎先生の手によって全ての記憶を取り戻した。
私が『神楽坂明日菜』になる前、『アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア』であった頃の記憶。百年近い絶望の記憶。ナギ達に助けられ、彼らと旅した記憶、そして……。

（タカミチに、裏切られた記憶）

……あの日、ナギがいなくなって、ガトーさんとも別れたあの日。
私とタカミチはとにかく逃げた。泣いて……泣いて、泣いて……それでも、逃げた。
そして逃げた先、ガトーさんから言われた通り、タカミチは私の記

憶を消そうとした。
でもそれだけは嫌だと、みんなの事を忘れたくないと、タカミチを必死に説得し、それで記憶を消す事だけはどうにか避ける事が出来た……と思った。
だけど麻帆良に来て、タカミチは有無を言わさずに私の記憶を消した。

『ごめんね、アスナちゃん』

弱々しく笑みを浮かべたタカミチの顔を、今でも覚えている。
そして私は、私じゃなくなった。

「……はぁ」

もう1度ため息を吐く。
それにしても、タカミチは何を考えているんだろう。
記憶を消して平穏な生活に。ガトーさんは確かにそう考えていた。
だからタカミチも記憶を消した。
だけど、何でよりによって木乃香と同じ部屋にするわけ？　おまけにネギも同室に住まわせるなんて……。

（これでネギが年相応に落ち着きの無いガキだったら、本当に目も当てられない状況になってたかも）

私も記憶を取り戻す事なく、ネギと仮契約して従者になったりとか？で、どんどん魔法バレは進んでいって、最終的に魔法世界で“完全なる世界”と大決戦を繰り広げたりとか……まさかね（なお、実際それに近い状況になっていたのを私が知る由も無い）。

「……」

目を閉じると、思い出す。
昨夜、記憶を取り戻したあの時の事。

「……」

ワケが分からない。最初に思ったのはそれ。
膨大な記憶の奔流に押し流され、私は私の中で“わたし”に出会った……ううん、再会した。

「気分はどう？」

神崎先生がそう尋ねてくる。
いきなり過ぎる事だから、何だかよく分からない。でも、これだけは言える。

「……サイアク」

「だろうね」

私の言葉をある程度予想していたらしく、苦笑する先生。
ふと、隣で私を見つめていた女の人が目に入った。黒い髪に黒スーツの、キリッとした美人。
……昔、見た事のある顔。そう、ずっと昔……まだ私がわたしだった頃。

「……チフユ？」

そう呼びかけると、小さく「はい」と答えた。
……ああ、そうか。だから彼女はこんなにも辛い顔をしていたんだ。

「……ごめんね」

私の言葉が意外だったのか、目を見張る千冬。
思えば、私がもっとしっかりしていたら、千冬があんな辛い目に遭うことは無かった。
私の罪……それは、決断しなかった事。

「本当に、ごめんね」

「……はぁ」

「随分と浮かない顔をしているじゃないか、神楽坂明日菜」

振り向くと、そこには茶々丸さんを伴ったエヴァちゃんが不敵な笑みを浮かべて立っていた。
あれ、授業サボってたんじゃなかったの？

「いえ、学園内に何者かが侵入したため、その調査にマスターが駆り出されたのです」

「茶々丸、余計な事を言うな！　……それより貴様、いったい何者だ」

……やっぱり気づかれたか。
そりゃあ、普通に障壁無視して蹴り飛ばしたし、あれで気にしない奴がいたら相当なバカよね。

「何者って……出席番号８番、神楽坂明日菜。近衛木乃香のルームメイトで、部停中だけど所属は美術部で……」

「そんな事を聞いているんじゃない。真面目に答えろ」

「そうは言われても、どう答えろって言うのよ」

まさか、「ウェスペタルティア王家出身の“黄昏の姫御子”です」なんて名乗れるわけがない。
エヴァちゃんが口外するとは思えないけど、学園の関係者にでも聞かれたら厄介極まりない。

「貴様が持つ能力だ。私の魔法障壁を無効化したその力……何故そんな物を持っている」

「知らないわよ。生まれつきなんじゃないの？」

ちなみに嘘は言っていない。

だって、千冬と違って本当に生まれつきだし、どんなメカニズムで身につくのか知らないし。

「……ふん、まぁいい。ぼーやに伝えておけ。月夜の晩には気をつけろとな」

言いたい事だけ言って、エヴァちゃんは去って行った。
途中で茶々丸さんは軽く礼をしてたけど……うん、やっぱり茶々丸さんっていい人だ。

（でも、どーするかな……）

確かに、ネギは歳の割にそこそこ出来る方だとは思う。
でも、相手が数百年生きた吸血鬼の真祖だと、分が悪すぎる。しかも相手には従者がいる。
とてもじゃないが、今のままのネギでは太刀打ち出来ない。せめてネギの方にも従者がいれば勝ち目はあるかもしれないけど……。

「……最悪、私が何とかすべきかな？」

ここでネギと仮契約して戦うってのも選択肢の1つだけど、それだとタカミチや学園長の思惑に乗るみたいでなんか嫌だ。
でも、見て見ぬ振りって言うのも後味悪いし……うーん。

第１９話：誰なんだろうね、クラリッサさんを副隊長にしたのは　ｂｙ．シャル

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

「久しぶりさー、ネギの兄貴！　恩を返しに来たぜ！」

「……カモ君？」

何でいるの？
その言葉を、僕は何とか呑み込んだ。
カモミール・アルベール。昔、罠にかかっているのを気まぐれで助けたオコジョ妖精だ。
でも、この前アーニャから来た手紙によると、下着泥棒で刑務所送りになったって話だったけど（被害に遭ったアーニャは「いい気味よ」って書いてた）……。

「なんか困ってんだろ？　俺っちが来たからには心配無用だぜ！」

「……」

どう答えればいいんだろう。アスナさんもすっごいジト目だ。
だって……カモ君、オコジョだよね？　ぶっちゃけ、ただのオコジョ妖精だよね？
とりあえず、現時点の状況を相談してみた。視点が変われば、また違ったアイディアが出てくるかもしれないし。

それでエヴァンジェリンさんの事を説明すると……。

「く、故郷(くに)に帰らせていただきやす」

「「こら」」

逃げようとしていたカモ君の尻尾を掴み、捕まえる。
どちらにせよ下着ドロ犯を逃がすつもりも無いので、とりあえず縛っておこう。

「でも兄貴、それならいい方法があるっすよ！」

「え、何？」

「仮契約っすよ仮契約！　兄貴も従者を持って、それで相手の片っぽをボコっちまうんですよ！」

……なるほど、確かに2対1なら勝率は高い。
でも、仮契約はダメ。だって、この問題の事を知ってる人はほとんどいないし、一般人を巻き込むわけにはいかない。
まさかとは思うけど、アスナさんを巻き込むつもりじゃないよね？

「ギクッ」

……うん、まぁ予想はしてたけど。
とりあえずカモ君を締め上げる。「ぐえ」って聞こえたけど無視。
確かにアスナさんは凄いと思う。一般人なのに魔法無効化なんて凄い能力持ってるし、一般人とは思えない身体能力。
でも、巻き込むのだけはダメ。アスナさんは普通の人間で、僕の問題に巻き込むわけにはいかない。

「……私は別に構わないけど」

「アスナさん！？」

「エヴァちゃんからも完全ネギの味方だと思われてるし。ああでも、まず説得してみたらどうかな？　エヴァちゃんはともかく、茶々丸さんは結構話が通じる人だし」

確かに、説得する価値はあるかもしれない。
エヴァンジェリンさんには話が通じなくても、茶々丸さんにならまだ通じるかもしれない。普段から礼儀正しくていい人みたいだし。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｒａｕｌａ〕

まったく……なんだったんだ、あれは。

「本当だよ。なんだったんだろうね」

隣を歩くシャルロットも、何となく不機嫌そうに見える。
つい先ほど、カフェで一服していたところ、Ａ組の副担任の高天原とかいう男に絡まれた。
確かに充分美形と呼ばれる部類に入るのだろうが……私はどこか、その男から違和感のようなものを感じていた。何と言うか、作り物のような……そんな違和感を。

「もしや奴は『テンプレ転生』をした存在では無いか？」

「……何それ」

何でも、１０ｔトラックに轢かれて死んでみたら、実はＫＡＭＩＳＡＭＡのミスとやらで、そのお詫びで好きな力を持って転生出来るという。
奴はきっと、前世は容姿に劣等感があり、それで超美形で転生する事を望んだのではないか？

「……ラウラ。前にも言ったけど、クラリッサさんの情報は基本間違ってるから」

何を言う。そんなはずあるか。
なお、クラリッサというのは私の副官で、日本文化にも精通している頼れる存在だ。
気に入った相手を日本では「嫁」と呼ぶのを教えてくれたのもクラリッサだ。だから一夏は私の嫁だ。意義は認めん。

「いや、だからそれも違うって。この前だってそうだよ。実際の伊達政宗は六爪流なんて使わないからね？」

シャルロットが何か言っているが、まぁいいだろう。
それより、高天原は何の事を言っていたんだ？　まったく意味が分からん。

「だよね。僕、別に愛人の子とかじゃないのに」

少し苛立ちが混じった顔で、シャルロットがそう言う。
シャルロット・デュノアはフランスの大企業「デュノア社」の社長令嬢だ。
念のために言っておくが、別に妾の子では無い。デュノア社の社長一家に生まれ、幼少期こそそういった出自のために男性として育てられたらしいが、今では普通に女として暮らしている。家族仲も良好で、よくエアメールも届いている。

「思わず殴り飛ばしちゃったよ」

「気にするな。あれは明らかに向こうに非がある」

何せ、シャルロットの父親の事を罵倒したのだ。
尊敬している相手の事を悪く言われ、我慢出来る者がいるか？　いるはずがない。
シャルロットの一撃を受けて吹っ飛ばされて気絶した高天原は、やって来た教師によって連行されていった。……本当に何がやりたかったんだろうな。

「む？」

ふと、立ち止まる。
視界の先には、薄汚れた女生徒が1人歩いている。
確かあれは……3－Aの絡繰茶々丸だったか？　マクダウェルを「マスター」と呼んでいたが……つまり、従属関係にあるという事か。

こんなところで何をしているんだ？

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

麻帆良学園本校・第３資料室にて。
ボクは楯無達が持って来た資料に目を通していた。内容は“闇の福音”に関する情報。

「エヴァンジェリンが麻帆良学園に通い始めたのは１５年前、か」

「しかし、当時の在学生は彼女の事を覚えていませんでした。それ

も全て」

「……そりゃ妙だね」

ボクにそう答えたのは、布仏虚ちゃん。
よく一夏君と一緒にいる「のほほんさん」こと布仏本音さんのお姉さんで、本校高等部の1年生。本音とは正反対のキリッとした真面目さん。
いつもは楯無のサポートに付いており、あの子の奇行を唯一制御出来る人間でもある。
それにしても、何でエヴァンジェリンは学校なんかに通ってるんだろ。自分の意志って事はなさそうだし、やっぱり強制的に？

「ん～……待てよ。そう言えば、何かそーゆー呪いがあったような……」

必死に記憶の奥底を引っ繰り返して、探してみる。
えっと……なんだっけ。ほら、あれ……そう、登校地獄だ！

「……何それ」

「何でも昔、不登校の生徒を登校させるために使用された呪いなんだってさ」

ボクは実際に使った事も見た事も無いから知らないけど、魔法世界

にいた頃、そーゆー呪いがあったって話だけは聞いたことがある。エヴァンジェリンがネギ君を狙ったところからするに、サウザンドマスターに呪いをかけられたのだと考えられる。……ほんとにアレ、迷惑以外残さないねホント。

「神崎先生は実際に、サウザンドマスターと会った事があると聞いていますが？」

「……うん、まぁあるよ」

思い出したくもない出来事だけど。
２０年前当時、ボク達はまだ魔法世界で暮らしていた。
２００年くらい前、日本も暮らしにくくなってきたから、後始末済ませて隠居したわけ。
で、２０年ちょっと前、戦争が始まって「何だかうるさくなってきたな～」って思ってる中、あのバカ共の戦闘の余波で住んでた家吹き飛ばされた。

「「……」」

で、ボク達……特に瑪瑙がキレた。夫婦のコミュニケーションの最中だったから、もう目も当てられないくらいにキレていた。
なお“紅き翼”の連中を血祭りに上げたのは言うまでもない。

「まぁ、それからも結構な頻度でちょっかいかけられてさ。戦争が

終わるちょっと前にまた旧世界（こっち）に戻って来たってわけ」

それにしても、１００年過ぎると色々あったみたいだよね～。
未だに「飛行機」とか「携帯電話」とか、驚く事ばっかだもん。

「まぁともかく、これならエヴァンジェリンとの交渉するような事があれば、何とかなるかな」

「……解呪の事、ですか？」

「察しがいいね」

虚ちゃんの言う通り、エヴァンジェリンは解呪を望んでいる。
「女子供は殺さない」ポリシーの持ち主である彼女が、１０歳のネギ君を襲う理由は解呪のため他ならない。
だから万が一、ボク達に被害が及ぶような事があれば、エヴァンジェリンの解呪を交渉材料に何とかする事が出来る。

ちゃらららら～、ちゃりらりら～ん♪

……何だか、気の抜けた着信音が響く。
少なくともこれはボクのじゃない。そう思っていると、楯無がポケットから携帯を取り出す。

「もしもし？　あら、どうしたの？　……え？」

楯無の表情が、一変する。
これまでのおちゃらけたそれから、真剣なものへと。
虚ちゃんもそれを感じ取り、いつでも動けるように整える。

「分かったわ。すぐに手配する。……ちょっと厄介な事になりました」

「何があった」

「詳細は不明ですが、絡繰茶々丸が襲撃されたとの事です。身体を真っ二つにされたと」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

「そういうわけだから、神鳴流がどっちに付くかで妾たちの行動も大きく変わるので、来週の頭には決めておけ」

「……それはまた唐突どすな」

今、妾の前におるのは和装姿の女。傍らには白木の野太刀が置かれている。
此奴の名は青山鶴子。神鳴流嫌いの妾たちが友好的に接する数少ない存在じゃ。

「確かに、詠春はんでは西を抑え込めておりまへん。穏健派の台頭とはいえ、その実態は東の傀儡や」

「そうなる事はあの日、分かっていたであろう」

妾がそう追求すると、苦虫を潰した顔になる鶴子。
近衛詠春は歴代の神鳴流剣士達の中でもズバ抜けた能力の持ち主じゃ。かつての大戦でもその実力を発揮し、英雄とまで呼ばれるに至った。実力については妾もまぁ、百歩譲って認めよう。
しかし、武の英雄が王になれるかはまた別の問題じゃ。
王に……優れた統治者に必要とされるのは、広い視野と高い洞察力、

そして全てを包み込むほどの器じゃ。

「今は亡き木乃葉様やったら、何の問題無かったんどすが……」

「近衛木乃香の母君じゃったか？　確か１０年前に病気で死んだとかいう」

「ええ。……あの方が生きておられたら、木乃香お嬢様を東にやるなんて馬鹿げた真似、許すはずが無かったどす」

魔法から遠ざけるためとはいえ、これでは全く意味が無い。
近衛近衛右門は孫娘を『英雄の息子』の従者にしようと企んでおるようじゃし、そんな事も見抜けぬようでは、近衛詠春も大した事ないのう。

「強硬派の中には木乃香お嬢様を利用し、スクナの封印を解こうと目論む輩もおると聞くし……」

「……ちょっと待て。今、なんと言った？」

問い質すと「あ」という顔で冷や汗を流す鶴子。
……まさかとは思うが、リョウメンスクナの分身体、まだあそこに封印したままとは言わんじゃろうな？

「……神鳴（うちら）流としては、しっかり抗議しましたえ。玖楼はんの言

うた通り、『すぐに飛弾に移し、祀った方がええ』と」

「ならば何故」

「詠春はんが無理矢理話を終わらせたからや。うちらの抗議も全く聞き入れずに」

その言葉に、怒りを通り越して呆れた。

……17年前のリョウメンスクナ事件。こっちで隠居中だった妾たちが駆り出され、恐ろしく迷惑を被った。

最終的に、「何でここにいやがる！」と盛大な邪魔をしてくれた鶏頭共を血祭りに上げ（何故か一緒におった元女王もさすがに呆れておった）、玖楼自身がスクナに封印を施し、「あくまで一時的な封印だから、落ち着いたらすぐにでも飛弾の本体のところへ戻して祀るように」と念を押し、こっちへ戻って来たのじゃが……。

「……何を考えておるのじゃ、あの阿呆は」

「知りまへん。何から何まで玖楼はんの言う通りにするのが癪やったんやないか？」

「確かにのう……妾たち、基本的に神鳴流とは敵対しとったし」

と言うか1度壊滅させたし、神鳴流。

懐かしいのう……もう、２００年近く昔の話じゃが、あの頃の妾たちは輝いておった。もうどこの百式かというくらいに輝いておった。

「さて、話を元に戻すが、次の長の話じゃが……どうなった？」
「血脈的に妥当なのは木乃香お嬢様やけど、正直まだ１５歳のお嬢様を長に据えても、また強硬派が台頭してくる危険がありますな」
「……なら、やはり玖楼の計画で行くしかないの」
妾としては、あまりこの手は使いたく無かったんじゃが……。
「玖楼はんに、何か考えが？」
きょとんとなる鶴子に、玖楼の立てた計画を説明する。
説明の最中、何度も苦々しい表情を浮かべていたが、最終的にはため息を吐きつつも頷いた。
「……確かに、それしかありまへん」
「反対せんのか」
「それくらいせんとあかんやろ。確かに気分のええ話やないけど……」
まぁ、そうじゃろうな。

今、西の本山に必要なのは大規模な外科手術じゃ。近衛詠春を始めとする一派という患部を取り除くためのな。

「そのためにも、あの2人を呼び寄せる必要がある」

「……翡翠はんと琥珀はん、協力してくれるやろか？　そもそも、今どこにおるんや？」

「さぁの」

どこにいるにせよ、玖楼が呼びかければ協力すると思うぞ？　「ふぁざこん」じゃからの。

第１９話：誰なんだろうね、クラリッサさんを副隊長にしたのは　ｂｙ．シャル

実はラウラの突拍子も無い推論が１番答えに近かったりする（笑）

第２０話：軋轢

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

一瞬、何が起きたのか分からなかった。
唖然となったボク達の目に飛び込んできたのは、胴体が真っ二つになり、爆発に巻き込まれた茶々丸さんの姿だった。

「てめぇぇぇぇぇ！！　茶々丸に何してやがる！！」

その声にハッとなり、咄嗟に障壁を張る。
だけど、障壁を貫かれ、その一撃がボクの腹部に吸い込まれた。

「がっ……！」

「ネギ！」

そのまま吹き飛ばされ、壁に激突する。
襲ってきたのは……高天原先生だった。

「１人になったところで生徒を襲撃するとはな。さすがは正義の魔法使いだ。反吐が出る」

「ち、違……」

「見損なったぜ。いずれ茶々丸の仇はきっちり取らせてもらう」

それだけ言うと、ぐったりとした茶々丸さんを抱きかかえ、そのまま飛び立っていった。

「兄貴！」

「ネギ、大丈夫！？」

立ち上がれないボクを、アスナさんが抱き起こす。
攻撃自体は大した事無かったんですが……やっぱり、いきなりあなったから、ショックで……。

「うん。……でも、いったい何が」

「分かりません……」

突然茶々丸さんが爆発して、何が起きたのか……。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｅｖａ〕

「茶々丸、無事か！？」

茶々丸がやられたという話を聞き、私はハカセの研究室に飛び込んだ。
そこには、バラされた茶々丸とハカセ、そして超鈴音の姿があった。

「安心するネ。身体（ボディ）はやられたガ、メモリーその物は傷ついてない」

「数日すれば、新しい身体にインストールが完了します」

２人のその言葉に、ほっと息を吐く。
事情は高天原から聞いている。しかし、まさかあのぼーやがこんな

行動に出るとは……見かけによらんな。

「その事ですけど、ちょっと妙なんですよ」

「何がだ」

「破壊された茶々丸の身体を調べてみたんですが、どうも腹部を何かで吹き飛ばされて爆発したようなんです」

……つまり、何がおかしいんだ。

「念のため、茶々丸のメモリーも調べて見ました。ですが、ネギ先生が何かしたような描写は無かったんです」

「むしろ、ネギ坊主も突然起きた事に驚いてる様子だったネ」

「何……？」

……私の知る限り、あのぼーやは演技出来るほど狸ではない。
高天原は「アイツが1人になったのを見計らって攻撃した」と言っていたが、少し妙だな。
じじいやタカミチの情報によると、ぼーやは火の魔法が苦手らしい。
無詠唱呪文も使えないらしいし……。

「私たちはもう少し、茶々丸の身体を調べて見ます。もしかしたら

何か分かるかもしれませんし」

「ああ、頼んだ」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈａｒｌｏｔｔｅ〕

「ね、ねえラウラ。さっきのって……」

「シャルロット。この前の授業だが、ここはどう訳すのだ？」

ラウラは鞄から取り出したノートを開き、１文字１文字を指差して

いく。
く、ちに、だすな……『口に出すな』？
もしかしてと思い、顔を動かさずに視線だけを周囲に向ける。
……さっきまでいなかった黒服の人が、僕たちの方を見ている。
もしかして、さっきの事で……。

「えっとね、ここは今日の授業でやったでしょ？」

僕もラウラに倣い、文字を指差して意思疎通を図る。

「神崎先生も言ってたじゃない。しっかり勉強しておけって（あの人達、何？）」

「む。ちゃんと勉強はしている。ただ聞きそびれたというか何と言うか（分からん。だが、少なくとも一般人では無い事は確かだ）」

……もしかして、僕たちピンチ？
A組みたいに騒ぎを起こした事はほとんど無い。だとすれば考えられるのは、さっきのあれ。
A組の絡繰さんがいきなり爆発して、呆然としているネギ先生や神楽坂さん。そしてネギ先生を殴り飛ばした高天原先生。……そう言えば、変な事言ってたような。

「やはり、普段からノートは取っておくものだな（逃げるぞ）」

その言葉に頷くと、僕たちは一気に走り出す。
向こうもそれに気づき、僕たちを追ってくる。
でも、どうするの？　どこに逃げればいいの？

「分からん！　だが、ここで捕まったら何をされるかも分からん！」

そんな事を言いながら走り続け、角で誰かとぶつかった。
正面衝突するのだけは避けられたけど、こんな時にいったい誰？

「あなた達、どうしたんですの？」

見ると、僕たちの前にいたのはセシリアと鈴。
どうやら相当急いでいたらしく、息を切らしていた。

「まさか、あんた達も逃げてたってわけ？」

「鈴さん！」

セシリアの指摘に「やば」と口を押さえる鈴。
もしかして、さっきのあれを2人も見たの？　絡繰さんがいきなり
爆発するあの場面。

「それどころじゃないわよ！　あれはいきなり爆発なんかじゃない！　あれは……」

「君たち、そんなに急いでどうしたんだい？」

そんな穏やかな声をかけながら、高畑先生が歩み寄ってきた。
顔に笑顔こそ浮かべているけども、その目は笑っていない。

「……高畑先生こそ、どうされたのですか？」

不満げな顔でセシリアがそう尋ねる。
どうやら、２人もこの人達に追いかけられていたみたい。
と言うことは僕たちと同じものを見たのかな？

「いや、僕は少し、君たちに聞きたい事があってね。ちょっと職員室まで来てもらえないかな？」

「……もしも、拒否したら？」

「ちょっと話を聞きたいだけだよ。別に拒否したりなんてしないだろう？」

はっはっは、と笑っているけど、僕たちは笑えない。それに寒気しか感じない。
じりじりとにじり寄ってくる先生達。まずい……完全に囲まれて

る。
おまけに周りには誰もいない。明らかに普通じゃない人しかいないし。

「はい、そこまで」

その瞬間、ざぱーんと僕たちの周囲に水が降り注いだ。
それも雨とかそう言うレベルじゃなく、水その物が意志を持っているように次々と黒服や高畑先生達を押し流していく。
え、何この水。いったいどうなってるの！？

「くっ！　まさかこの水は……！」

そう言いながら、高畑先生がズボンのポケットに手を入れる。
が、いきなり意識を失ったようにその場に倒れ込む。
気がつくと、他の黒服も全員気絶していて、立っているのは僕たちだけになっていた。

「どうやら、間に合ったみたいね」

そんな声が響き、木陰から出てきたのは本校の制服に身を包んだ女の人。
青い髪に赤い眼が特徴的な、メリハリのある体型をした美人。

「更識、先輩？」

よく一夏と一緒にいる（と言うより、一夏にじゃれついている）先輩だ。
もしかして、今の凄い水、更識先輩が何かしたんですか？

「まぁ……そう言う事になるわね。とりあえず、ここを離れましょうか」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｉｃｈｉｋａ〕

セシリア達が学園の魔法先生達に追いかけ回された、と聞いて、俺はすぐさま神崎先生の家を訪れた。
俺が到着した時、もう説明は終わっていたらしく、鈴からは「何で今まで黙ってたのよ！」と怒鳴られた。……理不尽だ。

「当然だろう。私もそう思ったからな」

いつの間にかこっちに来ていた箒からも、そう言われる。
だって……巻き込むわけにはいかないだろ？　そう簡単に話せる問題じゃないし。

「そんなの分かってるわよっ！！」

「そうですわ！　ですが私たちは一夏さん1人支えられないほど、か弱い女ではありませんわ！」

あ、あれ？　何で俺が悪いみたいな雰囲気になってるの？
いつの間にか神崎先生や瑪瑙さんもジト目だし、楯無さんも扇子で口元を隠してこっち見てるし。

「じゃ、一夏君が朴念仁だという話はそれくらいにして」

「何で朴念仁！？」

「今更何言ってんの。……で、君たちが何を見たか話してくれる？」

神崎先生の言葉に、俺はハッとなった。
そうだ。みんなが追いかけ回される原因になったのは、何かを見たからだ。
それも学園屈指の実力者である高畑先生が出てくるほどの何かを見てしまった。……いったい何を見たんだ？

「僕たちが見たのは、絡繰さんが突然爆発する光景です。ネギ先生や神楽坂さんが呆然としていたら、突然高天原先生が来て、色々言って帰って行きましたけど」

「ふむ……多分だけど、魔法に関する事を言ってたんじゃないかな？」

「あ、はい。正義の魔法使いがどうとかって」

その言葉を聞いて、俺たちは深くため息を吐く。
魔法の秘匿はどこへ行ったんだという話だ。子供のネギ先生の方がよっぽどうまくやってるぞ？
だが、これでシャルやラウラが追いかけられた理由は分かった。後は……。

「で、オルコットさんと鳳さんは何を見たの？」

「基本的にシャルロットさんとラウラさんが見たのと同じですわ。ですが……」

「……あたし達、見たんです。高畑先生がすごい速さでパンチみたいのを飛ばして、それで絡繰さん攻撃したの」

鈴のその言葉に、俺と神崎先生は目を見開いた。
つまり、高畑先生が絡繰さんを攻撃した？　いや、それよりも……。

「……鈴、高畑先生のパンチ、見えたのか？」

「う、うん。ポケットに入れたままの手を凄い速さで抜いて、それでパンチみたいのを飛ばしてたけど」

その言葉に、思わず言葉を失った。
高畑先生が使うのは、ポケットを鞘に見立てた居合いならぬ「居合い拳」。まったく見えず、音もしない事から「無音拳」とも呼ばれる技法だ。
……でも、どんだけ目いいんだよ、あれ見えるなんて。

「……しかし、ちょっと厄介な事になってきたかもね」

うーん、と腕を組んだまま唸る神崎先生。

厄介な事って、どういう事ですか？

「いや、ネギ君の事はともかくとして、問題はそれを見てしまった君たちだよ」

「あ……」

気まずそうに顔を見合わせるセシリア達。
でも、それ自体こいつらに責任はない。あくまで見たのだって偶然だし、悪いのは絡繰さん攻撃した高畑先生達だ。
だからと言って、その理由が向こうに通じるかどうかの話になると……うん、ダメだな。

「その場面を見た記憶を消しにかかるだろうな。問答無用で」

「な、何なのよそれ！？」

鈴が憤慨したような声を上げるか、実際そういう連中なんだ。
今まで魔法の事を目撃してしまった一般人は何人もいる。その都度、都合のいいように記憶を操作して、うまくやり過ごしてきた……
と、千冬姉が言っていた。

「まぁ、その辺りはおねーさんに任せなさい」

胸を張り、自信満々にそう言い放つ楯無さん。
楯無さんが胸を張った瞬間、その豊満な胸がぶるんと揺れ、脇腹に鋭い痛みが走った。

「いづっ！」

見れば、シャルが面白くなさそうな顔で俺の脇腹を抓っていた。
しかもシャルだけではなく、他の全員も似たような顔（特に胸に関しての話題はタブーな鈴はつや消しの目）をしている。
その後しばらくの間、楯無さんを除く女性陣から「女の敵」と言わんばかりの視線に晒された事だけは言っておこう。……と言うより、俺悪くないよな？　不可抗力だろ、これ！？

第２１話：さぁ、暗躍の時間です

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

「……で、どう思った？」

一夏君達が帰った後、楯無にそうぶつけてみた。
ここから先は子供には聞かせたくない「大人の話」だ。
……年齢的に言えば、この子は１歳年上なだけなんだけどね。人生経験の差かな？

「ネギ・スプリングフィールドを英雄にするための第１歩、ってところかしら？」

うん、ボクもそう思った。
そう思った理由として、今回の事件があまりにもタイミングが良すぎる事に由来する。
「桜通りの吸血鬼」の噂話自体は結構前からあった。まぁ、ほとんどの教師は単なる七不思議だろうと思っていたけど、実際は違う。
エヴァンジェリンが呪いを解くチャンスを狙い、学園側にも気づかれないように少しずつ吸血行為を行い、力を蓄えていた。
だが、それ自体は学園側……というか、近衛近衛右門には筒抜けだった。

「寧ろ、学園側が気づかん方がおかしいじゃろ」

「「確かに」」

瑪瑙の呟きには全面的に同意する。
吸血鬼に襲われたような被害者が出た。痕跡を調べたらハッキリするだろうし、その場合疑われるのは学園内の吸血鬼……エヴァンジェリンだ。おまけに賞金首だったという前科持ちだし、疑われないはずがない。
それでこれまでいざこざが起きなかったのは、近衛近衛右門が無理矢理抑え込んでいたか……もしくは封印状態にあるとはいえ、“闇の福音”を敵に回すのを恐れた事が考えられる。
まぁ、ボクらにはあんまり関係無い事なんだけど……。

「……ボクの生徒にちょっかい出されて、それで見て見ぬ振りってのも出来ないし」

向こうからすれば危害を加えるつもりは無かったんだろうけど、それでも見知らぬ男に追われたんだから、彼女達の不安は計り知れない。
やっぱり、この事件をどうにかしないとダメなんだろうね～。

「あら？　じゃあ私の出番？」

「いや、それだと無関係な人間にまで被害が及ぶ」

社会的制裁を与えるって方法は難しくない。更識家の力を使うなりすれば。
だけど、デュノアさんは大企業、オルコットさんは名門貴族のご令嬢だし、表向きに抗議すれば国絡みの大問題に発展してしまう。
魔法先生の中には、やっぱり教師として誇りを持って生徒達を守っている人だっている。
今回、思いっきり痛い目に遭って欲しいのは直接動いていると思わしきタカミチ・Ｔ・高畑と近衛近衛右門だけ。

「じゃあやっぱり、あの方法で行くとするか」

「あの方法？」

きょとんとした顔になる楯無。
それとは対照的に苦笑いを浮かべる瑪瑙。……まぁ、長い付き合いだから、何をするのか想像が付いてるんだろうね。

「思いっきり向こうの思惑通りの展開から外れてもらう」

さしあたり、必要なのは協力要請かな。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｓｅｒｕｈｉｋｏ〕

学園内で奇妙な噂が流れている。
何でも「桜通りの吸血鬼」が生徒を襲っているという噂話。実際にＡ組の佐々木さんが襲われたようだけど、保険医の先生によると単なる貧血との事。
でも、同じような噂が何年もあったから、他の先生……特にガンドルフィーニ先生は“闇の福音”エヴァンジェリンが暗躍しているのではないかと睨んでいる。

「吸血鬼の噂に関しては問題ないぞい。単なる噂じゃからの」

そう学園長は言っていたけど……やっぱり気になるものは気になる。

そしてそんなある日、また別の問題が起きた。
神崎先生曰く、F組の生徒が高畑先生に追い回されたという。

「……高畑先生、どういう事なのか説明していただけますか？」

シャークティさんが厳しい目で高畑さんを射抜く。
シスターという立場であるため、女生徒からよく相談を受ける身として、今回のような事は見過ごせないようだ。
さすがの高畑さんもごまかしは効かないと分かっているらしく、素直に口を開く。

「いえ、実は魔法使用を見られまして、それで事情を説明するために……」

「だとしても、もっとやり方というものがあるでしょう。相手は中学生、それも女の子なんですよ？」

厳しい口調で反論するシャークティさん。
彼女の言う通り、今回は高畑さんに非がある。
相手は女子中学生だし、説明するためとはいえ追い回したら、向こうだって不安に思う。
……実際、他の人達も同意見らしく、みんなすっごく厳しい目で高畑さんを見ている。

「そこまでじゃ」

「学園長……」

「事情は分かった。しかし、シャークティ先生の言うように、今回のようなやり方では生徒に不安を強いてしまう。……高畑先生にはしばらく大人しくしていてもらう」

「……はい」

珍しい。
学園長って普段、身内には甘いところがあるから、今回の事もなあなあで済ませるんじゃないかって思ってたんだけど。
……でも、何だか焦ってるように見えるのは気のせいかな？　まるで早く終わらせたいよう見えるんだけど……。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

当然、秘密裏に行われている魔法先生の会議の様子は妾たちに筒抜けじゃ。
普通の警備には充分かもしれんが、妾にとってしてみれば、あの程度を“視る”事くらい呼吸のごとく容易い。

「それで、担任でもない神崎先生が私に何の用かな？　ご丁寧に自分の女房まで連れて」

妾たちは現在、エヴァンジェリンの家を訪れておる。
しかし、意外じゃのう。“闇の福音”だと物騒な呼び名で呼ばれているにも関わらず、家の中は可愛らしく飾られている。
何だかその様子を眺めている内に、微笑ましく思えてしまう。

「なに、ちょっと話したい事があってね。うちのクラスの篠ノ之さん知ってる？　彼女からこの前、君に似た変質者に襲われたって話を聞いたんだけど」

「知らんな」

「……うん、分かった」

そう言い、玖楼が妾に軽く目配せする。
うむ、ようやく妾の出番じゃな。
ぱちんと妾が指を鳴らし、この家を結界で覆い尽くす。

「……貴様、今何をした」

一瞬驚愕に顔を染めたが、すぐにエヴァンジェリンが妾にそう問い質す。
ほう、封印状態にあっても今何が起きたかには気づいたようじゃの。

「なに、ちょっと別の光景が見えるように設定しただけじゃ」

「何？」

「一種の幻術系結界じゃ。外からは妾たちが談笑しているように見える」

ただ見えなくするのは簡単じゃが、それだとこっちが疑われる。
じゃから、ちょっとこっちの話の内容を見られても問題無い物に変えただけじゃ。

「これから話す内容は一応オフレコなんでね。ボクらとしても聞かれたくないって事だよ」

「……貴様ら、いったい何者だ」

「通りすがりの一般教師とその嫁じゃ。覚えなくとも良いぞ」

さて、そろそろ本題に入ろうかの。
向こうとしても警戒心が最大じゃし。

「単刀直入に言うけど、君の呪い解くからネギ君襲うのやめてくれない？」

玖楼のあまりにも単刀直入すぎる言い方に、エヴァンジェリンは飲んでいた茶を噴き出した。
いや……玖楼よ、さすがにそれは唐突過ぎると思うぞ？

「ごほっ……冗談を言うつもりならさっさと帰れ」

「悪いけど、ボクも伊達や酔狂でこんな事言ってるんじゃないよ。ちょっとばかり許せない輩がいてね」

その言葉と玖楼の表情から、ようやく真剣さを感じ取ったらしく、エヴァンジェリンは興味深そうに眼を細める。
どうやら、ここからが本題のようじゃな。

「昨日の話だけど、老け顔の魔法先生にうちの生徒が追い回されて

さ。何でも見ちゃマズイものを見ちゃったらしくてね」

「ほう……タカミチがじじい共に呼び出されたのはその事か」

「まあね。そりゃあ見られちゃマズイでしょ。……物陰から自分の生徒を攻撃したトコなんてね」

そう呟いた瞬間、エヴァンジェリンが凍り付いた。
昨日何があったかを合わせて考えれば、それがどういう意味なのか……想像するのは容易い。

「……どういう事だ。何故タカミチが茶々丸を」

「簡単だよ。君とネギ君を戦わせるためだ。英雄の息子が悪の魔法使いを倒したっていう箔を付けさせるためにね」

他にも、戦闘経験を積ませるなど考えられるな。
まぁ、本物相手に正面から戦って勝てるはずが無いし、大方どこかで横槍を入れるつもりなんじゃろうが。

「それは間違いないのか？」

「目撃したのはボクの生徒。さらに当人に追いかけられてる。これだけじゃ証拠として弱い？」

「……いや。考えてみれば、確かにおかしいところはあった。私

がここに括られている理由をじじいは知っている。だが、その状況下にあのぼーやを設置する事……そうか、そういう事だったのか」

エヴァンジェリンの表情が、だんだん憤怒に染まっていく。
従者を攻撃され、さらには自分が他者の掌の上で踊っていた。それは充分、怒りに値する。昔の妾なら即刻八つ裂きにしているな。

「礼を言っておこう。あのままだったら、私は恐らくじじいの思惑通りにぼーやと戦っていただろうからな」

「別にいいよ。ボクはちょっと君に協力してもらいたいだけだから」

「協力？」

「そ。こんな馬鹿げた事をしでかした連中にさ、一泡吹かせてやりたくない？」

にやり、と玖楼が悪い笑みを浮かべる。
……１０００年前の純粋無垢だった玖楼は、どこへ行ってしまったんじゃろうな。
まぁ、こういう玖楼も悪くはない。これはこれでそそるものが……
……おっと。

「ほう……面白そうだな」

玖楼の意図を察したのか、エヴァンジェリンも同じような笑みを浮かべる。
さすがは悪の魔法使い。笑い方も様になっておるのう。……まぁ、見た目は子供じゃが。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｏｎｏｅｍｏｎ〕

「……タカミチ、珍しく失敗したの」

「はい、油断しました」

「折を見て記憶を消すにしても、神崎先生が警戒しています。それ

にあの水……おそらくは更識楯無かと」

「ふむ……」

２０年前に麻帆良にやって来たごく普通の一般人。勤続１０年の教師じゃが、特に不審な点は無い。
魔法使いが学園結界の中で何かしらの行動を示せば、それがたちどころに察知される。
しかし、今のところ彼に関する不審な動きというのは見られない。
……せいぜい、篠ノ之束のお気に入りというところじゃろう。
そして更識楯無。表向きは本校の生徒じゃが、実際は違う。
麻帆良学園の監視のため、日本政府から送り込まれたスパイ、と儂は睨んでおる。

「やむを得ん。しばらくは放置して構わん。ここで下手に干渉すれば、神崎先生だけでなく他の教師からも反感を買う事になる」

「はい。……ところで、エヴァの様子は？」

「心配いらん。多少疑いを持ってはおるが、修正誤差範囲内じゃ」

エヴァにしてみれば、呪いを解く事の出来る折角のチャンスじゃ。
チャンスを少し疑うくらいで見逃す事はせんじゃろう。

「ネギ君が未来の英雄になるための第一歩じゃ。……もう少しじゃ」

「はい」

◆◇◆◇◆◇

第２２話：一夏君の修行風景

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

結局、茶々丸さんは学校を休んだ。
いきなり爆発して真っ二つになったんだから、そんな後で学校に来たら、それはそれで怖いと思うけど……。
エヴァンジェリンさんはいないし（さすがに話しかけづらいし）、誰に聞けばいいかで迷ってるとアスナさんが「茶々丸さんロボットだし、だったら超かハカセじゃない？」と言われ、葉加瀬さんに聞いてみたところ。

「ああ、茶々丸だったら大丈夫ですよ。記憶媒体には傷１つありませんでしたし、新しい身体に移せばすぐ動けます」

そんな答えが返ってきた。
茶々丸さんの無事にホッと息を吐きつつも、念のためにどんな状態だったのかを聞く。
いきなり爆発したんだから、気にはなるし。

「私たちも身体の残骸を調べてるところなんですが、まだ詳しい事は何も」

「そうですか……」

「高天原先生はネギ先生がやったって言ってますけど……」

「ち、違いますよ！？」

僕たちが話してる最中にいきなり爆発しましたし！
それで何が起きたか分からずに呆然としていたら、いきなり高天原先生がやってきて「茶々丸に何してやがる！」って殴られて……。

「ちょっと待ってください。高天原先生がやって来た？　最初からいたのではなくて？」

「ええ。いきなりびゅんって」

……あれ、自分でも言っててちょっとおかしい様な。
いきなりやって来た割には事態を理解しすぎていたような気がする。だって、普通あんな場面を見たら、子供が何かしたなんて思うはずがない。その場面だけを見たにしても、まず何があったか尋ねるはず。
最初から見ていたのなら、何があったか分かっているから、殴り飛ばしたりする必要は無い。
……ここまで考えて、葉加瀬さんが何を考えたのか分かった。でも、それって……。

「高天原先生が茶々丸さんを攻撃した犯人って事になりますよ！？
そんなはずは」

「しかし、タイミングが良すぎるんです。偶然ネギ先生とアスナさんが茶々丸と話しているところに出くわしたにしても、あんな人気の無い場所で何をしていたって話になりますし」

それは……そうですけど。
茶々丸さんは野良猫に餌をやりに来ていて、僕らはその茶々丸さんと話すタイミングを窺っていましたけど、わざわざあんな場所に来る理由なんて、確かに思い当たらない。茶々丸さんみたいに猫に餌をやりに来たっていうのも考えにくいし。
だけど、いったいどうして？　茶々丸さんは僕たちの生徒なんですよ。生徒を攻撃するなんて……。

「……分かりません。あくまで可能性の話ですし」

……とにかく、注意はした方がいいかもしれませんね。
誰かが茶々丸さんを狙ったにしても、また狙って来ないとは限りませんし。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｅｖａ〕

じじいは完全に黒だ。
神崎が持って来たテープ（何でも知り合いがそれを録音したらしい）を聞いて、改めてそう確信した。

「……なあ、サクッと殺るのはダメか？」

「気持ちは分かるけど抑えて。ここで暴れたら君、完全に討伐されるよ？」

神崎にそう指摘され、ぐっと拳を握りしめて耐える。
……１５年前にここへ括られた事で、世間的に“闇の福音”は死んだ事になっている。じじいがあれこれしたため、私の賞金も取り下げられているが、もし私の生存が発覚すれば即座に賞金首に逆戻りだ。
本来の私ならともかく、最弱状態では狩られる危険が高い。

「まず、封印を解く手順についてだけど、麻帆良を出るにしてもあと1年は我慢して欲しい」

「何故だ」

「正当な理由が付けられるからだよ。研究の末に『登校地獄』の呪いを正常な形へ戻す事に成功したってね」

……なるほど。それならじじいやタカミチも反論出来まい。元々、3年経ったらナギが呪いを解きに来る約束だったし、それはじじい自身も聞いている。むしろ超過の12年分の特別手当でももらいたい気分だ。

「で、ちょっと確認したいんだけど、君の呪いはナギ・スプリングフィールドが15年前にかけたもので間違いない？」

「ああ、その通りだ」

15年前、ナギがバカ魔力で無理矢理呪いをかけたため、登校地獄の呪いはねじ曲がり、何故か「卒業しても1年生からやり直し」という繰り返しが生じるようになってしまった。
おまけにステータスも最弱状態……魔力も極限まで制限され、挙げ句に花粉症にまで……！

「うーん……でもさ、ちょっとおかしいんだよ」

「何がだ」

「軽く診てみたんだけど、君にかかってる呪いは2種類。その内の1つは『登校地獄』で、もう1つがどうも学園結界と連動してるタイプみたいなんだよ」

「何……？」

神崎の言葉に、思わず眉を顰める。
知らんぞ、そんな呪い。私がナギにかけられたのは『登校地獄』だけだ。
それに学園結界と連動させるなど、息子ならともかくそんな細かい芸当があの鶏頭に出来るとは思えん。

「……それで、どんな呪いだ」

「多分だけど、学園結界によって魔力を抑え込むタイプの呪いだね」

そう言われ、ふと思い出す。
麻帆良ではメンテナンスのために計画停電が年に数度行われている。
学園結界は電力によって維持されているため、当然停電によって結界も消える（外敵の侵入を許してしまうので、いつも大変だとタカミチがぼやいていた）。
停電の際、いつもと比べて身体が楽だったような……。

（そう言う事だったのか）

私に気づかれずに呪いを仕掛けられる相手。
元々悪名もあってか、私に近づいてくる魔法関係者は少ない。そして、その中でそんな芸当が出来るのは……。

「じじいの仕業か」

「十中八九そうだろうね」

顔を見合わせ、ため息を吐く。
ここまで来ると、怒りを通り越して呆れしか感じん。

「下手に解呪すると気づかれそうだし、ここはこうして……」

とん、と私の額を人差し指で突いた瞬間、身体が軽くなった。
まるで全身に巻かれていた枷が一気に外されたような、そんな感じだ。
まさにこれは実に15年ぶりに感覚。やっと私は……解き放たれた！

「……しかし、解いてもよかったのか？　じじいが気づくんじゃ……」

「大丈夫。呪い自体を解いたわけじゃなく、中身を書き換えただけ

だし。まぁ、形だけの呪いってトコかな」

つまり、ただ在るだけ。呪いは解かれていないが、私は解放されたという事か。
ふっ……だが、こうして全盛期の力を取り戻す事が出来た。それだけで充分だ。

「感謝する、神崎玖楼」

思わずにやけてしまう。
15年だ。この時を15年間待ち望んでいた。
これで学園からも出られる。つまり来月の修学旅行にも参加できるな。あっはっはっはっは！！

〔Side Out〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｉｃｈｉｋａ〕

――ダイオラマ魔法球・水のフィールド。
俺は現在、激戦の中にいた。
放たれた水流を躱しつつ、水の中から繰り出される突きを袈裟に薙ぎ払う。
……この状況、俺が圧倒的に不利だろ。

「一夏君、もう終わり？」

楯無さんが扇子片手にいつもと変わらぬ笑みを浮かべる。
更識楯無は水を操る。それが生まれ持った能力か、何らかの魔法具の力かは分からないが、こういう場所においては絶対的な優位性があると言っていい。
何せ、水その物が武器になるし、身を守る鎧ともなる。どんな無理ゲーだ、これ。

「……」

だとしても、ここで諦めるつもりは毛頭無い。
まったく敵わなくても、せめて一太刀くらいは入れてやる。

無言で雪片弐型を構え、楯無さんに向かって駆ける。

「うんうん、男の子はやっぱりそれくらいじゃないとね」

満足そうに頷く楯無さん。俺は楯無さん目がけて雪片を振り下ろす。
切り裂いた瞬間、楯無さんの身体がパシャっと音を立て、弾ける。

（やっぱり水分身かよ！！）

水分身は文字通り、水で自分の分身体を作り出す楯無さんの得意技の１つ。
生身でも目茶苦茶強いくせに、こういった搦め手も使ってくるので余計にタチが悪い。
本体を探して周囲に気を配る中、ふと後ろから変な音が聞こえた。

「……げっ！？」

背後から、凄い高さの津波が俺に向かってくる。
あの人！　さすがにこれは無いだろ！？

「くそっ！！」

あんなの喰らったら即終了だ。
已む無く零落白夜を発動し、雪片に白い光が灯る。
そして津波が俺に降り注ぐ瞬間、渾身の力でそれを薙ぎ払う。……
…瞬間、津波は俺を避けるようにして割れた。
が、俺も思わずその場に膝を突く。

「はい、おしまい」

首筋にひんやりとした冷たい感触が当てられている。
視線だけを後ろに回すと、水で構成された槍を握った楯無さんが立っていた。
武器はある。だが、この人がこの状態から反撃を許すような相手じゃないのは分かり切っている。
逆転の手を必死に探すが……見つからない。

「……参りました」

雪片を砂浜に刺し、両手を挙げて降参する。
結局、また一太刀も喰らわせられなかった。……ちくせう。

「あら、でもやっと1分保つようになってきたわね。おねーさん嬉しいわ」

「……そりゃあ、毎日こんな事やってたら慣れますよ」

雪片を回収して、“観覧室”の方に戻ると……みんな凄い顔をしていた。

「あれ、どうしたんだ？」

「……一夏、あんたいつもこんな事してんの？」

信じられないものを見るような目で、鈴がそう尋ねてくる。……まぁ、そうなるな。

1日の締めとして行われる「限りなく実戦に近い形での戦闘訓練」。今みたいに楯無さんとタイマンで戦う事もあれば、誰かと組んだり（簪だったりのほほんさんだったり）する事もある。……でも、1度も勝てた試しがない。

「だが分かるな。こんな訓練を積んでいれば、強くなるはずだ」

箒が納得したようにうんうん頷きながらそう呟く。

いや、俺なんてまだまだだ。簪たちだって俺より強いし、楯無さんは見ての通り。神崎先生なんて、絶対に越えられない壁があるんじゃないかって思うくらいだ。

そう話すと、シャルが怪訝そうな顔になる。

「神崎先生って強いの？」

「「強いぞ」」

俺と楯無さんがハモる。
確かに見た目こそああだけど、目茶苦茶強い。

「分かりやすく例えるとだけど……虚ちゃん、ホワイトボード持って来て」

「はい」

がらがらと虚さんがどこからかホワイトボードを運んできた。……何でもあるんだな、ここ。
楯無さんがマーカーを手に、何かを書き始める。アルファベットに数字に……名前？

「……なんですか、これ」

「強さ表よ。この数値がだいたいの強さを表してると思ってちょうだい」

それを見たセシリアが「何だか頭の悪そうな表ですわ……」と呟く。
と、今度は俺の名前を５００のちょっと上に書く。戦車が３００だから、俺戦車より強いのか？

「まぁ、総合的な強さになんて意味は無いんだけどね。現実にはスカウターなんて存在しないし。……で、あの人はこの辺りかしら？」

８０００のちょっと上、９０００ぐらいのところに「玖楼（本気か怪しい）」と書く。
てか９０００って……イージス艦６隻分！？　それに本気か怪しいって何だよ！　どんだけ規格外なんだよあの人！？

「桁が違いすぎて理解出来ませんわ……」

呆然とそう呟くセシリア。他もそんな感じで、楯無さん達は苦笑いしている。
考えてみると、あの人も結構謎の人なんだよな。
千冬姉や束さんの元担任だって話だけど、どういう経緯で裏の事関連で知り合ったとか、そーゆー事は一切聞いた事がない。
楯無さん達もそうだ。更識家と深い関わりがあるとは聞いたけど、どういう関わりかは知らない。

「うーん、私も詳しく知らないんだけど……更識家の初代当主があの人と因縁深かったって話だけど」

「……え？」

その言葉に、凍った。文字通り凍り付いた。

確か今の楯無さんが１７代目の当主だ。初代当主？　１６代前なんだから、それ何百年前の話？

「あれ？　一夏君、知らなかった？　……簪ちゃん、話してなかったっけ？」

「……うん。話してない」

「ああ、それじゃ仕方ないか。あの人、少なくとも１０００年くらい生きてるから」

せっ……！

「「「「「１０００年んんんんんんん！？」」」」

俺たちの叫びが１つになった。

いやいやいやいや！　１０００年って、どうやって！？　そもそも人間なのか、あの人！？

「うーん、私も詳しく知らないんだけどね。そーゆー薬を飲んだとか、本当は実体化してる幽霊だとか」

「……もう何が起きても不思議じゃないな」

ラウラの言葉に、俺は深く同意した。
織田信長や坂本龍馬と酒飲み友達だったとか言っても、もう驚かんぞ。

第２３話：暗闇の中の激闘【前編】（前書き）

随分遅くなりました。
一応前後に分けましたけど、果たしてどうなるやら。

第２３話：暗闇の中の激闘【前編】

〔Ｓｉｄｅ　Ｅｖａ〕

「じじい、入るぞ！！」

遠慮無く、ばんっと学園長室に押し入る。
そこには呑気に茶を飲んでいたじじいの姿があった。

「ふぉ！？　ど、どうしたんじゃエヴァ」

「どうしたもこうしたもあるか！　あのガキはどこだ！？」

「ネギ君の事かの？　彼なら今、会議に出ているところじゃが……
……」

他の連中も誰もいないし、好都合だ。
勢いを保ちつつ、例の茶々丸の一件について口にする。

「なら奴に伝えておけ。『茶々丸の礼はたっぷりさせてもらう』とな！　干涸らびるまで血を吸い取ってくれる！！」

「ふぉっ！？　ちょ、待つのじゃエヴァ。相手は子供じゃぞ！？」

「問答無用だ！　茶々丸をスクラップ寸前にしてくれたんだからな……今すぐにでも八つ裂きにしてやりたいくらいだ」

殺気混じりにそう言い放つと、さすがのじじいも顔を青くする。
どうやら、私がそこまで怒り狂うとは思っていなかったらしいな。
まぁ、今回のこれはあくまで演技だ。いくら怒り狂っても女子供は殺さん。私が本気で怒り狂っていると思わせるための演技に過ぎん。

「そ、そんな事をすればどうなるか……」

「罪状が１つ増えるだけだ。今更１つ増えたところで変わらん！」

どすどす足音を立てて、そのまま部屋を後にする。
……さて、これでじじいも焦るだろうな。今からすぐにでもぼーやの周囲を固める手筈だろう。
だが、大半の魔法先生は今回の事件の詳細を知らない。神崎の生徒を襲った連中も、タカミチに言われて従っただけのはずだ（詳細を知っていたら動けるはずがない）。
私がぼーやを襲おうとしている事を持ち出し、魔法先生達で警備を固めるはず。しかし、それが緩む日が１つだけ存在する。
その日こそ、私が全ての決着を付ける日だ。……じじいとタカミチめ、目に物見せてくれる。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

「ああ、いたいた。ネギ君ちょっといい？」

「はい、何でしょうか？」

会議が終わった後、神崎先生から声をかけられた。
ちなみに会議の内容は、数日後に控えている計画停電について。
学園都市のメンテナンスのために、何時間か都市内の電気が一切使えなくなるのだとか。……まぁ、アスナさん達によると、一種のイベントみたいな感じらしい。

「はい、ラブレター」

「……は？」

思わず、手渡された手紙をしげしげ見つめてしまう。

「ネギ君もやるじゃないの。生徒からだよ、君のクラスのマクダウェルさん」

「え、エヴァンジェリンさんですか！？」

「うん」

エヴァンジェリンさんからの手紙……内容はラブレターなんかじゃない。
きっと、僕に対する警告か、もしくは果たし状のようなものだと思っていい。

「じゃ、確かに渡したからね」

ひらひら手を降りながら、その場を後にする神崎先生。
周りに誰もいないのを確認すると、手紙を開き、内容を確認する。
中身は魔法使いの手紙でありがちな立体映像を再生するタイプじゃなく、流暢な英語の筆記体で書かれたものだった。

『ネギ・スプリングフィールド。まず断っておくが、私はお前が茶

々丸を襲ったとは思っていない。茶々丸の記録映像にもお前が何かした様子は無かったし、そこまでバカな事をするような奴ではないとは分かっている』

……よかった。エヴァンジェリンさんは僕が犯人じゃないって分かってくれてるみたいだ。

『今回の事件は別の人間が仕組んだ物だ。詳しくは話せないが、私はその犯人の正体や目的は分かっている』

「ッ！」

やっぱり……今のところ1番怪しいのは高天原先生だけど、いったい何で……。

さらにそのまま読み進める。

『だが、私が真相に至っている事を奴らに知られるわけにはいかない。それに私にも立場というものがある。そこでだが計画停電の日、お前に一対一の真剣勝負を申し込む』

「し、真剣勝負……」

『いいか？　奴らに気づかれないために、私は「従者が襲われ怒り狂っている」演技をする。決して気圧されるな。お前も本気で来い』

本気の、エヴァンジェリンさん……。
うう、ちょっと怖いけど、それでも本物の魔法使いと戦う事が出来る。それはこれとない貴重な機会だ。

『教師と生徒という関係はその場では無用だ。１人の魔法使いとして、かかってこい。エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル』

「……」

『追伸：この手紙は読み終えたらすぐに処分しろ』

手紙を小さく折りたたむと、掌の上に置く。

「プラクテ・ピギ・ナル“火よ灯れ”」

掌の上で小さな火が立ち、手紙が燃える。
これで大丈夫。他の誰かに読まれる事は無い。……後は、アスナさんに事情を説明して、エヴァンジェリンさんと戦うだけ。
そして、その日を迎える事となる。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｔａｋａｍｉｃｈｉ〕

女子供は殺さない。
それが吸血鬼となって数百年間、エヴァが保ち続けたポリシーだ。
しかし、これは完全に僕の誤算だったとしか言い様が無い。何故なら……。

「マズイぞ、タカミチ。エヴァは本気じゃ」

学園長の話によると、茶々丸君の件でエヴァは完全にキレているとの事。
そしてその対象……すなわちネギ君を完膚無きまでに叩きのめし、死ぬまで血を吸うと豪語したらしい。
これはマズイ。確かにネギ君に実戦経験を積ませる事が目的だけども、これはやりすぎだ。ネギ君が死んでしまっては元も子もない。

「恐らく、エヴァは停電の時を見計らって事を進めるつもりじゃ」
「なら、僕がネギ君のガードに付きます。最悪、ネギ君を守りに入りますよ」

もしかしたら直前で踏みとどまるかもしれないけど、とにかく僕がネギ君達の間に割って入れば、何とかなるだろう。
悔しいが、今の僕では本気のエヴァには敵わない。しかし、時間稼ぎくらいは出来る。
停電が復旧するまで時間を稼げば……エヴァは再び封印される。

「うむ。頼んだぞ、タカミチ」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｒｉｎ〕

どうやら神崎先生や楯無さんが睨みを利かせているらしく、それで高畑先生があたし達に近づいて来るような事は無かった。
これは後で聞いた話なんだけど、元々楯無さんが麻帆良にいる事で、麻帆良学園にある種の緊張感を与えているらしく、今回の事でも彼女があたし達の後ろにいると思わせているのだとか。

「ま、それはいいんだけどさ」

あたしとしてみれば、あんな事が起きないのであれば問題ない。
でもまぁ、目標としては絡まれても自分の力で何とか出来るってところまで行かないと。
……でもさ。

「……これは、キツ過ぎるんだけど……」

神崎先生の……何とか魔法球。状況が状況なので、あたし達も鍛えてもらえるようになり、こうして訓練を重ねている。
でもまぁ、とにかくキツイ。息も絶え絶えに全員倒れ伏してる。あたしもそれなりに身体は鍛えてる方だと思ってたんだけど……。

「ほれ、どうした。もう終わりか？」

あたし達の前には、ぴんぴんしてる瑪瑙さんの姿が。
あの人が今日の修行相手。瑪瑙さんの攻撃を避け続けているわけ。
ある程度手加減してくれてるから、まだ避けられる。それでもかなりキツい。てか、どんだけ強いのよこの人。

「どんどん行くぞ」
「ッ！　全員回避――――！！！」

あたしの声に従い、さっと全員がバラバラの方向へと逃げる。
何度も繰り返したので、とりあえず逃げ足だけは速くなった気がする……。

「……狐火」

その瞬間、物凄い炎が修行場全体を包んだ。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ａｓｕｎａ〕

「ネギ、本当にいいのね？」

「はい。しっかり考えて決めた事ですから」

最後の確認を取ると、ネギもそう答える。
エヴァちゃんとの真剣勝負。……まぁ、どっかのアホが茶々丸さんの事に絡んでるみたいなんだけど。
ネギは誰の仕業か気づいてないみたいだけど、私は何となくそれが誰か分かるような気がする。

（……何やってんのよ、ホントに）

どうせ、タカミチや学園長なんでしょうね。

これまでの私の環境についても、今更だけど疑問が出てきてしまう。
西の長……詠春の一人娘である木乃香と同室にされてて、しかもそこに魔法使いのネギを居候させる。
……これ、隠すつもり無いでしょ？

（大方、エヴァちゃんとの実戦を積ませる事が目的なんでしょうけど……）

下手したら茶々丸さんは死んでた。
もしそうだったらエヴァちゃんは怒り狂ってただろうし、ネギだって殺されていたかもしれない。
いや、もしかしたら討伐隊が編成されて、エヴァちゃんが討伐されるかも……。

「アスナさん？　どうかしたんですか」

「……ううん、何でもないわ」

とにかく、ネギはエヴァちゃんと戦う事を選んだ。
戦わなくちゃ分からない事だってある。言葉だけでは伝わらない事だってある。

「でも兄貴、本当にいいんですかい？　向こうだってもしかしたら、応援を呼んでくるかもしれないですぜ」

「カモ君、それは無いよ。エヴァンジェリンさんは真剣勝負だって言ってたんだよ？」

「いやいや。備えはしとくべきだって。だからここはやっぱり姐さんがブチュッと仮契やくッ！？」

いらん事を言ったオコジョをブチッと潰しとく。
そりゃあ、茶々丸さんが戦うんだったら、仮契約も考えたわけだけど……。

「ま、私も行くけど、あくまで見届けるだけだからね」

「はい」

そう言いながら、橋を進む。
麻帆良大橋。麻帆良と外部を繋ぐ唯一の通路だけど、今日は計画停電だから通行止めになっていて、人影は一切ない。
しかし、そこに私たちを待っていたかのような人影が１つ、立っていた。

「よく来たな、ぼーや」

腕を組み、仁王立ちで待っていたのは黒いマントのエヴァちゃん。
……どうでもいいけどエヴァちゃん、その下って下着でしょ？
正直、露出狂っぽく見えるけど。

「うるさい！　それより貴様は何だ、神楽坂明日菜」

「私もオコジョもただの立ち会いよ。手を出すつもりは無いけど、度を超えようとしたら止めるから」

「……ふん、まあいいだろう」

エヴァちゃんがネギに向き直ると、ふっと表情を崩す。

何て言うか、威厳に充ち満ちている。私だって実年齢結構行ってるけど、ほとんど寝てたようなものなのよね～……。

「私が生徒だという事を忘れ、本気で来るがいい。ネギ・スプリングフィールド」

「……はい！」

さてと、そろそろ神崎先生も動く頃かな？

第２４話：暗闇の中の激闘【後編】

（マズイな、もう始まってしまっている）

タカミチは１人、持ち場を離れて奔走していた。
麻帆良学園の計画停電は、麻帆良全域を覆っている学園結界の消失を意味している。
その間、外部からの侵入者の攻撃を守るのも魔法先生、魔法生徒の役目の１つである。
しかしタカミチはこの日、独断（と言っても学園長了承の上だが）で持ち場を離れ、現在ネギとエヴァが戦っているであろう麻帆良大橋へと向かっていた。

（急がなければ、エヴァはネギ君を殺す。何としてでも止めないと……）

彼は直接エヴァの怒りようを見たわけではなかったが、彼女と長い付き合いの学園長が本気だと言っていたほどだ。
ここでエヴァを止めなければ、ネギ・スプリングフィールドという至高の存在は失われてしまう。
ただそれだけを頭に、タカミチは必死に麻帆良大橋へと向かっていた。
が、その時だった。

「ッ！？」

咄嗟に何かを感じ取り、その場で足を止める。
タカミチが視線を上へ向けると、そこには1人の青年の姿があった。
宙に浮く黒いコート姿の青年。その顔にはまるで道化のような仮面が被さっており、素顔は伺えない。
しかし、タカミチは彼に見覚えがあった。

「まさか……」

そんなタカミチの驚愕など気にも留めず、彼は掌に宿した炎をタカミチ目がけて放つ。
炎の弾丸はタカミチへと襲いかかるが、逆に居合い拳でそれを相殺する。
炎の攻撃。それに感じ続けている威圧感。タカミチの抱いていた疑問は一気に確信へと変わった。

「“不死鳥”……っ！」

かつて、“紅き翼”が最も苦戦し、何度も辛酸を舐めさせられた敵の名を呟いた。

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈｉｆｕｙｕ〕

“不死鳥”
それがかつての神崎先生の通り名だ。
そう呼ばれるようになったきっかけは、その背に宿すという炎の翼。
そしてどんな攻撃を受けても決して滅びる事の無い不死身の生命。
さらにあらゆるものを焼き尽くすほどの劫火を自在に操る事から、
そう呼ばれるようになったと聞いている。

「あの人、そんなに凄い人なんですね……」

「とは言っても、当時は私も子供だったからな。全て聞いた話に過ぎん」

先生自身、曖昧に話をはぐらかせてしまうので、噂の真偽を尋ねられた事は無い。

しかし、否定もしなかったので幾分かは本当なのだろう。

（未だにあの人がどういう存在なのか分からん）

元々は人間だったらしいが、そこまでしか分からない。
酒の席で、「蓬莱の薬で不老不死」と言っていた記憶もあったが、あの時は私も先生もしこたま酔っていたため、真偽は不明だ。
……まぁ、「宮本武蔵とガチでやり合った事がある」や「坂本龍馬と飲み友達だった」という話はあり得そうで怖い。さすがに「天海僧正の正体はボク」というのは無いと思うが。

「……それにしても、あっちも凄いですね」

山田君が目を向けているのは、麻帆良大橋の方。
現在、闇の福音とネギ少年が激戦を繰り広げているが……確かに凄い。
吸血鬼の放つ魔法の矢を、ネギ少年も魔法の矢を放って相殺している。手加減している感は否めないが、それでも才覚は本物だと認めざるを得ない。

「……英雄の息子、か」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

強い。
数百年を生きる最強の魔法使い、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。
僕もどうにかついて行けている状態だけど、これは間違いなくエヴァンジェリンさんが手加減している事も否めない。

「ははははっ、なかなかやるじゃないか。ヤツの息子なだけある」

エヴァンジェリンさんの言葉に、反射的に拳を握りしめる。
ナギ・スプリングフィールド。２０年前に起きたという戦争を終わらせた“英雄”の名。僕はその英雄の子供として生を受けた。
確かに誇るべき事なのだろう。父さんの成した事は歴史に残るほどの大業なのだから。……でも、僕は。

「……あんな人、父親だと思った事ありません」

そう若干の苛立ちを込めて呟くと、意外そうな顔でエヴァンジェリンさんが僕を見つめる。
確かに凄いと思う。
だけど、その英雄が僕に何をしてくれた？　何もしてくれなかった。
父親らしい事もしてくれなかった。
僕の記憶に父さんの姿は無い。おじいちゃんに連れられて、表に出ることの出来ない母さんと初めて会ったのも、あの事件の後。
父さんが僕に与えたのは、父親似だというこの容姿と膨大な魔力、そしてこの杖。
そんな僕の感情を読み取ったのか、ふっとエヴァンジェリンさんが愉快そうに表情を歪める。

「……なるほど。どうやらお前は、ヤツよりも私に近い存在のようだな」

「え？」

「いや、その話は今度にしよう。……そろそろ決着を付けるか」

そう言うと、エヴァンジェリンさんから凄まじい魔力が放たれ始める。
ここで終わらせるつもりだ。下手をしたら……本当にここで僕が終わるかもしれない。
なら今現在の僕が使える、最強の魔法。それを、使う。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！」
「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！」

僕が使うのは雷属性の高位魔法『雷の暴風』。
吸血鬼の真祖であり、最強クラスの魔法使いであるエヴァンジェリンさんに通用するか分からないけど……今の僕でエヴァンジェリンさんに勝てるとしたら、これしかない。

「来れ雷精、風の精！」
「来れ氷精、闇の精！」

その詠唱を聞き、一瞬僕の中に戸惑いが生まれる。
エヴァンジェリンさんが詠唱しているのは、氷属性同系統の高位魔法『闇の吹雪』。
『雷の暴風』も『闇の吹雪』も、同系統の呪文。同じ規模の呪文がぶつかり合えば、強い方が勝つ。

「雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐！」

「闇を従え、吹雪け常夜の氷雪！」

間違いない。正面から撃ち合うつもりだ。
なら、僕も全力で……！

「『雷の暴風』！！」

「『闇の吹雪』！！」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

飛んでくる拳圧を躱しながら、適当に炎を放つ。
当然だけど、威力はかなり手加減してある。ここで焼き殺したら面倒な事になるから。

「くっ……」

高畑の顔には焦りが浮かび始めている。
ここで足止めされている間にも、ネギ君達の戦いは進む。早く止めなければ……とでも思っているんだろう。
まぁ、エヴァンジェリンとも打ち合わせてあるし、ちゃんとキレイに収まるようにしてあるので問題はない。
だが事情を知らない（と言うより、盛大に勘違いしてくれている）彼らとしては、焦らざるを得ない。何せ、エヴァンジェリンはネギ君を殺そうとしている（と思い込んでいる）のだから。

（……確かに強い）

高畑は咸卦法を使っている。
咸卦の気が加わった無音拳は、威力・スピード共にかなりのものだ。
おそらくだけど、元々の使い手……ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグを越えているだろう。……だけど、

「今の君は、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグには及ばない」

「ッ！？」

何故なら、１番大切なものが欠けているから。
かつての“紅き翼”にはあって、今の高畑には無いもの。
それが２つの存在の違いを決定づけている。
そう指摘した瞬間、確かに高畑の顔には動揺が浮かんだ。そこに大きな隙が生まれる。

「しまっ……！」

一瞬で懐に飛び込み、拳で顎を打ち砕く。
腹部に強い打撃を受ければ、痛みと共に意識を失う。
しかし、顎に強い打撃を受ければ、痛みを感じる事なく意識を失う。
彼ほどの実力者ならば、これくらいの一撃で意識を失う事は無い。
だけど、大きく体勢を崩す。
身体がぐらついた瞬間を見計らい、炎を宿した回し蹴りをお見舞いする。

「ぐ……」

一撃だけではない。まるで円舞を踊るかのように、短い間隔で数撃

叩き込む。
手加減しているとはいえ、かなりの威力なのは言うまでもない。マトモに受けた高畑はその場に倒れ込む。
死にはしないだろうけど、しばらくは意識が戻らないだろう。

「これで、よし」

高畑を仕留めるのは難しくない。しかし、そうしてしまうと厄介な事になりかねない。
だから、ここで彼を気絶させる事が重要になってくる。

「そろそろ向こうも終わったかな？」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ〕

『雷の暴風』と『闇の吹雪』。
どちらも高位の攻撃魔法だ。正面から撃ち合えば、術者の力量がその威力にプラスされる。
最終的な決め手は、練度の違い。１０歳のぼーやと数百歳の私。……まぁ、当然の摂理だな（ここで負けたら情けなさ過ぎる）。
威力が弱まっていたとはいえ、魔法の余波で吹き飛ばされたぼーや。立ち上がろうとしているが、さすがにもう体力の限界だろう。

「私の勝ちだな、ぼーや」

私がそう言いぼーやの前に立つと、静かに目を閉じて頷く。
どうやら、現実を受け入れるだけの認識力はあるようだな。

「……はい、僕の負けです」

しかし……今の戦い方、それに魔法の使い方からするに、恐らく全て我流で戦い方を身につけたに違いない。
じじいの話だと、昨今の魔法学校で戦闘法などほとんど指南しないようだし、『雷の暴風』についても独学で覚えたのだろう。
１０歳にしてここまでの力を独学で身につけるとは……。

「惜しいな」

「……確かに拮抗してたみたいですけど、ほとんど手加減してもらってましたし」

「いや違う。私が惜しいと言っているのは、その才覚の事だよ」

どうやら、ぼーやは勝負の事を「惜しい」と思っていたようだな。指摘すると、悔しさで満ちていたそれが「え？」という顔へと変わる。

「それほどの才、理想的な師の下で鍛えられれば、間違いなく有数の使い手となり得る」

私はしゃがみ込むと、ぼーやの顎を持ち上げるようにして私と視線を合わせる。

「ぼーや、私の弟子にならないか？」

番外編：不死鳥とリリカルな戦争（前書き）

と言うわけで、番外編をちょこっと書いてみました。
本編から数年後、玖楼達が対面する新たな事件。
「リリカルなのは」クロスで、捏造や劣化、ヘイトが含まれますのでご注意を。

番外編：不死鳥とリリカルな戦争

『――――これをアンタが聞いてるって事は多分、私はこの世にはいないって事なんでしょうね』

「……」

『ここには私の掴んだ“真実”がある。3年前の事件の真実もここには隠されてる。……アンタにとっては毒でしかない代物でしょうけど』

投影される映像に、少女はただ嗚咽を漏らさずにいるだけで精一杯だった。

『アンタがこれをどう使うかは任せる。でも、目を背けたっていい事は何も無い。……そりゃ、私だって見て見ぬ振りするって選択肢もあったけど』

「……じゃあ、どうしてティアは背けなかったの？　死ぬって分かってたんでしょ？」

録画された映像だと分かっていても、彼女はそう問いかけた。

『だってそんな事したら、兄さんに一生顔向け出来なくなるし』

相棒の言葉に、彼女はハッとなった。
全てはそこから始まった。そう、何故忘れていたんだろうか。

『じゃあね、スバル。……私はアンタを信じてる』

「……ティア」

この数日後、ティアナ・ランスターの死が報道される。
そして時を同じくして、スバル・ナカジマが本局に保管されていた“あるデバイス”を持ち、行方をくらます。

「これで今月に入って9件目です」

いつものように学園長室を訪れた千冬が書類を提出する。
書類に目を通した玖楼が深くため息を吐く。

「……またか」

やむを得ずに学園長という似合わない役職に就いてはいるが、責任感は強いのでやる事はやっている。
そんな彼らを悩ませている事が１つ……世界各地で起きている謎の襲撃事件だ。
襲撃犯は単独であったり複数であったりするが、襲撃される場所はどこも魔法関連の要所。それもかなり特殊な魔法具を取り扱っていたり、安置していたりする場所だ。

「いったい何者なんだ？　その時空管理局とやらは」

実はつい先日、千冬自身もその襲撃犯と遭遇していた。
ちょっとした用事で九州に行った際に襲撃に巻き込まれ、その犯人の１人……白いコスプレのような服を身に纏った女性と相対した。
強力な魔力砲撃に少々手こずったものの、１度見切ってしまえば問題無し。捕縛に成功したが、仲間と思われる金髪の女性の乱入によって取り逃がしてしまった。

「分かりません。そんな組織、聞いた事もありません」
「だよね。唯一の手がかりは……」

書類に添付されている写真に収められた、２名の女性。
１人は彼女と相対した白いコスプレ服の茶髪女性。顔立ちからするに日本系の血が入っていると見受けられる。
もう１人は乱入した金髪の女性。美人ではあるのだが……何と言うか、歳を考えて服を着て欲しいと思う。
現状において「時空管理局」という組織名。そしてこの２名が手がかりとしか言い様がない。

「ま、そっちはこっちで調べて見るから、西の方も警戒するようあの子達に伝えてくれる？」

その後、あっさりするほどすぐに女性の身元が判明する。
茶髪の女性の名は『高町なのは』。海鳴市在住の現在２１歳。
金髪の女性の方は『フェイト・Ｔ・ハラオウン』。同じく海鳴市在住の２１歳。
この両名は学生時代からの友人らしいが、中学卒業後は進学せず、どこかへ就職したという情報が入っている。
しかし玖楼が調査した結果、彼女達が就職したという企業は存在せ

ず、現在どこにいるのかもあやふやなものだった。

「……どーなってんだか」

調査結果を手に、困った様な顔をしている玖楼。
おまけにだが、フェイト・T・ハラオウンの戸籍には改竄された形跡があり、9歳以前の彼女の過去がまったく辿る事が出来ない。
まるで、そこに突然現れたかのように、だ。

「ま、とりあえず現地を調査させますか」

玖楼は机の上に置かれていた電話から受話器を掴むと、ある番号をプッシュする。
通話の相手は自分直属の調査員の1人。今回のような事態にはうってつけの人物だ。

「あ、もしもし？　神楽坂さんのケータイですか？」

番外編：不死鳥とリリカルな戦争（後書き）

ネギまサイド：本編から数年後。紆余曲折の末、何故か玖楼が学園長職に。
なのはサイド：ＳｔＳから2年後。ティアナ死亡（？）、スバル脱走。

完全にＩＦの話なので、本当に本編がそんな風になるのかは分かりません。
あくまでネタですから、そのつもりで楽しんでくださいね。

第２５話：これからのおはなし（前書き）

ちょっとgdgdかな？

第２５話：これからのおはなし

〔Ｓｉｄｅ　Ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ〕

さて、その後の話をさせてもらおう。
まずぼーやの事だが、私から持ちかけた「弟子にならないか」という話は一旦保留という事になった。
……まぁ、いくら何でも悪の魔法使いだしな。そんな相手の弟子になる事など、即座に決められるものではないし、その辺りは了承した。

「マスター、お茶です」

茶々丸が、私の前に湯飲みを置く。
超とハカセの手によって、茶々丸は完全に復活した。
ハカセ曰く「もう前みたいには行かない」らしく、部分各所の強化に加え、いくつか新機能も搭載されているようだが……どう変わったのか見た目では判別出来ない。
以前、超が「ドリルは浪漫ネ」とか言っていたのが気になるが、頼むからドリルだけはやめて欲しい。

「しかし驚いたぞ。神楽坂明日菜、まさかお前が関係者だったとはな」

「まぁ、色々あったのよ」

今、私が客人として迎えているのは神楽坂明日菜。
詳しい話は知らんが、何でも魔法世界の出身らしい。それも一時期“紅き翼”とも行動を共にしていたそうだが、まさか記憶を消されていたとは（一気に雰囲気が変わったのには、さすがの私も驚いた）。

「それで、タカミチとじじいはどうなったんだ？」

神崎の話だと、相当詰め寄られたと言うが？

「それなんだけど……」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｔｈｅｒ〕

近衛近衛右門は固まっていた。
その原因は目の前の魔法先生達である。誰もがこれ以上ない不信と怒りの目をしている。
一同を代表し、大学部の明石教授（無表情なのが怖い）が前に出る。

「……学園長、説明していただけますか？」

「う、うむ」

「何故、高畑先生が持ち場を離れ、別の場所へ向かったのか」

タカミチ・Ｔ・高畑は麻帆良学園における最高戦力の１人である。
その実力故に海外出張が多いが、計画停電の際の防衛戦では戦力の要とも言うべき存在ともなる。
が、その彼が先日の停電において、勝手に持ち場を離れた。その上、何者かにやられた状態で発見された。
……もちろん、別口の侵入者を察知して撃退に向かったのなら問題にはならない。しかし……。

「ネギ君と“闇の福音”の対決とはどういう事なのですか！！」

だんっ、と机を叩いたのはガンドルフィーニ。
そう。そんな事、彼らは何一つとして聞かされていなかった。
最初は別口の侵入者の撃退に向かったのだろうと思っていたが、観測班からの情報を聞いて唖然となった。

『麻帆良大橋にて、ネギ・スプリングフィールドとエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが戦闘中』

その理由はおそらく、エヴァンジェリンがかつて“千の呪文の男”に敗れ、この麻帆良の地に括られた事だろう。
15年も封印されていて、恨み辛みが積もらないはずがない（いくら悪の魔法使いでも、さすがに12年ほったらかしは気の毒だと皆思っていた）。
しかし、誰かが気づいた。ちょうど高畑の移動ルートと倒れていた地点から、もしかして麻帆良大橋へ向かおうとしていたのではないかと。
もちろん、それでも問題は無い。2人の激突を止めんとしたのは分かる。
ここで問題となっているのはそのもうちょっと先の事だ。

「“闇の福音”の証言はどういう事ですか？　『学園長に頼まれた』と言うのは」

「む、むぅ……」

元々、桜通りの吸血鬼から一連の流れは全て、学園長がお膳立てしたものだ。
しかしエヴァンジェリンとて数百年を生きる存在。長く生きている分、知恵も回る。
学園長がエヴァンジェリンの家を訪れ、それに関連する話をした際、彼女は万が一の保険としてその会話の一部始終を茶々丸に録音させていた。
「そこまでせんじゃろ」と思っていた学園長は、盗聴こそ警戒していたが、話し相手を警戒せず、洗いざらい全て録音させてしまっていたのだ。

「録音については改竄された形跡はありません。つまり、あれは全て学園長の企てによるものという事がはっきりしています」

仮に、全て学園長がお膳立てしたものだとしよう。
それならば「ネギ・スプリングフィールドの修行の一環」という話は分かる。さすがにやり過ぎである感は否めないが……。
その場合、当然彼の身の安全は保障される。ならば何故、高畑が彼らのところへ向かおうとしていたのか。
魔法先生達もそこだけが分からない。だからこそ、こうやって説明を求めているのだ。

「そ、それはのう……」

対する学園長もどうにかこの場をやり過ごす術を練っていた。

『エヴァがやり過ぎるかもしれんから』と言えば、『じゃあ何でそんな事考えたのか』という話になってしまう。
かといって全て正直に説明すれば、茶々丸を襲撃させた事も発覚してしまう。
……この状態が随分と長引くのは、目に見えていた。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ａｓｕｎａ〕

という感じになったという事をエヴァちゃんに説明すると、「いい気味だ」と言わんばかりに唇の端を歪めた。
……まぁ、私もほとんど同意見だったから何も言わないけど。

「それよりエヴァちゃん、本気なの？」

「何がだ」

「ネギを弟子にするっていう話」

そう言うと、「ああ」と納得したように小さく返した。
立ち会いしてて、私も小動物も唖然としたもの。
そりゃあ、ネギの才能が凄いって言うのは何となく分かるけど、エヴァちゃんがそこまで言うんだ～って。

「本気だ。しかもあれは私に近い」

「どういう意味？」

「では逆に聞くが、あのぼーやがナギと同じ道を征けると思うか？」

「思わない」

だってさ、ナギとはタイプが違いすぎるし。
どっちかって言えば母親……アリカ似よね。理知的っていうか、少なくとも考え無しじゃないし。
だからナギと同じになれるかって言われても、絶対に無理だって言える。

「そういう事だ。あれは光（ナギ）と闇（わたし）、どちらかと言えば間違いなく闇に近い。あれは相当歪だぞ？」

くつくつと愉快そうに笑うエヴァちゃん。

……まぁ、確かに普通の子供じゃないっていうのは認めるけど。

１０歳だって言うのに頭は回るし、怖いくらいに常識も弁えてる。

たまに子供って事を忘れる時もあった。

「まぁ、ぼーや自身に選ばせるさ。どちらにせよ他の連中がうるさいだろうしな」

そりゃあ、エヴァちゃんって一応“悪の魔法使い”だもの。

いくら大人しくしてるとは言っても、エヴァちゃんは元６００万ドルの賞金首。「いずれ何かしでかすのでは？」と危険視する人だっているはず。

そんなエヴァちゃんと“英雄の息子”であるネギが接触するのを快く思わないだろうし。

ちゃちゃっちゃ～らら～、ちゃらららら～

と、若干気の抜けたメロディが響く。これ、着メロ？

「おっと、すまんな」

そう言って、エヴァちゃんが携帯を取り出す。

へ〜、エヴァちゃんも携帯持ってるんだ。ちょっと意外。

「私だ。……なんだじじいか。あの事なら、私は聞かれたから答えたに過ぎん。元はと言えば貴様が悪い」

どうやら相手は学園長らしい。
吸血鬼事件についての話？　そりゃあ、話を持ちかけたのは学園長なんだからねぇ……。

「何、違う？　なら何の話だ。……何だとッ！？」

驚愕と言わんばかりの声と上げ、勢いよく立ち上がるエヴァちゃん。
え、どういう事。何があったの？

「……分かった。私もそっちへ行く」

それだけ言うと、苦々しい顔でエヴァちゃんが携帯を仕舞う。
いったい何があったの？　相当重たい話みたいだけど……。

「神崎玖楼が何者かによって襲撃された」

「え……？」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｉｃｈｉｋａ〕

千冬姉からその連絡を受けて病院に向かうと、そこには既に千冬姉にもう１人、見覚えのある人の姿があった。
背丈こそ小柄だが、平均を遥かに上回る豊満な胸。それに見ようによっては俺たちと同年代に見間違えられる童顔。千冬姉の後輩の……名前は確か、山田真耶さん、だったっけ？
俺たちに気づいて、ぺこりと頭を下げた瞬間、そのたわわな果実に思わず目が……。

「いづっ……！」

また脇腹を抓られた。
隣にいるのは、たまたま一緒にいて、連絡を受けて駆けつけた鈴。
……頼むから、つや消しの目でぶつぶつ言うのはやめて欲しい。
「やっぱり胸なの？」って、怖いから。
まぁ、気を取り直して……千冬姉、いったい何があったんだ？

「分からん。私も瑪瑙さんから話を聞いて駆けつけたばかりだからな」

でも、神崎先生ほどの人がやられるなんて……。

「とにかく、中に入るぞ」

こんこん、と千冬姉が病室のドアを叩く。
中から「どうぞ」という声が聞こえ、確認して中に入る。

「あ、いらっしゃい」

俺たちを出迎えたのは、ベッドの上であぐら掻いて平然としてる神崎先生に、椅子に座る瑪瑙さん。
伏せってるのかと思っていただけに、俺と鈴は思わずズッコける。
……あれ、俺たちだけ？

「やっぱり、そうでしたか」

若干、呆れの入った声でそう呟く千冬姉。
よく見ると、真耶さんもそんなに驚いてない。もしかして、知ってたのか？

「これを知ってたって言うより、神崎先生がそういう人だって知ってただけですね」

そう言えば、千冬姉の後輩だったよな。
それなら、神崎先生の教え子になるんだろうし、先生と面識があってもおかしくない。
……もしかして、裏の関係者？

「ああ。彼女は現在、政府直属のとある機関に身を置いている」

へ～、見かけによらず凄い人なんだな。
何度か面識があるけど、何も無いところで転んだり、度々ボケた発言があったり、所謂ポンコツっぽいところがあった気がするけど。

「それはともかく、いったい何が？」

「あ〜、ちょっとね。腹立つ出来事があったって言うか……」

千冬姉が尋ねると、だんだん不満そうな様子を表していく神崎先生。ここまで機嫌が悪いところを見るのは初めてかもしれない。割合、温厚な人なわけだし。

「実は……」

第２５話：これからのおはなし（後書き）

さて、玖楼はいったい誰の襲撃を受けたのでしょうか？
ヒントは原作キャラ。そして、これまで名前だけは登場しています。

第２６話：人妻は見た！　女子中学生殺人未遂事件（前書き）

と言うわけで、答え合わせの時間です。

……まぁ、だいたい予想は付いてるかと思いますが。

第２６話：人妻は見た！　女子中学生殺人未遂事件

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

その日、久しぶりの休日だという事でボクは家族サービスに勤しんでいた。
詳しく言うと、瑪瑙とデートだね。麻帆良はこういう時便利だよ。
元々の始まりはその日、私服姿のネギ君と近衛木乃香に遭遇した事。
まぁ、遭遇したと言っても、ちょっと話してお茶して、それで別れただけだけども。
そして帰り道、瑪瑙と腕を組んで歩きながら視線で会話を交わす。

（いるね）

（うむ。いるな）

ボクも瑪瑙も、木陰から殺気を感じ続けている。
その殺気が誰のものかは想像が付く。何せ、同じものを学校にいる時にも感じていたから。……ちょっと教師としてお説教してやるか。
その意を込めて視線を向けると、瑪瑙もそれを理解したのか、頷き返してボクから離れる。

「すまぬ、さっきの店に忘れ物をしたようじゃ」

そう言うと、来た道を戻っていく。
……さて、これで誰もいなくなった。おまけにここには人通りがほとんど無い。

「……で、いつまで隠れてるつもり？」

そう、木陰に向かって呼びかける。
気配は消えてても、そのだだ漏れの殺気はどうかと思うけど？　それじゃあ二流……いや、三流以下だ。

「さっさと出てきたら？　いるのは分かり切ってる」

観念したのか、渋々姿を現す女生徒が１人。
女子中等部の制服に身を包み、手には竹刀袋と思わしき細長い袋。
そしてその目は殺気混じりにボクを睨み付けている。
彼女の名は桜咲刹那。３－Ａの生徒で、京都神鳴流に属する、護衛失格もいいところのダメ剣士だ。

「同性とはいえ、クラスメイトのストーキングはどうかと思うけど？」

「……何故、私に気づいた」

あのさ、担任じゃないとはいえ、一応教師だよ？
まぁ、上辺だけの敬語なんて聞きたくないし、特に注意しないけどさ。

「これでもそーゆーのには敏感な方なんでね。とりあえず、何でこそこそストーカーなんてしてたのか聞かせてもらえるかな？」

「やはり貴様！　西の回し者か！！」

……はい？

「いや、何でそんな結論に至るわけ？　確かに昔、京都の方には住んでたけど」

「黙れ！　また性懲りもなくお嬢様を狙うとは……許さん！！」

竹刀袋から野太刀を取り出し、ボクに向けて斬り掛かってくる桜咲
刹那。
迫ってくる彼女を冷めた目で眺めつつ、ここでどんな風にすべきか
考える。
実際、ひよっ子剣士の攻撃なんて受けても死にはしないけど、斬ら
れたら血だって流れるし、痛みだって感じる。
かといって、軽々と避け続けて反撃するってのも、余計に「只者じ
ゃない」って思われちゃうかもしれないし、それはまた別の意味で
面白くなくなる。
……よし、ここはあれで行こう。

「うおっ！？」

彼女の攻撃を「紙一重」で躱し、ちょっとオーバーなリアクションで驚く。

「そ、そんな物騒なもの振り回すな！　殺すつもりか！？」

「問答無用！！」

聴く耳持たずと言わんばかりに、剣撃を撃ち込んでくる桜咲刹那。
それを敢えて、「どうにか紙一重で」躱し、服はボロボロに、軽く切り傷を負う程度に抑える。
さらに壁際にわざと追い詰められたような形を取り、怯えた表情を浮かべる。

「もらった！！」

そのまま野太刀が真っ直ぐ振り下ろされ、袈裟切りに斬られる。
身体に鋭い痛みは走るけども、生憎「死ねない」身体だし、こういう事は何度も体験済みなので意識は飛ばない。
そのまま前のめりで倒れ込みながら、意識を失ったフリをする。……さて、そろそろかな。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

絹を引き裂くような女性の声が響く。
桜咲刹那はそれにハッとなると、即座にその場から飛び退き、路地を通りながら逃げていく。
……それにしても、演技上手いね。

「これでも猫被るのはお手の物じゃからの」

そう言いながら、近づいて来たのは瑪瑙。
さっきの悲鳴は瑪瑙のもの。一般人が近づいて来たら、さすがのあの子も逃げざるを得ないでしょ。……これで一般人も口封じに斬り捨ててたら、対応も随分変わっただろうけど。

「しかし、あれでも近衛木乃香の護衛じゃろう？　話も聞かずに斬り掛かるのはどうかと思うんじゃが」

「……だよね」

ボクが何か言おうとしても「問答無用！」だったもん。
思うに、桜咲刹那が近衛木乃香の護衛となったのは、実力じゃなくて近衛木乃香の友人という立場が大きい。
幼少期からの友人なら、当人に気負わせる事なく側にいる事が出来る。これが同性とはいえ、年上の人間だったらやはり気を遣わせて

しまうかもしれないし。
でも、贔屓目に見ても彼女が護衛としての任を果たしているとは言えない。あれじゃただのストーカーだ。

「……そなたの事じゃから、相当えげつない手でも考えておるのじゃろう？」

「えげつないとは失礼な」

ちょっと虐めるだけだよ。
あ、それより救急車呼んでくれる？　ボク、しばらくの間入院するから。

「何を……ああ、じゃから傷を治しておらんのか」

「死ねない」身体……まぁ、厳密に言えば死ぬ事も出来るけど……なだけに、自動的に傷は癒える。
でも、今は敢えて傷を治していない。意識すれば、傷の治りを止める事も出来る。
一応出血だけは抑えてるけど、傷は修復していない。病院に運ばれて傷が治ってたら明らかにおかしいでしょ？

「では、妾は『瀕死の夫を見つけ、取り乱しておる人妻』を装うとするか」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｇａｎｄｏｌ〕

久しぶりの休日。
普段、仕事が忙しくて家族と触れ合う機会は無いが、その日はしっかり娘とも触れ合う事が出来た。
妻は一般人だが、私の仕事についても理解を示してくれている（危険な事はしないで欲しいと言われた事もあったが）。
そんな休日の夜、いきなり招集を受けた。いったい何だと思いつつも学校に赴き、話を聞いて吹っ飛んだ。

「神崎先生が襲われた！？」

「ええ……」

気まずそうにそう返す葛葉先生。
何でも、F組の担任教師である神崎先生が何者かによって襲われ、重症を負ったという。
現在、麻帆良内の病院にて治療を受けているが、意識不明の状態が続いているとの事。

「しかし、何故一般人の神崎先生が……」

そう、瀬流彦君の言うとおり、神崎先生は一般人だ。
我々魔法先生や魔法生徒が襲われるならまだしも、一般人である神崎先生が襲われる理由が分からない。
単なる通り魔によるものなら、魔法先生を集めたりはしないだろう。

「それなんじゃが、事件に遭遇した神崎先生の奥方によると、犯人は麻帆良女子中学の制服を着ておったそうじゃ」

「なっ……！？」

学園長の言葉に、私たちは息を呑んだ。
ま、まさか魔法生徒が犯人だというのですか！？

「分からん。犯人の顔は見ておらんと言っておる。……じゃが、神崎先生は何者かによって斬られた事が分かっておる」

斬られた。すなわち、刃物による傷。
麻帆良女子中学、魔法生徒、そして刃物。その言葉から導き出される人物は1人だった。
夜の警備の際、常に野太刀を携えている女生徒の姿が頭に浮かぶ。

「A組の桜咲さんですか！？　ありえません！」

「……いえ、そうでもないかもしれません」

葛葉先生がどことなく気落ちした様子で呟く。
そう言えば、桜咲君は葛葉先生と同門……神鳴流の人間だったな。

「彼女は神崎先生を西のスパイではないかと疑っていました。襲う理由は……あります」

「……そんな」

ただそれだけの事で一般人に危害を加えるなど……許される事ではない。
確かに神崎先生は京都に住んでいたと話していたが、ただそれだけだ。彼からは魔力も気も感じない。一般人のはず。

「しかし、まだ分からん。犯人がわざと女子中の制服を着ていただけかもしれんし、あからさま過ぎる」

確かに、本当に桜咲君が犯人だとしても、そんな自分の犯行だという証拠を残してばかり行くだろうか？

「とにかく、刀子君は刹那君から事情を聞いてくれんか？　もしかしたら、彼女に恨みを持つ人間の仕業かもしれん」

「……わかりました」

その後、会議が終わっても全員の表情は晴れない。

……雲行きが怪しくなってきたな。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋａｎｚａｓｈｉ〕

寮に戻ると、虚と本音が必死にお姉ちゃんを押さえている現場に遭遇した。
当のお姉ちゃんは笑っている。でも、目が笑っていない。
私は知っている。その時のお姉ちゃんは本気でキレている時だと。
だから、見なかった事にしよう。

「かんちゃん、たっちゃん止めて～！」

……見なかった事に、したかった。
このまま放置しておいても間違いなく他の人の迷惑になるだろうし、
仕方なくお姉ちゃんから事情を聞く。

「何があったの？」

「玖楼が斬られたの。神鳴流の子に」

……事情は分かった。
でも、だからって報復に行っちゃダメ。神崎先生が斬られたって、

それワザと斬られたって事でしょ？　だったら、今お姉ちゃんが行ったら台無しにしちゃうよ。

「……そうね」

少しは冷静になってくれたのか、笑顔がようやく消えて真剣な顔になってくれる。……それでも怖いのは否めないけど。
でも、もうすぐ修学旅行だけど……大丈夫なのかな。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｈｏｕｋｉ〕

神崎先生が通り魔に襲われたという噂は、既に学園中に広がっていた。
普段、そういった噂に耳を傾ける事は少ないが、内容が内容なだけにさすがに見過ごせない。
……まぁ、先生の実力からするに、通り魔程度にやられたなどというのはあり得ない。何か裏があるのは間違いないだろう。

（しかし……）

いくら何でも噂に尾びれが付きすぎだろう。
何なんだ、その「神崎先生を襲ったのは百合属性の女の子である」とか「襲った理由はズバリ痴情の縺れ」とか……痴情の縺れって、神崎先生に失礼すぎる。
軽く尋ねてみたところ、その噂の発生源がA組らしく、さらに頭が痛くなった（その事で担任のネギ先生の顔が般若の如き形相を浮かべているらしく、英語の時間はマトモに先生の顔が見られなかった）。

「む？」

ふと、1人の女生徒が視界に入った。
確かA組の近衛だったか？　神楽坂と同室の。
気になったのは近衛当人ではなく、その後ろから物陰に隠れつつ後を付けている不審人物……もとい、剣道部の幽霊部員。

「……桜咲、何をやっている」

そう声をかけると、相手はビクッと身を震えさせたかと思うと、こちらを向く。
相変わらず無愛想なヤツだ。……まぁ、私も人の事を言えんが。

「何の用だ」

「特に用事はない。だが、ストーカー紛いな事をしていれば、誰だって気にはなる」

ストーカー紛いと口に出すと、桜咲の表情が僅かに歪んだ。
どうやら自覚はあるらしい。彼女に用があるなら、直接話せばいいだろうに。どうせクラスメイトなのだから。

「……お前には関係無い」

それだけ言うと、さっさと立ち去っていってしまった。
しかし、本当に何をやっているんだ？　どう見てもストーカーにしか見えんし……誰かに相談すべきかもしれない。

『神崎先生を襲ったのは百合属性の女の子である』

『襲った理由はズバリ、痴情の縺れである』

先ほど聞いた、根も葉もない噂が脳裏をよぎる。
百合属性……女が女に恋するというヤツだったな（姉さんが千冬さんに度々過剰なスキンシップをしかけるのを目にするが……いや、考えるのはよそう）。

「……まさか、な」

第２７話：ヒスコハ注意報！（前書き）

と言うわけで、タイトルから分かるでしょうけど彼女達がやって来ます。

……その内、またタグを追加しておかないと。

第27話：ヒスコハ注意報！

〔Ｓｉｄｅ　Ａｓｕｎａ〕

神崎先生の怪我もたいしたことないと分かり、ほっと安心したある日の午後。
ネギはそこまでナギに執着は無いという事が分かった。
エヴァちゃんから、ナギの別荘が京都にあると聞かされても「そうですか」と返していたし、話の節々からもそこまで強い執着は伝わってこない。
……まぁ、冷静に考えてみるとだけど、ナギってあまり父親らしい事してないし。

「それにしても京都ですか～……楽しみですね」

「やっぱり、ネギも興味あるの？」

「それはもちろん。有名な観光地ですし」

まぁ、普通に修学旅行を楽しみにしている子供ってところかな。
これでもちゃんと先生の仕事してるから、問題は無さそうだし。
……そう言えば、さっき学園長に呼び出されてたけど、何かあったの？

「あ、はい。関西呪術協会の長に親書を渡して欲しいと」

「……西の長に、親書？」

ちょっと待った。
少なからず、平穏とはほど遠い単語がネギの口から放たれた事に、思わず顔を顰めてしまう。

「僕も詳しく知らないんですが、東と西の仲違いに力を貸して欲しいと言われて」

「ネギ、今の西の長って誰だか知ってる？」

多分知らないだろうけど、とりあえず確認。
案の定、ネギは首を横に振る。
……どうやら学園長はネギに何も話していないらしい。それだけ大切な仕事をさせるなら、事前の情報くらい提供するのが普通だと思うんだけど。

「今の長の名前は近衛詠春。木乃香のお父さんよ」

「木乃香さんの！？　……あれ、という事は学園長の」

「義理の息子。昔、婿入りしたって話だし」

それを聞いて、ネギの表情が何だか怪訝そうなものへと変わってい

く。
そりゃそうよね。そんな事聞かされてなかったし、それだと木乃香も魔法関係者なんじゃっていう疑問も出てくるわけだし。そもそも何で木乃香が麻帆良にいるのかって話にもなるし。
……なんていうか、詠春って真面目キャラだったのに何でこうなってるんだろ。

「……僕、もう1度学園長先生と話してきます」

それだけ言うと、学校の方へと戻っていった。
しばらくは街をぶらぶらしていたけど、ふと何だか妙な2人組が視界に入ってきた。

「あらあら、相変わらずここは変わりませんね～。……呪っちゃおうかしら？」

「姉さん、馬鹿な事言ってないで早く行きますよ」

「もう、翡翠ちゃんひっど～い」

1人は明るい表情を浮かべてニコニコしている女性。もう1人はげんなりしたような真面目っぽい女性。
顔も背格好も似通っているから、多分姉妹……それも双子。傍から見れば、ごく普通の姉妹の会話だけど……。

「父様も大変ね～。なまじ教師なんてやってるから、厄介事の後始末に追われるんでしょ？」

「仕方ないですよ。それに今回は西の件でやって欲しい事があるみたいですし……」

思わず、目を見開いてその２人を見る。
西の件って……それに「父様」？
それにあの２人、何だか誰かに雰囲気が似てるような……。

「ま、父様のお呼びだもの。それに～、久々に千冬ちゃんの腕を見てみたかったり」

その名前が出た瞬間、理解した。
千冬の知り合いで「腕を見る」。この２人、神崎先生の関係者の可能性が高い。
間違いだったら謝ればいい。そう思い、２人に近づいて……。

「すみません、もしかしてですけど……神崎先生のお知り合いですか？」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

傷自体はそこまで深くなかった。
という設定にしたので、既に帰宅を許されました。
瑪瑙に頼んでいくつか噂もバラまいてもらったけど……何で痴情の縺れとかになってるんだろ。
ま、それはともかくとして……。

「父様、お待たせしました～！」

ついに来た。というか、何で来た。
いや、呼び出したのはボクだし、その辺りは仕方ないんだけど。

「……父様、申し訳ありません」

「いや翡翠、君は気にしなくていいよ。てか、何でここに神楽坂さんが？」

「何て言うか……成り行きで？」

まぁ、別にいいんだけど。
ざっと紹介させてもらうとだけど、姉の方が琥珀。妹は翡翠。瓜二つな容姿から分かるように、この2人は双子。そして2人の名字は共に「神崎」。……ここまで言えば分かるだろう。

「ほう、放蕩娘がようやく帰ってきたか」

そんな憎まれ口を叩くのは瑪瑙。それに反応するのは琥珀。
どこかニヤニヤした笑みを浮かべつつも、瑪瑙に対して意味深な視線を向けている。

「あらぁ～？　随分と顔を見ない内に少し皺が増えたんじゃありませんか、母様」

「……そなた、誰に向かってそんな口を利いておる」

2人の間に一触即発の空気が流れる中、ボクと翡翠は顔を合わせてため息を吐いた。
もう分かってると思うけど、この2人はボクと瑪瑙の間に生まれた

子供。血を分けた正真正銘ボクらの娘だ。
……ただ、どこでどう間違えたのか、琥珀の方は腹黒く育ってしまったけど（誰に似たんだろう）。

「とにかく君たちを呼んだ理由、分かるよね？」

「西の分からず屋を排除するためでしょう？」

翡翠の言葉に、思わずガクッとなってしまう。
間違ってはいない。間違ってはいないんだけど……。
あそこは表向き、正常に機能しているように見えるから厄介なんだ。
だから全員斬り捨てて解決する問題じゃあない。
ここでもし、近衛詠春を斬り捨てたら「次の長は誰になるか」という問題に発展する。その場合、白羽の矢が立つのは近衛詠春の一人娘、近衛木乃香だ。
当然かもしれないけど、彼女は上に立つ者として帝王学を学んでいるわけではない。だからその場合に待っているのは傀儡になる未来だ。西の人間か、それとも祖父である近衛近衛右門か……どちらにせよ、傀儡になる事だけは避けられない。
だからこそ、琥珀と翡翠の力が必要になる。

「もう向こうとは連絡が付いてるし、神鳴流の協力も取り付けた。後は君らの手腕次第というわけ」

「なるほど～。じゃあ私たちは好きにやっちゃってもいいんですね？」

「やり過ぎなければね」

ボクがそう言うと、琥珀は「きゃはっ」と笑った。
……翡翠はともかく、琥珀はいつもやり過ぎるから頭が痛い。
だけど、今回ばかりはそれくらいしてもらわないと無理だ。それ程まで、西の本山に巣くう害悪は根深い。

「神崎先生」

神楽坂さんが呆然としている。あ、いけない。すっかり忘れてた。
何でも“黄昏の姫御子”としての彼女は“紅き翼”と行動を共にしていたらしいし、その一員である近衛詠春に対しても思うところはあるはず。……反対する？

「……そこまで、マズイんですか？　今の西って」

「うん、かなりマズイ。……向こうからの情報によると、強硬派に動きが見られるらしいし」

もしかしたら修学旅行で何か仕掛けてくるかもしれない。
こっちには近衛木乃香がいる。向こうからしてみれば、最大の切り札にもなりかねない存在なのだから。
そういった情報がこちらに入ってくる事も含めて、近衛詠春が下を抑え切れていない事の証明だと言える。

「もし、修学旅行が無事に終わっても、今のままの状態が続けば間違いなく暴動が起きる。それこそ西を分裂させかねないほどの」

その隙を突いて、東が干渉してくる可能性も高い。
そうなったら、どれだけの犠牲が出るか……考えたくもない。

「……」

そんな仮定の未来を想像したのか、神楽坂さんの表情は悪い。
彼女自身、政治の道具にされて生きてきた過去を持つだけに、その意味がよく分かっているんだろう。

「武の英雄が未来を紡ぐ事は出来ぬ……か」

ふと、脳裏をよぎった言葉を呟く。
２０年近く昔に邂逅した、あの男の言葉。
彼が何を思い、何を考えて行動したのか。千年に及ぶ時間を生きるボクにも分からない。

「神崎先生？」

「いや、なんでもない」

……今更すぎる、か。
少なくとも、アイツらとボクらの道が交わる事はもう無い。

「あ、そうそう。すっかり忘れるところでした～。これ渡すようにって」

「え？　……琥珀、これ本物？」

瑪瑙の攻撃を捌き続けていた琥珀がいきなり差し出した手紙。
宛名や送り主の名前は書かれていない。けど、裏に一文字『風』と書かれていた。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇ１〕

結局、学園長先生には肝心なところは教えてもらえず、はぐらかされてしまった。
よくよく考えてみたけども、僕は（一応）英雄の子供だ。そのネームバリューがもたらす効果はいい物もあれば悪い物がある事だって知ってる。
そんな僕が、親書を持って京都へ行く。……問題が起きたりしないのかな？

『……確かに、怪しいな』

こんな時、頼れる相手は1人しかいない。
エヴァンジェリンさんに相談しようかと思ったけど、やっぱり「弟子になれ」という言葉の真意が分からないだけに、ちょっと個人的に接触するのは控えている。
周囲に誰もいないのを確認しつつ、今は遠く離れた異国にいる母さんに電話を繋いでいた。

「やっぱりそうですか？」

『ああ。考えてみよ、修学旅行に合わせて、そなたに親書を届けるように言う事自体おかしいぞ』

「……確かに」

当然、そうなって欲しくない人だっているだろうし、親書を狙ってくる人だっていてもおかしくない。
そうなれば、生徒を人質に取らないとは限らない。生徒に危害が及ぶ可能性だってある。
……学園長先生は、そこまで考えてなかったのかな？

『いや、もしかしたら……そなたに親書を運ばせる事その物が狙いなのかもしれん』

「どういう事ですか？」

『いいか？　東西の仲違いは裏の人間には有名じゃ。しかし、親書にとって手を取り合っていこうという姿勢を見せる。その親書を届けたのは英雄の息子。……言い方は悪いが、箔が付くという事になる』

「……」

母さんの言葉に、思わず手を握りしめる。
ここでも同じだ。何処へ行っても、みんな僕を“英雄の息子”として見ている。
みんな、ネギ・スプリングフィールドをナギ・スプリングフィールドを通して見ている。

「分かりました。ありがとうございます」

『うむ。しかし、どうした？　いつもより声が硬い気がするが』

「……実はちょっと、嫌な事があったんです」

嫌な事。それは、神崎先生が通り魔に襲われて入院したという事件。幸い命には別状はなく、今は自宅療養中だそうだけど……その事から、妙な噂が飛び交った。

曰く「神崎先生が襲われたのは痴情の縺れ」だとか。しかも、その噂の出所がうちのクラスで……。

「思わず怒鳴っちゃいました。『いくら何でも、言っていい事と悪い事がある』って」

神崎先生は、教師の仕事に不慣れな僕に色々とアドバイスしてくれた人だ。

奥さんとも仲がいいって新田先生が言ってたし（なお、新田先生は僕以上に怒っていた。何故“鬼の新田”と呼ばれているか分かった気がする）、そんな噂が本当なわけがない。

『……』

「？　母さん、どうかしましたか？」

『……いや、何でも無い』

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ａｌｉｃａ〕

ネギとの通話を終え、私はふうとため息を吐いた。
私たちが思っている以上に“英雄の息子”という肩書きは、あの子に重くのしかかっている。
あの子は聡い子じゃ。故に、自分に向けられる視線の異様さに気づいてしまう。

（理解者を得たのは唯一の救いか）

表の生活で支えてくれている教師がいると聞き、思わず肩をなで下ろした。
それに何人か、裏の事情を知った上で協力してくれている生徒もいるらしい。
しかし、先ほどの会話に出てきた「神崎先生」なる人物……まさかとは思うが。

「神崎玖楼ではなかろうか」

そう呟き、あり得んと首を振る。
あれが教師としているなど、到底想像できん。

「しかし、京都か……」

頭に浮かぶのは、かつての“紅き翼”の剣士。
青山詠春。現在は近衛家に婿入りし、近衛姓を名乗っている。
数年前に配偶者を亡くし、已む無く長の座に就いたと聞いていた。
しかし、あまりいい噂は聞かない。

「……何も起きなければいいが」

第２８話：私の何処がブラコンなのか説明してもらおうか　ｂｙ．千冬（前書き

後輩Ｍ．Ｙさんの回答「え、見たまんまそうですよ？　この前だって酔った拍子に昔（以下、プライバシーに関わるので検閲削除）」

織斑千冬のコメント「後で校舎裏に来てもらおうか」

幼馴染Ｔ．Ｓの回答「ちーちゃんはちーちゃんだから立派なブラコンさんだよ！」

織斑千冬のコメント「何故お前が答えている」

恩師Ｋ．Ｋの回答「中学時代から君の事知ってる身から言わせてもらうと、やっぱりそうだと思う。でも悪い事じゃないし、誇ってみたら？」

織斑千冬のコメント「解せぬ」

第２８話：私の何処がブラコンなのか説明してもらおうか　ｂｙ．千冬

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｒｉｓｈｕ〕

よう、最強オリ主の高天原鏡士郎だ。
もうすぐ修学旅行だって言うのに、学園が騒がしい。
何でも神崎の野郎が通り魔に襲われたらしい。ケッ、原作キャラならともかく、モブ１人が襲われたくらいで過剰なんだよ。
けど、刀傷だったとかで刹那が疑われてるらしい。何でも刹那が神崎の事を西のスパイじゃないかって疑ってた事が逆に疑われる原因になってるみたいだ。
……まさかとは思うけど、俺が夜の集まりでボヤいた「神崎って西のスパイじゃねーのか？」ってのが原因じゃないよな？

「いや、でも刹那は木乃香の事になると周りが見えなくなるみたいだしな」

もしかしたら……あり得るかもしれない。
ちょっと待った。それならそれでチャンスなのかもしれない。
疑われてる刹那の味方になって、ここで刹那のハートをキャッチ！！
修学旅行でもチャンスだろ。木乃香の護衛に協力すると言えば、あっちだって詠春の戦友とかで無下にはしない。その隙に……ぐふふふふ。

「今度こそ俺の時代がやって来た！」

よくわかんねー内に吸血鬼事件は終わってたし、エヴァや茶々丸からもつれない素振りを見せられてるけど、ここで一気に汚名挽回だ！！

「ねー、ママ。あの人なに？」

「しっ、見ちゃいけません」

〔Side Out〕

〔Side Houki〕

一夏から話を聞いて、私の（出来れば）当たって欲しくない推測は的中していた事が明らかになった。
なお、その話を聞いた他の面々の反応は……言わずとも分かるはず。

「それでその桜咲さんって人、どうなったの？」

「証拠不十分って事で、そこまで強く追求されなかったって。とはいえ、疑いが晴れたわけじゃないみたいだけど」

どうやら、神崎先生は怪我をする前後の記憶が曖昧なフリをしているらしく、事件の事は覚えていないと証言しているらしい。

「でも酷いよね。一方的にスパイだって思い込んで、それで襲うなんて」

シャルロットが言葉の端に怒りを滲ませながら、そう言う。
他の面々も同意見らしく、表情に不快感を隠せていない。

「心配ないと思うわよ。神崎先生もその仕返しで相当えげつない事考えてるみたいだし」

「「「あ～……」」」

私たちの考えは1つに纏まっていた。
神崎先生は普段温厚なだけに、1度怒ると手が付けられない。
1年前も、うちのクラスの人間が部活の上級生から酷いイジメを受けており、部活の顧問もそれを黙認していた事が発覚した。
自殺寸前にまで追い込まれ、ボロボロになった生徒を見て、神崎先生はキレた。

（社会的に抹殺されるか、再起不能レベルにまで追い込まれるか……）

その後、気がついたらその顧問教師は学園からいなくなっており、上級生もすっかり牙を抜かれて大人しくなっていた。
噂によると、職員会議が開かれた際、神崎先生の口撃によって完膚無きまでに叩き潰され、「生まれてきてごめんなさい」状態にまで追い込まれたとか。
……その辺り、うちの姉が絡んでいないか不安で仕方がない。

「多分、今回はあの時以上になるわよ。被害を受けたのが自分自身だし」

鳳の「あの時以上」という言葉に、桜咲には同情を禁じ得ない。
まぁ、自業自得なのだから仕方ない。下手に干渉して私まで被害が出るのは嫌だからな、うん。

「そう言えば、修行はどうなっている？」

ふと思いついた事を口に出した。
神崎先生の「ダイオラマ魔法球」なるものを使い、私たちは修行を行っているが、現在はそれぞれの発展課題に移っている。
私の現在の修行場は「雪山」。それも吹雪吹き荒れる氷点下５０度の、どこのアイスヘルなんだという恐ろしい場所だ。

「僕とラウラは順調。今は「砂漠」でちょっと手こずってるけど」

「あたし達も……まぁ、順調よね。「重力」はクリアしたし」

ふむ、どうやら順調らしいな。
しかし瑪瑙さんの話によると、何でも千冬さんは木刀１本で全ての修行状をクリアしたらしい。
……正直、あの人は既に人間やめてるんじゃないだろうか。この前なんてモップで普通に「九頭龍閃（くずりゅうせん）」とか「天翔龍閃（あまかけるりゅうのひらめき）」を繰り出して来たんだが。

「……箒さん、それ禁句（タブー）ですわ」

……ああ、自分で言っていて寒気がした。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈｉｆｕｙｕ〕

仕事中に関わらず、生意気な事を言った後輩の頭を掴んでいる最中、何だかイラッと来たのでそのまま掴む力を強める。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い！　つつつ、潰れちゃいます！　真っ赤なトマトみたいにぐしゃっていっちゃいます～！」

「安心したまえ山田君。今回は咸卦法も何も使っていない。だから、少なくともくしゃっと逝く事は無い。一般的にちょっと痛いくらいだ」

私の握力はそこまで強くない。
せいぜい、１００に届くかどうかだろう。これくらい普通だ。

「全く安心できません！　先輩の感覚と一般常識を比較しちゃダメです！！」

……ほう。
今のはちょっとカチンと来たな。これは束がバカ騒動を引き起こした時以来か。
どうやら目の前の後輩も失言に気づいたらしく、口を押さえて「しまった」と青い顔になっている。

「……私の耳が悪いのかな？　今の言葉はどうも、私の感覚は人間離れしているとも消えたのだが……」

真耶は必死に首を横に振るが……既に自分の死刑執行書に、自分でサインしたようなものだ。
周囲の同僚達からは「またか」とか「まぁ、事実だけど」と聞こえるが……まぁ、その辺りは後で聞くことにしよう。主に肉体言語で。
だが、その前に……。

「愚か者には粛正を」

「いだいだいだいだいだいだいだいだいだいだい～！！」

ほう、まだ言葉を発するだけの元気があったか。
これならもうちょっと強くしても問題なさそうだな。

「そのくらいにしておきなさいよ、千冬」

「……ナターシャ」

と、呆れ顔でこちらに近づいて来たのは同僚の１人。
……まぁ、いいだろう。少しは気も済んだ。

「それに、その子が言った事もあながち間違ってないじゃない」

「何故だ」

「少なくとも、弟の写真を仕事先にも持って来て、癒されてるあなたは充分にブラコンだから」

周囲を見渡すと、全員うんうんと頷いていた。
……解せぬ。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｏｎｏｅｍｏｎ〕

「……刀子君、これは間違いないのかの？」

「残念ながら」

刀子君の肯定に、儂は深くため息を吐いた。

……出来れば、知りたくなかったのぅ……。

「刀子君、彼女と同門である君に尋ねよう。神鳴流ならば刹那君にどんな処分を下す事になる？」

さまざまな情報を集めた結果、知りたくない事実が明らかとなった。

先日起きた神崎君の襲撃事件。その犯人が桜咲刹那君である事じゃ。おそらくその理由は……刹那君が神崎君を西のスパイじゃと思い込み、木乃香と話しているところを見て先走ったんじゃろう。

「即刻破門です。それも罪のない一般人を斬ったのですから、利き腕を潰し、全能力を封印した上で破門します」

……厳しすぎる言葉かもしれんが、それは道理じゃ。
かつて、神鳴流は過ちを犯した。罪無き人を斬り殺し、それを当時の幕府に咎められたという過ちじゃ。
人を守る剣が人を斬った。それ故に、今の神鳴流でそれは最大の禁忌となっておる。

「師範代には私から連絡を。学園長、学園においての刹那の処分ですが……」

「表向きは自主退学、という事になる」

さすがに、こればかりは儂も庇い切れん。
単なる疑いだけで人を傷つける。それは組織に属する者……否、それ以前に人間として最低の行動じゃ。
……いや、儂も人の事は言えんな。
明日菜ちゃんと木乃香の部屋にネギ君を放り込み、そのネギ君を未来の英雄に仕立て上げようとしておる。（その辺りはエヴァの一件で失敗したも同然じゃが）。
……儂も歳を取った、という事かの。

いつの間にか、目的と手段をはき違えておったようじゃ。そんな事に気づけんほど耄碌しておったとは。

「ちょうど修学旅行の事もありますし、正式に処分が下るのはそれが終わってから、という事になりますね」

「……うむ」

つまり修学旅行で木乃香を守る事が、刹那君の最後の仕事になる、という事か。

木乃香の護衛については儂の管轄外。元々、あの子はそのために婿殿が送り込んできた存在じゃ（麻帆良学園に属する以上、魔法生徒として活動してもらっておったが）。

あの子の木乃香を守らんとする想いは本物じゃ。……いつからじゃろうな、想いを忘れておったのは。

「スマンが刀子君、ネギ君を呼んでもらっても構わんか？」

「？　構いませんが、何か？」

「ちょっと、の」

第２８話：私の何処がブラコンなのか説明してもらおうか　ｂｙ．千冬（後書き

実は現在、以前ネタ倉庫に投稿したものを執筆しています。
特にＩＳ物をこっちに出してみようかと思っているんですが、どれを本格的に出すかで迷ってます。
特に「ＢＡＤ　ＥＮＤから始まるストーリー」は反響があったため、書いてみようかと思ってるんですが……４方向に分岐する事を考えています。

1，幽霊ルート…千春が幽霊のまま、他の面々を導いていく。別名、一夏・千冬の覚醒ルート。

2，束さん暗躍ルート…“天災科学者”篠ノ之束の力によって、現世に蘇った千春が影ながら一夏達を支えていく話。

こっちの２つは生存ルートです。

3，縁切りルート…奇跡的に一命を取り留めるものの、常に感じていた疎外感から織斑家と縁を切り、別人として人生を歩む事を決意する。

4，家族ルート…上の話の別パターンで、織斑姉弟の絆を強くしていく、ある意味正道ルート。こっちでは一夏がＩＣＨＩＫＡになったり、千冬がしっかりお姉ちゃんしてたりしますが、やや厳しい表現があったりするかもです。

まぁ、今現在これだけ考えていますので、何か意見があったらどうぞ。

第２９話：３年生、西へ（前書き）

ついに修学旅行の始まりです。
なお、アンケートはまだ募集してます。

1，幽霊ルート
2，束ルート
3，縁切りルート
4，家族ルート

詳しい内容は前話を参照です。

第２９話：３年生、西へ

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

さて、なんだかんだでついに修学旅行の日を迎える事となった。
僕たち教師陣は朝早くに駅に集合しており、日程等を確認し合っている。

「神崎先生。身体の調子は大丈夫ですか？」

「ええ、激しい運動さえ控えれば大丈夫と、お墨付きをもらいました」

まぁ、その辺りは全部、瑪瑙が術使って偽装したんだけど。
実際は傷も治ってるし、泳いだって大丈夫。
さて、問題は……。

（ネギ君、だよね）

神楽坂さん経由で、ネギ君が西の長への親書を持たされた事が分かっている。
なお、それを聞いた時の反応は……言わなくても分かると思う。
どちらにせよ、親書が渡るか渡らないかは関係無い。渡ったにせよ、近衛詠春が長として、その後行動を見せる事は無いのだから。

ちらほらと現れ始める生徒達。その中に、桜咲刹那の姿もある。

「……」

近衛木乃香の事を気にしつつ、こちらにも視線を向けてくる。
敢えて証言を暈かしたので、彼女は犯人として糾弾はされていない
（近い内にハッキリするだろうけど）。
が、どうやら相当絞られたらしく、こちらを見る目には敵意が満ち
ている。……逆恨みだっていうのに。

（ま、別にいっか）

仕込みは全て済ませてある。
なお、今回の彼女の行動は神鳴流の師範代に通告済みだ（笑顔に凄
い青筋浮かべてた）。そっちの方で、キツ〜イ処分が下るだろう。
……それに、ボクとしてもこのままなぁなぁで済ませるつもりも
無い。

（……死ぬほど辛い生き地獄ってヤツを味わわせてあげるよ）

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｉｃｈｉｋａ〕

「……神崎先生、悪い顔してるなぁ」

「そうだね～」

あの様子だときっと、どんな風に仕返しするか考えてるんだろうな。確かに今回の事は桜咲さんの自業自得だから、助けたりするつもりはない。……下手に関わって、巻き込まれたくないし。

「たっちゃんも大変だったんだよ～。私とお姉ちゃんで必死に押さえて、かんちゃんが来てくれなかったら血の雨が降ってたかも」

余ってる袖をぶんぶん振り回しながら、のほほんさんがそんな事を

言う。
確かに、楯無さんだったらキレて殴り込みをかけかけない。あの人、身内関係の事（主に先生や簪）に関しては沸点低いから。
……にしても。

（のほほんさんほど『必死』という言葉が似合わない人はいないだろうな）

正直、のほほんさんが必死に何かをしている光景が想像出来ない。この人、普段からはんなりしていて、テスト期間中もそこまで必死に勉強していなかったけど（寧ろいつも通りだった気がする）、何故か成績は上位の方をキープしている。
のほほんさんはのほほんだからのほほんさんなのだ。

「……おりむー、今失礼な事考えなかった？」

「いや、別に」

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｏｎｏｅｍｏｎ〕

誰もおらん学園長室で、儂は静かに目を閉じる。
蘇るのは……昨日のネギ君とのやり取り。

◆◇◆◇◆◇

来てもらったネギ君にそう言うと、「分かりました」と親書を出してくれる。
中身は正式な形の親書ともう1枚。……ぶっちゃけ、婿殿だけが見るだけならええが、さすがに他の誰かに見られたらアウトじゃろうと思うものが。
色々と思うところがあったのは事実じゃし、ネギ君に新しく書き直したものを渡す。

「それとじゃが、道中妨害があるかもしれん。こっちの古い方は親書としての効力は無いし、囮にでも使うといいじゃろう」

「ありがとうございます」

2通の親書を受け取り、頭を下げるネギ君。
……真っ直ぐじゃの。真っ直ぐすぎて、思わず直視出来ん。

「……ネギ君、君は“偉大な魔法使い(マギステル・マギ)”となる事を望んでおるのじゃな？」

「はい」

「父親(ナギ)のように、かの？」

これはほとんど確認に近いものと言っていい。
ネギ君がどう答えるか。それはだいたい予想できておる。

案の定、ネギ君は静かに首を横に振った。

「……僕は、父と同じ道を征けないと思います。僕と父は違いすぎますから」

……やはり、の。

以前、ネギ君の祖父……メルディアナの校長で儂の旧友なんじゃが、そやつから聞いた事がある。

ネギ君はナギを拒絶した、と。

詳しくは分からんが、ネギ君はナギの事を極力話題にしておらんかったという。

「ならば、君はどんな道を望むのじゃ？」

これは意地悪な質問かもしれんの。

どう在りたいか。何になりたいか。これはネギ君より年上の者でさえ、定まっておらん事じゃからな。

しかし、ネギ君は静かに口を開いた。

◆◇◆◇◆◇

「『泣いている誰かに手をのばせる、そんな存在になりたい』。……本当に天晴れじゃ」

思えば、すっかり忘れておった。
儂がこうして今、麻帆良で魔法使いをしておるのは「東西の架け橋になりたい」と思ったから。
そのために半ば勘当状態に近い形で家を飛び出し、麻帆良でがむしゃらにやってきた。
……じゃが、いつの間にかそれを忘れ、ただ欲に囚われた老害となってしまっておった。

（未来を作るのは、儂らのような老兵ではない。ネギ君のような子供達じゃ）

じゃから、親書にも新しくある事を書き加えた。
……儂らの今後に関する事を。
今からでも間に合うかどうか分からんが……それでも、やれるだけの事はやっておきたい。

「……しかし」

既に親書を持ってネギ君が関西へ入る事は知られておるじゃろうし、手荒な真似をする者が出てきてもおかしくない。
木乃香を狙う可能性もあるし……うーむ、いくら高天原君といえど、少し危ないかもしれん。
あまり気は進まんが、魔法先生達をいつでも救援に出せるように準備だけはしておくべきかもしれんの。……タカミチは今海外じゃが。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ〕

忌々しい呪いの所為で学生生活を１５年も続けていたわけだが、これまで１度も麻帆良の外へ出た事は無かった。

何故なら、あのバカのかけた呪いが目茶苦茶にねじ曲がり（じじいがいつの間にかしかけた学園結界と連動する仕組みもあったが）、麻帆良から出る事が叶わない身となってしまったからだ。
そのために学園結界の外には出られず、修学旅行も休むハメになっていた。
だがしかし！　私は解き放たれたのだ！　あの忌々しい呪いから！

「ふ……ふはははは……はーっはっはっはっはっは！」

「やかましいッ！」

すぱんっ！

「ぐはっ！」

後ろから叩かれ、何だと思い後ろを向くと、そこには呆れ顔の神楽坂明日菜の姿があった。

「朝からハイテンション過ぎんのよ！　いくら外に出られるからって、少しは大人しくしなさい！　みっともない」

「す、すまん」

私とした事が、ちょっとはしゃぎすぎていたか。

これではあのノーテンキなクラスメイト達と変わらん。

「……それよりさ、エヴァちゃんはどう思う？」

「何がだ」

「西の様子。神崎先生の話だと、相当危ないらしいけど」

そうらしいな。
何でも、１０年前に近衛詠春が西の長になったそうだが、下を押さえ切れておらんと聞く。
……まぁ、私にとっては関係無いし、興味のカケラもないのだが。

「ネギが詠春宛ての親書を持ってるんだけど、狙われるんじゃない？」

「だろうな。じじいがそんな事を言っていたし」

よく知らんが、じじいが「東西の今後」に関する事を書いたとか言っていたな。
その上、神妙な顔で「ネギ君達を頼む」と言って来たが……正直、気味が悪かった。

「あのぼーやなら問題ないだろ。あれはあれでしっかりしている。
それより気にかけるべきは近衛木乃香だ」

「……あ、そっか」

近衛木乃香は近衛詠春の一人娘だ。
つまり、次の西の長として見込まれる候補者であり、その身には膨大な魔力を宿している。
充分狙われる要因はある、というわけだ。

（桜咲刹那が護衛として付いているらしいが……）

正直、あれが近衛木乃香を守りきれるかと聞かれ、答えられん。
実力はまぁ認めよう。だが、影ながらでしか護衛しとらんし、常時側にいるわけでもない。
……ま、神崎が「そっちの方は何とかする」と言っていたし、大丈夫だろう。
そんな事よりも、私はこの旅行を堪能させてもらう。何せ１５年ぶりだからな！

「ふふふ……はーっはっはっはっはっはっは！！」

「やかましいっつってんでしょ！！」

ずばんっ！！

第３０話：無垢なる翼は穢れに染まる（前書き）

後書きで発表とアンケートがあります。是非ご覧ください。

……タグに「ヘイト」か「劣化」を付け加えた方がいいのかな。

第３０話：無垢なる翼は穢れに染まる

〔Ｓｉｄｅ　Ｓｅｔｓｕｎａ〕

静かにこのちゃ……お嬢様へと視線を向ける。
お嬢様は楽しげにご友人方と談笑しており、私も思わずホッとする。

（そうだ、これでいい）

私はお嬢様を守れればそれでいい。
どんなに抗おうと、身分と種族の壁を越えることは出来ない。
ならば、私に出来るのは影ながらお守りする事のみ……。

（そして、もう１つ）

後ろの車両にいるであろう相手……神崎玖楼。
長の盟友、高天原先生によると「西のスパイ」である可能性が高いらしい。
あの夜、仕留めきれなかったのが残念でこの上ない。確実に息の根を止めておくべきだったと、今更ながら後悔している。

『刹那、お前は何も間違っていないよ』

刀子さん達に厳しく追及された後、高天原先生は私にそう言った。

『神崎は斬られて当然なんだ。お前は何も間違っていない。お前のやりたいようにやればいい』

優しく頭を撫でながら先生はそう言ってくれた。
そうだ、私は何も間違っていない。これがお嬢様をお守りするための最善の方法なんだ。
今回の旅行においても、お嬢様を守るために力を貸してくれると約束してくれた。
かつての英雄が力を貸してくれるのだから、怖い物などない。
正直なところ、ネギ先生は優秀な魔法使いだと聞いていたが……
やはり子供なのだから、そこまで信頼出来そうにない。
やはりその辺り、甘さが残るだろうから、神崎の事も話せないだろう。

（神崎……貴様の好きなようにはさせない）

この旅行で、確実に息の根を止めてみせる。
長に逆らう者達の仲違いにでもすればいい。その辺りは後でどうにでもなる。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈａｒｌｏｔｔｅ〕

日本で有名な観光地といえば、やっぱり京都や大阪が挙げられる。
この私、シャルロット・デュノアもまた、興味津々だったりする。

「京都か。噂には聞いていたが、実際に訪れるのは初めてだな」

「ラウラは見たい場所ってある？」

鈴以外は基本、観光地って行った事ないよね？
僕はやっぱり清水寺かな。例の飛び降りる舞台を見てみたい。

「私はアレだな。志々雄一派のアジトが見てみたい」

「「「「「……は？」」」」」

えっと、何それ。

「知らんのか。緋村剣心が志々雄真実と激戦を繰り広げた決戦の地でもあるんだぞ？」

……誰、それ。

僕とセシリアがぽかーんとしていると、若干こめかみを揉みほぐしながら、鈴が口を開く。

「……ラウラ。一応言っておくけど、『るろうに剣心』はフィクションだから。実際にあった話じゃないのよ？」

「何だと？　しかし、教官が飛天御剣流を」

「千冬さんを一般常識と比較しちゃダメだから！」

長い付き合いの鈴にすら「常識外れ」にされる千冬さんって……。それより、あの『九頭龍閃』って漫画の技だったんだ。シュバババって無数の突きを受けて、神崎先生吹っ飛んでたけど。そんな神崎先生も頭からだくだく血流しながら笑ってたのが記憶に新しい。

「ま、その辺は置いときましょ。あの人達は一般常識から逸脱した存在だから」

当人達が聞いたら間違いなく怒るだけじゃ済まないような事を言いつつ、鈴がそう仕切る。

「それより考えるべきは、一夏の事でしょ」

その言葉に、全員が思わずハッとなる。
そう。今回の修学旅行は麻帆良の全中学3年生が対象となっており、当然本校3年の一夏も参加している。
とはいえ、学校が違うのでどのようなルートで回るのかまでは把握できていないのだけど。

「それならば、この前一夏に聞き込んできた。2日目に私たちの行き先と重なるらしい」

箒の言葉に、思わず流石だと思ってしまう。
2日目と言うと、確か奈良だったよね。後は3日目の自由行動日……。

「……言っておきますが、抜け駆けは禁止ですから」

ジト目のセシリアがそう言うのも頷ける。
ちょっと油断すれば間違いなく一歩抜きんでようとする人が出てくるだろうから。
と、そんな時。前の車両から甲高い悲鳴が響いた。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇ１〕

景色に心を和ませていると、突然悲鳴が聞こえた。
いったい何だと思い、視線を向けると何故かカエルが大量発生して

いた。

「な、何ですかこれ！？」

いったい誰がカエルを持ち込んだんです！？

……いや、そうじゃなくて、どうしてこんな状況に？

「兄貴、あのカエルから魔力っぽいものを感じるぜ！」

「え……じゃあ、まさかこれって」

「ああ！　多分、関西呪術教会とやらの妨害だ！」

カモ君の言葉に、まさかと思いつつもカエルに意識を集中する。

確かに普通のカエルとは違う。もしかしてあれ、日本固有の使い魔……シキガミっていう物なんじゃ……。

「ね、ネギ君！」

「皆さん落ち着いてください！　保健委員は気絶した人の手当て、それから新田先生にも報告をお願いします！」

さすがに女の人はカエルが苦手な人もいるようで、長瀬さんやしずな先生も気絶してる。

……でも、この妨害の仕方ってどうかと思うんだけど。

「そう言えば親書は大丈夫なのか？」

「えっと……確か上着の内ポケットに」

そう言いながらも、偽物の方の親書を取り出す。
さすがに相手もどこに親書を仕舞っているか知らないだろうから、
ここで敢えて偽物を出しておく。
そうすれば、生徒でなく僕に狙いを絞ってくるだろうから。

「ほら、ここに」

僕が親書を出すと、その瞬間に手から親書を何かが奪い取る。
鳥？　でも、ここで仕掛けてきたのだから丁度いい。カモ君と視線を交わし、すぐにその後を追う。
車両を出ると、そこには親書を手にした桜咲さんの姿が。

「桜咲さん？」

「！！」

僕が声をかけると、あからさまに動揺する桜咲さん。

「……どうぞ」

そう言い、親書を渡してくれる。
このタイミングでここにいるっていう事は、もしかして桜咲さんが敵？
ふと視線を床に向けると、真っ二つになった鳥の形をした紙があるし……。

「……ネギ先生、気をつけてください。色々と敵も多いですから」

そう言うと、僕が問いかける間もなく、桜咲さんはすたすたと車両に戻っていった。
カモ君、どう思う？

「確かにアイツが敵のスパイって可能性も高いな。けど、学園長は何も言ってなかったんだろ？」

あ、そう言えばそうだよね。
もしクラスに敵のスパイがいるなら、学園長や高畑さんが気づかないはずがない。
修学旅行で妨害があるかもしれんって言ってたんだし、桜咲さんがスパイならそう教えてくれるはず。
そう考えると、桜咲さんは単に親書（偽）を取り返してくれただけ……？

「……情報が足りない」

そもそも、桜咲さんの立ち位置が分からない。
ここは事情を知っていそうな誰かに相談してみるのが1番かもしれない。

「アスナの姐さんに相談してみるっていうのはどうだ？」

「アスナさんかぁ……」

正直、あんまり巻き込みたくないんだけど……うん、話を聞くだけなら大丈夫かな。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

「……見たか？」

「見ました」

「見ちゃいましたね～」

妾たちは一般車両（くりーん車と言ったか？）におるのじゃが、先ほどの騒動についても既に玖楼から連絡が来ておる。
「遠見」で様子を見ていたところ、怪しげな動きをする女を１人見つけた。

「あれって確か、天ヶ崎さんトコの千草ちゃんじゃありませんでしたっけ？」

おお、そう言えばそうじゃな。母親に顔がそっくりじゃ。
あの一件以来会っておらんかったが、まさか強硬派に鞍替えしておったとはの……。
まぁ無理も無い。大戦で両親を亡くし、その両親の命を奪った西洋魔導師を恨むのはある意味当然の流れ。

……とはいえ、表立って動けないのは分かるが、さすがにこれは幼稚すぎると思うのじゃが。

「母様、どうします？　仲間もいないようですし、あの程度の相手なら、ここで押さえるのは難しくありませんが……」

翡翠の言葉に、妾は思考を巡らせる。
ここで天ヶ崎を押さえるのは簡単じゃ。ここからでも遠隔操作で術をかければ一発じゃからな。
……じゃが、ここは放置しておく事にしよう。

「あれ？　てっきり母様の事ですから、何かえげつない術でも仕込むのかと思いましたが」

……琥珀、そなたの中の妾のいめーじについて小一時間ほど追求したいところじゃが……まぁよい。
ここで奴を捕えないのにも理由はある。何故なら、妾たちはあくまで西の掃除が目的じゃ。ある意味目的が似通っている天ヶ崎について、放置しても問題は無い。
おそらく奴らの目的は親書では無く、近衛木乃香じゃからな。どうせリョウメンスクナの封印解除にでも使うのじゃろう。

「近衛木乃香に関しても、身体さえあれば問題無い」

術や薬で自我を壊されようが、身体さえ残っていればどうにでもなる。
まぁ、妾としては精神＋五体満足の方が後々面白い事になるし、出来ればそっちの方がいいのじゃが……。

「あ、分かります分かります。そっちの方が面白いですよね。何て言うか『キャベツ畑やコウノトリを信じている可愛い女の子に、無修正のポルノをつきつける時を想像するような下卑た快感さ』がありますよね」

「ほう……そなた分かっておるでは無いか」

「……姉さん、母様、自重してください」

おっと、話が反れてしまったな。
とにかく、ここで天ヶ崎に干渉するよりも、好き勝手やらせておいた方がこっちにとっても都合がいい。妾たちが動かずとも、勝手に勢力を削いでくれるだろうからの。

「それに、先代様がいらっしゃるようじゃし」

そう口に出すと、2人が目に見えるほどに凍り付いた。
……その様子じゃと、どうやらあの手紙の中身までは知らされておらんかったようじゃな。ま、知っておったら今頃逃亡しとるじゃろうし。

「か、母様……先代様が、いらっしゃるんですか？」

「らしいぞ？」

少なくともそういう風に書いてあったし。
妾はよう分からんが、どうも今回の事は先代様も相当お怒りらしく、
「1度京都行って詠春シバいたるわ」というような事が手紙に書いてあった。
……おーおー、いい感じに震えておるのー。

「も、もうあそこに突き落とされるのはいやぁぁぁぁぁ！！」

……うむ、さすがに全能力封印してケルベラス大渓谷に突き落とすのは、妾もやり過ぎじゃと思うたからの。
それを乗り越えた2人を凄いと思いつつ、少しだけ気の毒になった。

第３０話：無垢なる翼は穢れに染まる（後書き）

えー、以前からお話ししていたＩＳのＳＳについてです。
皆さんからも意見を頂いて、実際に数話書いてみたところ「家族ルート」を執筆する事にしました！
これは織斑姉弟の絆を描くもので、すれ違いつつあった姉弟が手を取り合い、未来を目指していくというものです。
若干、一部のキャラには扱いが厳しくなる時もあるかもしれませんが……。
最近はちょっと忙しいため、こっちに出すのは大分先になるかもしれませんけども、ご期待ください。

あともう１つ。今作品で登場するＩＳキャラ。
特に……仮に箒たちが仮契約した場合、会得するアーティファクトについて、皆さんのご意見を頂きたいと思っています。
一応、イメージとして決まっているものもあるんですが、中にはやはり全然思いつかないのもありまして……是非、皆さんのアイディアを寄せて頂きたいと。
ご協力お願いします。

第３１話：波乱続きの修学旅行

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

ぶっちゃけるとだけど、ボク達は昔、神鳴流と敵対していた。
ほら、神鳴流の役目は「京の街を悪しき者達から守る」事だけど、その悪しき者の境界線が分かってないんだよ。
だから、何も悪い事してない妖怪が斬られたりして、京都の妖怪を束ねてるボク達としてもさすがに困ってたってわけ。かといって、神鳴流を潰しに行ったら間違いなく報復が来る。それも表沙汰になるほど大きいのが。
そんな風に困ってた時、ボクらに協力しないかって話を持ちかけた組織があった。
人間の組織で……なんて言ったっけ、確かほら、すごい有名な奴。京都見廻組じゃなくて……えっとそう、新撰組だ。
京都を守るのが新撰組の任務だけど、いつもいつも神鳴流に邪魔されてばかりいて、さすがにキレる寸前だった。
前の局長は話の分からないのだったけど、その時の局長が割合話が分かる奴で、ボク達とも持ちつ持たれつの関係が望ましいと思ってたみたい。

『……ま、いいんじゃないの？　俺は引退組なんだし』

念のため、隠居してる先代様にも確認を取ったところ、「好きにしろ」という許可が出たため、新撰組に協力する事となった。
そしてそれからしばらくして……神鳴流の若い剣士が京都の人間

と揉め事を起こし、斬り殺すという刃傷沙汰に発展するという事件を起こした。
京都を守っているのは自分達だからと、そういう風に勘違いするバカはどこにでもいるって事だね。
で、元々神鳴流の中でもそんな風に問題を起こす人間はいて、これまでは西の本山が仕方なくもみ消していたわけだけど、ボクらがそれを知り、即座に新撰組に知らせる事によってもみ消しを阻止。さらに……。

『京都神鳴流は京を守るどころか民を斬り殺した！』

という噂をバラ巻いた。ま、事実なんだけど。
当然、人の口に戸は立てられない。噂はどんどん広がっていき、本山では対処出来ないまでになってしまった。
そして新撰組の人間にも頭のキレるのがいて、徹底的に神鳴流を追い込むため、神鳴流を倒すための大義名分を用意した。要するに……上にその事を知らせたわけ。
当然、上としても今回の事件を見過ごすわけにはいかない。そのためにも神鳴流と事を構える必要があると判断し、命令が下った。

（いや～、あれは大変だった）

神鳴流の本拠地に乗り込み、後の池田屋事件の如き流血沙汰になった。
え？　退魔師の神鳴流がただの人間に後れを取るのか？
だってさ、神鳴流の使う獲物は野太刀みたいなバカデカイ武器ばか

りでしょ？　大型の魔物を討伐する事が多いわけだし。それに対魔の技ばかり磨いても、それは同じ思考を持つ人間相手に通用するわけじゃない。だから神鳴流剣士は基本、人間相手の戦闘には不慣れって事。

それに対し、新撰組が主に戦っていたのは反幕府勢力……尊王攘夷派の維新志士。つまりは人間だ。当然、新撰組隊士の受ける訓練も人間相手を想定したもの。

両者が戦ってどちらが勝つか……勝敗は分かり切っている。

結果、神鳴流はほとんどが殲滅され、子供や老人、さらには女性などが生き残っただけだった（一応、宗家の人間は残しておけという命令が出ていたらしい）。

西の本山にも厳しい追及が行われ、西の勢力はガタ落ちになり、ボクらとしても過ごしやすい環境になったというわけなのだ。

「……しかし、懐かしいね～」

清水の舞台に立ち、あの頃の事を回想していたわけだけど……うん。

ここに来ると独特の空気が肌を刺す、というか……あれだよ。

「色々と、思うところがあるわけだね」

「……神崎先生、顔が怖いです」

おっと、いけないいけない。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇｉ〕

（兄貴、やっぱりこっちを見てるみたいだぜ）

ポケットの中に隠れてるカモ君がそう念話で伝えてくる。
ううん、正確には僕じゃなくて木乃香さんの事を見てるんだと思う。
アスナさんに確認を取ったところ、桜咲さんは木乃香さんの幼馴染で、何でも木乃香さんの護衛として『神鳴流』という流派から派遣されてるらしい。
……でも、その割にはこれまで、木乃香さんと桜咲さんが喋ってるところは１度も見た事が無いけど……。

「いいんちょズルーイ！　目開けてるでしょ！？」

「おーっほっほっほっほ、これで私と某N先生との恋愛は成就ですわ！」

……えっと、いいんちょさん達は何やってるんでしょうか。
とその時、いいんちょさんとまき絵さんの姿が一瞬で消えた。

「え！？」

何が起こったのかと、すぐさまその場に駆けつけると、陥没した地面に落ちてる2人の姿があった。
これって、落とし穴？　しかもカエルまで仕込んであるし……さっきの新幹線のと同じ犯人の仕業？

「大丈夫ですか、いいんちょさん、まき絵さん」

「は、はい」

「うーん……私が薄目開けてたからバチが当たったのかな」

いや、こんな人為的なバチはないと思うんですけど……。

（カモ君、桜咲さんは？）

（相変わらずこっち見てるぜ。ありゃ、兄貴が魔法使いだって知ってると見ていい）

要するに、僕がトラブルにどう対応するか観察してる？　……事情を知ってるなら、少しくらい手助けしてくれていいと思うんだけど。

いいんちょさんとまき絵さんを引っ張り上げつつ、さらに先へと進む。

……相変わらず、桜咲さんは憑かず離れずの距離を保ちつつ、僕や木乃香さんの事を注意深く見ている。

「……なんなんだろ」

まぁ、特におかしな事をする様子は無いので無視しておこう。

階段を下りて次に向かったのが、音羽の滝。

３つの筋で流れる水は、飲むとそれぞれ健康・学業・縁結びが成就するというらしい。……最後のを聞いて、皆さんがそこへと殺到する。

いや、あくまで迷信であって、本当に成就するとか分からないんですからね！？

あまり他の人の迷惑にならないよう注意しようと近づくと、変な匂いが漂っている。……あれ、この匂いどこかで。

「ダメだ！　全員これを飲むな！！」

その声が響き渡り、滝の周りにいた全員が動きを止める。
声の主は、この前助けてもらったF組の篠ノ之さんだった。

「えっと、篠ノ之さんですよね？　どうしたんですか？」

「ネギ先生、これは酒です！」

「「「「「……え！？」」」」」

まさかと思い、屋根へとよじ登る。
そこにはどんとお酒の入ったタンクが設置されていて、ホースから今もお酒が流れ出していた。
だ、誰がこんな悪戯を……！

「あ、な、なんか気持ち悪くなってきたかも……」

少しでも口にした人達が顔色を悪くしてその場にしゃがみ込む。
篠ノ之さんがすぐに指摘してくれたから良かったけど、もし指摘が無かったら、気づかずに酔いつぶれるまで飲んでたかも……。
その騒ぎを耳にしたのか、はぐれた人がいないか後ろからついてきていた神崎先生や新田先生が追いついてきた。

「ネギ先生、何かあったのですか？」

「滝の水にお酒が混ぜられていたんです！　それで飲んだ人が体調を崩して……」

「何ですって！？」

僕の言葉に先生達が頷き合うと、すぐさま動き出す。
新田先生は清水寺の事務所に問い合わせに行き、しずな先生と瀬流彦先生がお酒を口にした生徒達を介助しつつ誘導。神崎先生は旅館への連絡やバスの手配。
僕もとりあえずこのお酒を片付けておかないと……。

（やっぱりアイツ、こっち見てるぜ）

……ここまでの騒ぎに見てるだけっていうのには、ちょっとイラッと来たけど……今はそれどころじゃない。
カモ君、それとなく桜咲さんの事、見張っててくれる？

（合点承知！！）

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｌａｕｒａ〕

旅館へと向かうバスの中。私はさっきの出来事を回想していた。
箒の指摘で酒を飲まずに済んだため（飲んでしまった者達もいたが）、私たちの被害は皆無だと言っていい。……まぁ、セシリアが酒気に当てられたのか、少し頭痛を覚えていたようだが。

「あれって、神崎先生が言ってた関西呪術教会の妨害ってやつなのかな？」

隣に座るシャルロットの問いに、私は答えられなかった。
……正直に言うと、あまりにも幼稚な嫌がらせにしか見えなかったからだ。
もっとこう……暗殺者を送り込むとか、生徒を人質に取るとか、それくらいやってくるんじゃないかと思っていたんだが。

「ラウラ、さすがに普通の人の前でそんな過激な事したりしないって」

「しかし、悪の組織はとにかく過激な事が好きなんだろう？　石油コンビナートを爆破しようとしたり、幼稚園バスを襲ったり、大地震や大災害を起こそうとしたり」

クラリッサはこう言っていた。
それにこんな事も……。

『命ある限り戦う……それが仮面ライダーなのです！！』

その後ろの隊員達も皆、うんうんと頷いていたな。
……何の事かは全く分からんが。

「……あのね、別に関西呪術教会は悪の組織じゃないんだよ？　あくまで裏を束ねる組織であって」

「む、そうなのか？」

……少し残念だな。

「残念！？　何が残念なの！？」

「いや、悪の組織相手なら基本、何をしても許されるだろう？　それこそ殲滅して賞賛されても文句は言われんし」

「殲滅しちゃダメだからね！？　間違いなく東西戦争になっちゃうよ！」

まぁ、冗談はそこまでにしておこう。
あの様子だと、これからも嫌がら……じゃなく、妨害を続けてくると見ていい。
今回のように、ちゃちぃ妨害で無関係な生徒が危険に晒されるとなると……私たちとしても相応の対応をせざるを得なくなるだろう。

「……だね」

シャルロットは小さくため息を吐きつつも、鞄の中へと視線を向ける。
さすがに装備を全て持ち込むわけにはいかなかったが、必要最低限のものは神崎先生の許可の下、持ち込む事に成功した。
しかし、便利だな。その魔法とやらは。

「正確には霊術の一種で、『口寄せ』って言うらしいよ？」

「口寄せか……」

確か、渦巻き模様の金髪バカが巨大な蝦蟇を呼び出した話があったな。
……うん、ならば私は黒ウサギを喚んでみたい。きっとクラリッサ達も喜んでくれるだろう。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｍｅｎｏｕ〕

……ここへ来るのも久しぶりじゃな。
目の前にはごく普通の旅館がある。京都ならばどこにでもあるような旅館じゃ。
しかし、他の人間はまるで見えておらんように通り過ぎていく。

妾たちは中へと踏み入る。……中には誰も居らぬ。そのまま通路を進み、突き当たった襖を勢いよく開く。

「御館様、お待ちしておりました」

真白以下、多くの妖達がそこに鎮座していた。
ふむ、壮健であったか。ここは変わらんの。

「既に準備は整っております。ご命令があれば、すぐにでも攻め込む事が出来ます」

「いや、今回は戦は無しじゃ」

妾の言葉に、動揺が広がる。
ほれ、あまり事態を大きくすれば、妾達にとっても不都合じゃろう？
じゃから今回は、もう少し穏便に済ませる事にした。

「近衛詠春についてじゃが、こっちは玖楼がうまく仕込むと言うておった」

あれでも一応、大戦の英雄じゃからな。
殺したら殺したで後で厄介になる。ま、動けなくして表から消えてもらうのが1番じゃろう。

「ならば、次の長は？」

「現在、妾達は近衛木乃香を考えておる」

もちろん、上に立つ者として帝王学も何も学んでおらんし、まっさらな状態じゃ。

じゃからこそ、妾達にもやりようがある。そのためにこの2人……琥珀と翡翠を呼んだわけじゃ。

妾でも辟易するほど腹黒いこの2人なら、必ずや理想通りにしてくれるじゃろう。

「ちょっと母様、誰が腹黒いって言うんですか？」

「そうです。腹黒いのは姉さんだけです」

「翡翠ちゃん酷っ！！」

……まぁ、その辺は放置じゃ。

それよりも琥珀、例のものは出来ておるのか？

「ええ。準備は出来てますからね～♪」

朗らかに笑いながら、琥珀が取り出したのは小さな小瓶。

中には紫色の液体が詰まっており、間違いなく怪しい薬であると分

かる。

妾達にとって都合のいいようにさせてもらうとしよう。ついでにあの烏娘には少しばかりお仕置きじゃがな。

第３２話：束さんが空気キャラ？　そんなの認めないよ！　ｂｙ．束（前書き）

遅くなってしまいました。
いやはや、なかなかイメージが湧かないものです。

第３２話：束さんが空気キャラ？　そんなの認めないよ！　ｂｙ．束

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈｉｇｕｓａ〕

「ちぃっ……裏切り者の神鳴流剣士め」

あのひよっ子、生意気に旅館に結界なんて張りおった。
術を使えば破れん事も無いけど、下手に力を使えば見つかる恐れもある。
だがまあ、この程度の術なら誰かが外に出た時、同時に中に入れば簡単に侵入できる。

「それまで待つしか無いな……」

どちらにせよ、今は目立った動きを見せる時やない。
小太郎や月詠はんは戦闘中毒（バトルジャンキー）やし（やから雇えたんやけど）、あの白髪の新入りは何考えとるか分からん。
……てか、小太郎なんて動かしたら間違いなく拗れに拗れる事が目に見えとるし。

「……しかし何者や、あの赤毛のガキ」

東は「新しく赴任した魔法先生が１人加わる」とか言っとったらし

いけど、何であんなガキが教師なんてやっとんのや？
それにあのガキの顔、どっかで……。

「まぁ、顔はそっくりなんだから見覚えあるはずだよねぇ」

「ッ！？」

し、しもた！？　見つかった！？
振り向くとそこには、スーツ姿の男が１人。赤みがかった茶髪の……こっちもガキやないか。

「ガキ言うな！　少なくとも君の１０倍以上は生きてるんだからね！！」

「……はて？」

気のせいやろか。なーんか、今のやり取りをどっかでした事があるような……。
それに、この子の顔もどっかで見覚えがあるような。

「しかし、大きくなったね～千草ちゃん。最後に会ったのがスクナの事件の時だから、もう２０年近く前になるか」

「！？　アンタ、何者や」

リョウメンスクナの名前が出た以上、一般人やない。
それにウチに全く気づかれずに背後に回り込むやなんて……。
そう思い、咄嗟に身構える。

「忘れちゃった？　君ら的に言うと『九尾』の連れ合いって言った方が分かりやすいかな？」

「九尾の、連れ合い」

九尾ゆーたら、最高位の妖怪……妖狐や。
随分昔、京都を中心に妖怪達を纏め上げとった、最強の妖怪。
……待った。そう言えば、スクナの事件がどうとか言うとったな。
まだウチや小さかったけど確か……。

「ッ！！！！！！」

思い出した。そうや、思い出した。
大戦が終わって、おとんとおかんも帰って来んくて、それで長がサウザンドマスターや仲間を連れてこっちに来た。
何でおとんやおかんがおらんのにあんな奴らが居るのか分からんくて、それが憎らしくて……泣きじゃくっとった時、あん人達に会うたんや。

『む、ほれ泣くな。……玖楼、妾はこの場合どうしたらいいんじ

ゃろうか？』

『いや、ボクに振らないでよ。……あれ？　ていうより君、天ヶ崎さんの……』

その人達はおとんとおかんの知り合いらしくて、たくさん話聞いて……。

その夜、何でかは知らんけど、スクナの封印が解かれた。今も原因は分かっとらんけど、サウザンドマスターに恨みを持つ人間の仕業やとされとる。

それを長やサウザンドマスター達が封印したとされとるんやけど……噂によると、本当はそれを封印したんは『九尾』とその連れ合いやって話や。

そして、その九尾の連れ合いって言うんが……。

「神崎はん？」

「そうそう。よく覚えてたね～」

あん時と変わらん笑顔で、神崎はんは頷いた。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｎｅｇ１〕

……今現在、僕は旅館のロビーにて話し合い中。
もちろん、認識阻害が効いているので無関係な人達には取り留めのない会話に聞こえるようになってる。

「やはり、木乃香さんは狙われてるんですね？」

「はい」

目の前にいるのは桜咲さん。
まぁその……お風呂に入った時、木乃香さんの誘拐騒ぎがあって、それで改めて話を聞く事になったんだけど。
それによると、西の過激派の人達が木乃香さんの身柄を押さえようと動いてるらしい。
麻帆良にいる時も何度か狙われたらしいけど、その都度魔法先生達

によって阻止されているのだとか。

「木乃香さんを狙う理由。それは関西呪術協会の掌握ですね？」

「！　そこまでご存じでしたか」

「学園長先生から聞いています。木乃香さんは今の西の長の娘だと」

木乃香さんを人質として使うのかどうかは分からないけど、とにかく木乃香さんが西において重要人物である事は間違いない。

「……私は、お嬢様を守れればそれでいいんです。例え裏切り者と蔑まれようとも……！」

……確かに、桜咲さんの木乃香さんを守りたいという気持ちは本物だろう。

だけど、どうしてだろう。どこか刹那さんの様子から、狂気のようなものが感じられるのは。

ううん、それは今気にすべき事じゃない。これから考えるべきは今後どうするか。

「分かりました。僕たちも非力ながら協力します。一応、神崎先生や新田先生にさしあたりのない事情を話して、警戒してもらう事にしましょう」

もちろん裏の事情は話せないけど、不審者が現れたという事を話せば警戒を強めてもらう事が出来る。
向こうも一般人相手にそこまで過激な事は仕掛けてこないはず。だって本当にその気なら、新幹線や清水寺でももっと強硬手段を執っていても不思議じゃない。

「神崎……先生ですか」

？　なんだろう、神崎先生の名前が出た時、桜咲さんから変な気配を感じたのは。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

瑪瑙から聞いた時はどうかと思ったけど、まさか本当にあの千草ちゃんがね～。

「しかし、大きくなったね～。あの泣き虫が今や一端の陰陽師か」

「む、昔の話はやめてください」

顔を赤くして反論してくる千草ちゃん。
まぁ、２０年だからね。ボクらにしてみればあっという間だけど、人間にしてみれば成長するには十分な時間だ。

「……ま、昔話はさておき、真面目な話をしようか」

がらりと空気が変わった事に気づいたのか、千草ちゃんも顔色を変える。
まぁ、ボクらも似た様な事しようとしてるわけだし、千草ちゃん達がやろうとしてる事をあれこれ言う筋合いは無い。でもさ、一般人に迷惑はかけちゃダメでしょ？

「う……」

「中でもあれ、お酒はダメだよ」

中学生にお酒はまずい。篠ノ之さんが止めてくれたから良かったものの、下手したら中毒になってバタンキューだ。
やるならカタギに迷惑かけずにやらなきゃね。だからその辺は気をつけて。

「……止めへんのですか？」

「うーん……千草ちゃんには思うようにやってもらった方が、ボクとしても動きやすいんだよね。一応、今の西の体勢ぶっ壊しに来たわけだし」

そう言うと、千草ちゃんもぶっ飛んだ目でこっちを見てくる。
いやね、君だって分かってるでしょ？　近衛詠春が長である限り、そう遠くない内に限界が来る。そうなれば日本は本当に大きく割れる。
こっちの子達からもＳＯＳが来て、そろそろ何とかしないとマズイと思って、それで修学旅行の時期に合わせて何とかしようと思ったわけだね。

「それについてだけど、実はいくつか考えてある事があるんだ。勿論、神鳴流の協力は取り付けてある」

「へ？」

千草ちゃんに、その計画について説明する。
それを聞いて、当たり前だけど吹っ飛んだ。……いや、確かにそーゆー計画だっていうのは分かってるけど。

「ほ、本気どすか！？」

「うん、本気。てか、それくらいしなきゃダメって事だね」

琥珀と翡翠にもスタンバってもらってるし、後はこっちの準備が整えば全てＯＫ。
だから、君たちにもちょーっとお願いしたい事があるんだけど……
……いい？

「……ウチらは何をすればええんどすか？」

「簡単だよ。ちょっと耳貸してね」

それから千草ちゃんにいくつか話をして、それから別れた。
これでどうにか穏便に話を進める事が出来そうだ。
……え？　本山襲撃？　いやいや、そんなバカみたいな事なんてさせないって。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｔａｂａｎｅ〕

うーん、やっぱり暇なんだよね～。
いっくんも箒ちゃんもくぅくんもみ～んな修学旅行に行っちゃったし、ちーちゃんも仕事仕事って構ってくれないし。
ごろごろしてると、さんちゃんには蹴られるし……。

「たばね、うざい」

「さんちゃんひっどーい！」

冷めた目で私を見下してくるさんちゃん。
息子だけあってくぅくんそっくりだけど、くぅくんより増し増しで

Ｓだよね。見た目はちんちくりんなのに。

「ちんちくりんって言うな」

どこかむすっとした表情で、げしげし蹴ってくるさんちゃん。
あう、蹴らないで欲しいんだけど～……。
見た目１０歳前後の男の子に蹴られるのって、やっぱり絵的にはシュール？　と言うより、傍から見たら危ない人？
いや、いやいやいやいや！　束さんは至ってノーマルだよ？　その辺勘違いしないように！
そもそもさんちゃん、束さんの１０倍以上は生きてるし（見た目はアレだけど）。

「でも、やっぱり暇～」

こうなったら、束さんも京都へ行こう！
メタな話だけど、それくらいしないと束さんが空気扱いされちゃうよ。
原作の箒ちゃんみたいに「メインヒロイン（笑）」なんてご免だからね！　……ところで原作って何の話？

「……たばね、おとさんから止められてなかった？」

む？　そう言えば、昔何か言われてたような……。

……ああ、束さん達が修学旅行に行った時の話だね！　あの時は大変だったなぁ。
思えばあの頃は若かった。くぅくんに色々言ってくる西の本山とやらに、ちょ～っと爆弾テロ仕掛けたら大騒ぎになって、ちーちゃんには叩き斬られそうになったね（まぁ、逃げ切ったけど！）。
それ以来、くぅくんから「絶対に京都へ来るな」って言われてたけど、これまでずっと京都に行ってなかったからすっかり忘れてたよ。

「さんちゃん、ルールって言うのはね、破るためにあるんだよ」

「……おかさんもにたようなこと、言ってた」

むむ、あの女も同じ考えだったのか。
それはさておき、何でもかんでも私の所為にされるのは心外だよ。
１０年前の『ダンゴムシ事件』だって、あいつが首になったのは自業自得だし。『パンツマン事件』にしたって、あいつがブルーの縞パンを穿いてたのが悪い。
だから、束さんは京都へ行くことにした！　さんちゃんも行く？

「いく」

ふふふ、くぅくん大好きっ子のさんちゃんならそう言ってくれると信じてたよ。
さぁさぁ、束さんの秘密ラボ『吾輩は猫である（名前はまだ無い）』出撃！！

……玖楼達は知っている。篠ノ之束が常に、自分達の想像の遥か右斜め上を行く存在だと。

……玖楼達はまだ知らない。篠ノ之束が文字通り、関西で嵐を巻き起こす事になるのは。

束の所為で未曾有の大混乱が発生し、妹(ぼうき)が頭を抱え、友人(ちふゆ)がツヤ消しの目で刀を研ぎ、教師(くろう)が涙目になるのは数日後の事である。

第３２話：束さんが空気キャラ？　そんなの認めないよ！　ｂｙ．束（後書き）

その内、オリキャラの纏めみたいのを挙げる予定です。

第３３話：妾とて、時にはしんみりとする事もあるのじゃ　ｂｙ．瑪瑙（前書き

修学旅行１日目の日誌を書きなさい。

神楽坂明日菜の日誌
「旅行自体が初めてなので、見る事聞く事全て新鮮で、これからが楽しみです。でも新幹線ではカエルが出て来たり、清水寺では落とし穴があったり、お酒を飲まされかけたりと、悪戯にしては何だか手が込みすぎてる気がする。その辺りの危機管理はしっかりやってもらいたいと思いました」

ネギ・スプリングフィールドのコメント
「先生方と話し合って、今後の対応にも気をつけたいと思っています」

近衛木乃香の日誌
「うちは京都出身なので、久しぶりに故郷に帰れて懐かしいと思ってます。時間があれば一旦、実家の方へ顔を出しに行きたいので、ネギ君や新田先生に許可をもらいに行きたいと思います」

ネギ・スプリングフィールドのコメント
「そう言えば近衛さんは京都の出身でしたね。顔を出すくらいなら問題ないと思うので、後で新田先生と話しておきます」

ラウラ・ボーデヴィッヒの日誌
「４月２２日１２：５９、京都に到着。以後、清水寺を回るも何者

かの妨害に遭い、已む無く旅館へ向かう。明日の班別行動では奈良公園へ向かう予定なので、妨害を想定し、予め用意しておいた罠を仕掛ける許可を願いたい」

神崎玖楼のコメント

「君が仕掛けてどうするんですか」

第３３話：妾とて、時にはしんみりとする事もあるのじゃ　ｂｙ．瑪瑙

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｕｒｏｕ〕

千草ちゃんと別れて、見回りに戻ったボクは瑪瑙のお誘いを受けた。
……まぁ、どういうお誘いかは予想付くでしょ？　敢えて言うと、夫婦のコミュニケーションだね。
あ、もちろんだけど見回りは大丈夫。ちゃんと身代わり作って代わりやってもらってるから。

「……のう、玖楼」
「うん？」

コミュニケーションを終えて、ボクの隣に寝転がったまま、瑪瑙が静かに口を開く。

「後悔、しておらぬか？」
「……はい？」
「そなたと共に在って、既に１０００年近く過ぎておる。決して朽ちず、滅びを知らぬそんな身体にしてしまったのは妾じゃ。……妾を恨んでおらんか？」

……まぁ、あれから１０００年だからねぇ。
１０００年前。当時はほら、ＦＵＪＩＷＡＲＡだっけ？　なんかど

っかで聞いた事のあるお笑い芸人みたいな名前の貴族が幅を利かせてた時代（一般人のボクには関係無いのだけど）。
ボクは一応、当時は普通の人間だったわけで、行き倒れだった瑪瑙を助けて、何年か一緒にいて、普通に夫婦になってそれで……。

『九郎、逝くな！　妾を……妾を1人にしないでくれ！！』

身を引き裂く痛みと、全てを燃やし尽くす劫火の中、悲痛な叫びが響いていた。
……そりゃあさ、全く気にしていないって言ったら嘘になるよ？
あれを使うって事がどういう事なのか、母さんから託された時に強く言い聞かされていたから。
だけど、瑪瑙はそれを知りながらも、蓬莱の薬をボクに飲ませた。
それだけ愛されてたのは嬉しいけど、やっぱりボクとしては複雑なわけで。

「そなたから人間としての時間を奪ったのは妾じゃ。……本来なら、妾にそなたの隣を歩く権利など」

いい加減煩くなってきたので、強引に瑪瑙の口を塞ぐ。
昔からある古典的な方法。本当な愛を紡ぐための方法で。

「複雑だったのは本当だよ？　でもそれ以上に、君と一緒にいたいって思ってるのも本当」
「く、玖楼……」

ただ、微笑めばいい。
ただ、抱きしめればいい。
……本当に便利だよね。言葉にせずとも、愛を伝える事は出来る。

「……少し、なーばすになっておったようじゃの」
「そりゃ、懐かしくもなるでしょ。ボクらが出会ったのも京都だし、色々と濃い経験してるのも京都だし」

現地に来れば、思い出す事の1つや2つある。
当然、いい思い出だけじゃなく、思い出したくもない事だってある。
……具体的に言うと、何年か前の修学旅行。主に束とか束とか束とか。
……あれ、何でだろう。どうしてボクが京都で苦労した思い出が、あのバカで埋め尽くされてるんだろう。

『それは束さんの愛ゆえだね！！』

頭の中にまで出てきたバカをかき消しつつ、瑪瑙の身体の柔らかさを堪能する。
……しかし、ここでもう少し懸念しておくべきだったのかもしれない。
どうしてあのバカが頭の中に出てきたのか。苦労した過去を思い出したのか。もうちょっと気を払ってさえいれば、もう少し穏便に修学旅行を終える事が出来たのかも知れない……。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｔｈｅｒ〕

「よろしければ今日の自由行動……私達と一緒に回りませんか！？」

いつもは控えめなその声に、食堂の空気が止まった。
その言葉が向けられたネギもそうだが、３－Ａの生徒は大半がその声の主へと視線を向けている。
声の主は宮崎のどか。通称「本屋ちゃん」と呼ばれる、内気で大人しい少女だった。

（えっと……どうしよう）

ネギは静かにそう思案し始める。
２日目の自由行動において、別に教師は特定の行動を取る事は義務づけられていない。
のどかの５班には、西の刺客に狙われる木乃香がいる。自分も５班と行動を共にして、護衛に専念すべきか？

「……分かりました。では、今日は５班と一緒に回る事にしましょう」

その瞬間、生徒達から歓声が上がった。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｒｉｓｈｕ〕

「ではやはり、神崎は西の……！」

うんうん、やっぱり刹那は素直でいい子だな。
やっぱりさ、ＩＳキャラを攻略するにはＦ組担任の神崎が邪魔なわけなんだ。
修学旅行で西の人間の仕業に見せかけて、刹那が神崎を殺っても問題ないだろ？　その後で起こる問題とかは全部、俺がもみ消せばいいわけだし。

「ああ。考えてみろよ、新幹線や清水寺での騒動。こっちに向こうのスパイがいたら、仕込むのも簡単だろ？」

「……そういう事だったのか！」

いや、この辺は適当だがな。
しかし……嘘八百で簡単に騙されるのは、俺でもさすがにどうかと思うぞ？
ま、これくらい素直なのも可愛いんだがな。

「刹那、まだ動くなよ？　俺の掴んだ情報だと、木乃香を狙う連中は3日目に本山を襲撃する計画を立ててるらしい」

「それは本当ですか！？　ならばすぐにでも長に連絡を……」

「いや、それは俺に任せてくれ。お前はそれに合わせて、神崎を倒すんだ」

1番脅威なのはフェイトで、その次が月詠。……は？　サル女？　あんなの小物だろ。

本山の結界を俺が強化すれば、奴らは入って来られない。

だが、ここは原作通りに本山を襲撃させて、木乃香を誘拐させる。

で、刹那は奴らの仕業に見せかけて、神崎を始末する。その辺はうまく神崎をホテルから連れ出すなり、何とかしてもらおう。

俺？　そりゃあもちろん、薬味の代わりに木乃香救出に決まってんだろ。

妖怪共が現れた時、俺が華麗に参上！　さっと蹴散らし、スクナが召喚される前に木乃香を救出！　サル女は……まぁ、捕縛しとこう。

「刹那、何があろうとも俺はお前の味方だぜ」

「高天原先生……」

ここでギアスでも使えば一発なんだろうがな。「俺の奴隷になれ！」とか。

けど、ウザクも言ってただろ？　「間違った方法で手に入れた女に

意味などない」って……違うか？
ギアスを使うのは本当に最後の手段だ。それに、今の刹那にそんなものを使う必要は無いしな。
さぁ、次は木乃香だ。カッコよく救出して、フラグゲットだぜ！！

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｉｃｈｉｋａ〕

おーおー、本当に鹿せんべいって食べられるんだな。
鹿が食べるから鹿せんべいって言うんだと思ってたけど……うん、悪くない。

「そう言えばおりむーって、京都来るの初めて？」

隣で「しかのふん」なるお菓子をポリポリしていたのほほんさんが、そう尋ねてくる。
ちなみに、いつも通りに袖の余る制服を着て、どこにいてものほほんとしている。
……この究極的にマイペースなところは、俺も見習うべきなのかもしれない。

「ああ。……まぁ、旅行自体行った事無かったし」

ほら、うちって千冬姉と2人だけだろ？
あんまり家計を圧迫するような事は出来ないし、旅行と言えるようなものと言えば、せいぜい小学校の行事で遠出したくらいだ。
のほほんさんや簪はどうなんだ？

「ん～……私も似たようなものかな～」

「うん。でもお金とかじゃなくて、家の事情で」

あ～、そっち方向か。
楯無さんや簪の家……更識家は、何でも対暗部用の暗部（分かりやすく言うと、対スパイのカウンター）で、政府とも繋がりが強いらしい。
その関係で、小さい頃から色々とあったらしく、そこまで自由に過

ごせたりしていなかったとか。のほほんさんの家もそんな更識家に仕える家なので同じく。

「……家の問題って、どこも複雑だよな」

俺の場合、家と呼べるのか定かではないが……とにかく、極めて複雑とだけ言っておこう。何せ、国家レベルの問題だ。
そう簡単に解決するような問題じゃないってのは分かるんだが、何とかならないもんかなぁ……。
と、そんな風にしていた時だった。女の子が1人走り去っていったのは。

「ん？」

「あれ、今のって……」

「A組の宮崎さんだね～」

泣いてたように見えたけど、何かあったのか？

〔Side Out〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｋｏｈａｋｕ〕

……ねぇ、翡翠ちゃん。ここでサクッと殺っちゃった方が楽じゃないかしら？

「ダメですよ姉さん。父様の言いつけを忘れたんですか？」

「そうなのよね～……」

ため息を吐きつつも、そんな私達は目的の人物をこっそり監視中。
西の本山の守護結界って、確かにすごいと思うの。
さすがは西を束ねる総本山！　と言ってあげたいところなんだけど……でもね、ちょっと化けただけで潜り込めるってどうなの？
さっきも普通に挨拶したら「お疲れ様です」って返されたし。

「父様も過激派の人達とも渡りを付けたって聞いてるし」

天ヶ崎千草さん、だったかしら？
今回の妨害とかは全部、その人が中心になっての独断だったらしい。
まぁ、昔から過激派な人達には、もうちゃんと仕込みは終わってる。
本当におバカな人達でしたね～。ちょちょいとお酒に秘密のお薬を混ぜ込むだけで済んじゃいました。

「でもやっぱり、お姉さんとしては始末した方が楽だと思うのよね～」

「きっと、そのほうがらく」

「そうでしょそうでしょ？　珊瑚ちゃんもそう思う……え？」

い、今、この場にいてはならない子の声が聞こえたような気が。
翡翠ちゃんも目を見開いてるし……って、ええっ！？

「こはく、ひすい。ひさしぶり」
「さ、ささささ珊瑚ちゃんっ！？　何でここにいるのっ！？」

びっ、と手を挙げて挨拶して来たのは、水色の髪の男の子。
名前は神崎珊瑚ちゃん。名字で分かると思うけど、私達の末の弟。
でも、本当なら珊瑚ちゃんはここにいちゃいけないはずの子。だって、珊瑚ちゃんはいつも……。

「たばねといっしょにきた」

何年か前に出入り禁止を喰らったはずの人の名前を聞いた瞬間、私達は凍り付いた。

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｈｏｕｋｉ〕

奈良公園にて、どうやって一夏に近づこうか考えていた時、見覚えのあるものが視界に飛び込んできた。

地面から生えているのは……ウサギの耳。側にはご丁寧に「優しく抜いてね？」と看板が。
……それを見た時の私の反応は、言わなくても分かると思う。

「……し、篠ノ之さん。これって」

私を心配して駆け寄ったクラスメイト達もそれに気づき、私を気遣うような言葉をかけてくる。
心配してくれるのはありがたい。だが、頼むからそれだけには触れないでくれっ！！

「見なかった事にしよう」
「え、でも」
「私達は何も見なかった。そう、見なかったんだ」

ここにウサミミなど埋まってないし、看板なんて見ていない。
さっさと神崎先生にでも連絡して、焼却処分にでもしてもらおう。
そう思い、ウサミミに背を向けて歩き出そうとした、その瞬間だった。

「箒ちゃん、ひっどーい！　お姉ちゃん無視するなんて！」

地面から、出来れば他人だと言い張りたい相手がズボッと生えてきたのは。

クラスメイトからは静かに肩を叩かれる。……頼むからその哀れみを込めた視線を向けるのはやめてくれっ！！

「……何でいるんです？」

胸の奥からこみ上げる怒りを押し殺しつつ、目の前のバカを叩き斬りたいという欲求に身を任せず、その質問をひねり出す。
いや、落ち着け私。もしかしたら、京都で何か起こるのかもしれない。
前に一夏や千冬さんの前に現れた時も、何か忠言めいた事を言い残していったと聞いているし、まさか……。

「決まってるじゃない。楽しそうだからだよ！！」

……この人にシリアスを期待した私がバカだった。
そもそも姉さん、あなた自分が修学旅行行った時、京都で騒ぎ起こして出入り禁止喰らったんじゃないんですか！？
千冬さんが言ってましたよ。『あの時ほど、あのバカを殺したいと思った事は無い』って。

「うんうん。あの時のちーちゃん、目が据わってたからね。さすがの束さんも本当に斬り殺されるかと思ったよ」

いっそ斬り殺されればよかったのにと思いつつも、千冬さんが殺人

犯にならなくてよかったという複雑な思いが芽生えた。
いや、きっとこの人の事だから、斬り殺されたとしても次の日にはぴんぴんしているには違いない。そーゆー人なんだ。

「ま、そーゆーわけだから、いっくんやくぅくんによろしく！　東さんはさんちゃんと一緒に観光するから！」

それだけ言うと、ハイテンションなノリで走り去っていった。
……とりあえず、神崎先生に連絡だけはしておこう。『ウサギがやってきた』と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8361u/

魔法先生ネギま！ ～御狐様が見てる～

2011年11月4日14時57分発行